

---

# 俺達のRPG物語（改）

聖魔光闇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺達のRPG物語（改）

### 【Nコード】

N39680

### 【作者名】

聖魔光闇

### 【あらすじ】

人々を襲う動植物。それは全ての始まりだった。狩りと称し、戦闘を繰り返る少年達。別れと出会い、殺戮を繰り返し彼等は強くなっていく。その行く末に待つモノとは。

## 序幕（前書き）

小説というより台本に近い文章構成になっています。

R18に載せていたのですが、特に性的描写も極めて少ない為、短編連載にて再投稿しました。

興味のある方、読んで下さい。

感想など頂けるとありがたいです。

## 序幕

それは、突然やってきた。

ニョースキャスター「それでは続きましての話題です」

ニョースキャスター「昨年から、動植物を中心に広がりをみせている、新型のインフルエンザですが、昨日大阪にて人の感染が確認されました」

ニョースキャスター「このインフルエンザですが、発症するとどうなるのでしょうか？」

解説者「そうですね、従来のインフルエンザであれば、感染・発症後風邪のような症状が現れ、その後39 近い高熱を出すのがインフルエンザの特徴ですが、今回の新型は、風邪症状が全く見受けられず、高熱を出すという事もかなり稀なようです。症状としては、今まで動植物の感染例しかなかったので、はつきりした事は申し上げられませんが、発症後突如意識不明の状態になり24時間〜48時間後に意識を回復します。ただ、この意識回復時に性格に変化が生じ、一律に攻撃的になり、植物の場合であれば、自我の生成と共に、移動手段が確保されます。これに伴い、植物が人間又は他の動物を襲うという例が確認されています」

ニョースキャスター「それでは、このインフルエンザにかかった後の対応ですが……………」

男「そんなの分かってるよ。バカじゃねーのこの番組」

男は、そう言って無造作にTVを消した。

『そう、今となつては当たり前前の事だ。近所の犬や猫が突然狂暴になつて人間を襲つたり、その辺の雑草や木が、根っこで歩いてたり……。近所のガキ共は、面白がつてバットやエアガンなんかを持ち出して、モンスター狩りだとか言つて、学校も行かず毎日毎日、集団で行動しては、人間以外の生き物を何の感情も無く殺しまくつ

てる。隣の家じゃ、家族同然に飼っていたワニがインフルエンザにかかったらしく、泣く泣く包丁で滅多刺しにしてたっけ……』

『でも、……ん？ えっ、人間の感染者？』

男は、もう一度慌ててTVを付け直した。

バトル！！

「おーい！ 正志！ 今日も行こーぜ、モンスター狩り！」

正志「おいおい、頼また行くのかよ」

頼「あつたり前じゃん！ 今日こそは負けねーからな！」

俺の名前は、かんざき まさし神崎正志。で、このハンティングに誘ってきてるのが、親友の栗原頼。くりはら らい

俺達は、ほぼ毎日このハンティングで、どちらが多くの獲物を倒すことが出来たか、競争をしている。今のところ俺が19勝5敗で勝っているのだが、頼にはそれが気に喰わないらしい。

頼「当たり前じゃねーか。散々、お前に負けてばっかの俺じゃねーぞ。今日からは、もう負けねー。なぜなら…、こいつ、こいつがあれば、もう絶対に負ける訳がねーからだ」

正志「おつ、またまた何か秘策か？ 毎回飽きないねえ、お前も今回の秘策は何だ？」

頼「おつ！ 興味あり？ じゃあ、教えてやるよ。今回は、これ。つて言っても電話じゃ見えねーか。刀だよ。家の蔵の中を、何かいい武器はねーものかと探し回ったら、出てきたよ。やつぱこいう時は蔵だねえ。ゲームとかなら、武器屋なんだろうけど、そんなねーしな」

正志「刀！ うそっ！ また物騒な物見つけてきたねえ。これは、俺の最強伝説も終わりかねえ。なーんてな、そんな訳ねーじゃん。俺のこの最強装備が負ける訳ねーての」

頼「へっ、言ってくれんじゃねーか。よし、今から勝負だ！ すぐ行くから逃げんじゃねーぞ！」

正志「あつ！ おい！ 今からって。……ってもう切れてるし。しやーねーなあ、じゃあ俺も装備の準備するか」

## 急病人

男「おい！ 浩二！ しっかりしろ！ おい！ 浩二！ 浩二つてよ！」

看護師A「そのあなた、邪魔！ どいてくれる！」

浩二と呼ばれたぐったりとした男を乗せたストレッチャーを小走りで押しながら看護師が大声で周りの人に怒鳴り散らしている。

看護師B「あの。ちよつとすみません。あなた、あの方を連れてきた方ですよね」

少し今の状況にしては、おっとり過ぎる口調の看護師が話し掛けてきた。

男「あ、はい。そうですけど、なんですか。あいつ。浩二、大丈夫なんですよね？」

看護師B「それは、今から検査を行いますので、結果が分かり次第お伝えしますので…。それでですね、あの方があのような状態になった時の事を詳しくお聞かせ頂きたいのですが、よろしいでしょうか？」

男「あ？ ああ。あの時の事ね。でも、そんなの何で必要なんですか？ 浩二は、浩二は大丈夫なんですよね」

看護師B「浩二さんの事は、これから検査をいたしますので、その検査結果が出るまで何とも申し上げられませんが、あの方……浩二さんがあの状態……意識不明の状態になった時の事を詳しく聞かなければ、詳しい検査が出来ませんので、お聞きしています。例えば、浩二さんが何かの拍子に頭を強く打った等で意識を消失したのであれば、頭部内に出血が見受けられる可能性もありますし、突然意識を失われたというのであれば、他にいろいろと検査しなければならなくなります」

何か思う節でもあるのか、看護師の言葉は、話が進むにつれ始めの覇気がなくなり、小声になっていった。

男「分かりました。あの時の事です。ね。お話致します」

そう言って男は、突然遠くを見るような目になり、ゆっくりと話を始めた。

『あの時、俺達は仕事の帰りに飲みに行ってた。ちょっとした居酒屋で席に着いて、始めは上司の愚痴や嫌いな奴の陰口・気になる女子社員の話なんかで盛り上がっていたんやけど……。突然、何の話をした時やったかなあ？話が止まって、お互い黙り込んでもうて……。そしたら、もう何を話掛けても浩二の奴ボーツとしたままで返事さえへんようになって……。ちよつとイラツとしたから「おい！浩二！」って肩を軽く叩いたら、そのまま浩二がバターンって床に倒れよって。何が起こったんか分からんで、ちよつと呆然としてもうたんやけど、すぐにこれはヤバイって思ったから救急車呼んだんや』

看護師B「そうでしたか。分かりました。ありがとうございます。それでは、今戴いた情報もふまえて、検査を行いますので、今日はおひきとり頂いてけっこうですよ」

男「浩二は！浩二はどうなったんですか！？」

看護師B「何度も申し上げております通り、ただいま検査中です。検査結果が出なければ、何とも申し上げられません」

男「そもそも、なんで検査が必要何ですか？ただ、意識がちょっと飛んだだけかもしれないじゃないか？なあ？何か隠してないか？俺、あいつの家族じゃないけど、マジで心配なんだよ」

と、男が真剣な眼差しで看護師を見つめて話をすると、看護師は少し困ったような表情をみせたが、

看護師B「ここではなんですので……」

と、男を個室へと誘導し、重たい口調で話始めた。それは、男にとって、考えていた事とは全く別の事だったようで、話が終わる頃には、男の顔は蒼白になり、とぼとぼと病院を去って行った。

男は、看護師の最後の言葉が頭から離れなかった。「この事は、浩二さんの御家族様であつても絶対に話してはいけませんよ。私は

あなたの……」

## 伝説の武器

正志「へへっ！ どうした頼！ もう終わりか？ 余裕だね！」

正志は、少し息を切らせながらも、ギラギラした目で笑みを浮かべながら、頼に話し掛けた。

頼「くそ！ まだだ、なぜだよ！ なぜお前に勝てないんだよ！」

正志「へっ！ それは、俺の装備が完璧だからさ！ まずこれ、粉碎兵器・メガトンハンマー！」

頼「かつこよく言い過ぎじゃねーか？ ただの釘バットじゃねーか」

正志「そして、我が家に伝わる伝説の秘剣・エクスカリバー！」

頼「それは、俺と一緒にアウトドア用買いに行ったサバイバルナイフだろ！」

正志「きわめつけは、泣く子も黙るオイルタンクと火炎放射機！」

頼「おいおい、よく恥ずかしげも無くそんな事を言えるよな！

それ、油の入った水鉄砲とライターと殺虫剤をひっつけただけの物だろ！ 確かに火炎放射機ってかつこよく言ったりもするけどさ」

正志「へへっ。要は考え方さ。まずは形からってね。こういう風に考えた方が、カッコイイだろ？ しかも、これがマジでつえーしよ！ お前への連勝が物語ってんじゃねーか！」

頼「マジやってられねーよ。なぜ、そんな身近に在るような武器のお前に負けねーといけないんだよ」

正志「これで、レベルアップでもしたらなあ」

頼「そうそう、ゲームとかなら、レベルアップして攻撃力が上がったり、HPが上がったりして目に見えて強くなるんだけどなあ」

正志「でも、実はレベルアップしてたりして」

頼「どうして？」

正志「今までさ、ずっとこいつらで、モンスターどもを狩ってきたじゃん。だからさ、実は力が上がってたり、走り回ってるうちに

持久力が上がったたりしててさ、それがレベルアップって事だったり  
って思ってたさ」

頼「つえー奴はいいねえ、楽天的で。俺は、こう何か音が鳴って  
レベルが1アップしたとか言われた方が、強くなってるって気がし  
ていいわ」

正志「お前それ、ゲームのし過ぎだぞ！ まあ、確かにそっちの  
方が、実感は沸くけどね。……って話し込んでる場合じゃなさそう  
だぞ！」

頼「何か、のんびり話過ぎたな」

正志「囲まれてる！ しかも、相当な数だ！」

頼「でも、伝説の勇者・正志と一緒にならば何とかかなりそんな気が  
するのは、かなり心強いねえ」

正志「サンキュー！ そう言われちゃ、ご期待に沿わないといけ  
ねーな！」

頼「まあ、こいつら大半がプラントモンスターみたいだから、動  
きは遅いし何とかなるさ！」

正志「じゃあ、行くぞ！」

頼「おう！」

と言うと二人は、お互いの顔を見て、何か目で合図をしたかのよ  
うに、モンスターと化したモノの中に、それぞれ飛び込んで行った。

## 発狂する男

男「うおおおー！ 離せえー！ おのれら離しやがれ！ ぶつ殺すぞ！ 離しやがれ！ ぶつ殺す！ 絶対、ぶつ殺す！ おのれら、これを外しやがれ！ うおおおー！！！」

ベッドの上で頭・首・両手足・胴に輪つかのような拘束帯を取り付けられた男が、鬼にでもなったかのような形相で、暴れながら大声で喚き散らしていた。

医師「これは、またえらく危険な存在になったものですね。本当に、昨日までただのサラリーマンだった男ですか？」

看護師「はい、名前は、坂下浩二さかした こうじ、現在32歳。未婚で、両親と3人暮らし。これまでは、会社内でもそんなに際立って目立つ存在ではなく、むしろ控えめな方であつたようです」

医師「それが一晩でこれですか？ マスコミ対策はしているのでしょうね？」

看護師「そつ、それが、すみません。マスコミの方も耳に入れるのが早いようで、既に知られてしまいました」

医師「まあ、知られてしまったのでは仕方がない。どこまで情報が漏れたのか分かりますか？」

看護師「確かではありませんが、多分この病気にかかったとしか知らないはずですよ」

医師「そうですか。分かりました。では、これ以上の情報の漏洩には十二分に注意してくださいよ」

看護師「はい、分かりました。……ところで、この方これからどうなるのでしょうか？」

医師「そうですね。まあ、確かな事は分かりませんが、人間感染の第一号になるので、ウイルスの検査・ワクチンの開発に協力して頂く事になるでしょうね」

医師は、何かいやらしい笑みを浮かべながら、呟いた。

浩二「テメエら、そこで何しゃべってやがる！　ここから出せ！　こいつを外しやがれ！　はぐなぐせ！　うおおお！　！！！！」

テメエら絶対、ぶつ殺す！　うおおお！」

浩二は、大声で喚き散らしながら、四肢をばたつかせていた。

その声も届かぬガラス越しで医師は、異様な笑みを浮かべ、看護師は、浩二の様子・医師の表情を互いに見ながら、不安の心を隠す事が出来ずにいた。

## バトル！！2

正志「はっ！ 頼、息上がってんじゃねーのか？」

頼「言ってくれんじゃん！ そういうお前の方が、ヤベエんじゃないのか？」

正志「確かに、マジで多いな。こいつは流石にきついわ」

頼「よっしゃ！ そしたらここからは、俺の出番だな！ 後のモンスターも数知れてるみてーだしよ！」

正志「ふんっ！ 俺もまだやれるぞ。お前に負けてられつかよ！」

頼「俺達も目茶苦茶だよな。話しながらバトルなんてよ」

正志「はは、マジ言ってる。でも、やっぱ俺ら強くなったって事じゃね？」

頼「だったらいいな！ っとラスト1匹頂き！ ……はあ、はあ、どうだ、思い知ったかバケモノ共め！ 俺達は、この辺りじゃ負け知らずなんだよ！」

正志「あゝあ、最後持つてかれた。ショックでけー！」

と軽口を叩きながらも、二人は草むらに倒れ込んだ。

頼「はあ、はあ、なあ、正志、そろそろ、この、装備じゃ、ちょっと、ヤバくねー？」

正志「はあ、はあ、そうか？ 俺、は、まだ、いけるぜ。なんてたつて、伝説、装備、だぞ！」

頼「ははっ。言ってる。俺は、マジで、ちょっと、装備、考え、直すわ」

正志「せっかく、刀、見つけた、ばかり、なのに、か？」

頼「これは、……ふう！ これは、これからも使うさ。でも、俺も複数装備を考えようと、思ってたさ」

正志「なるほどね。やっと俺の偉大さが、分かったと」

二人は、呼吸が落ち着いてから立ち上がると、お互いの顔を見て笑いあった。



## 面会者

ここは、とある病院の入院用受付。そこに、不安気な表情を浮かべた老夫婦が、受付の担当と何か言い争っていた。

夫「ここに、浩二が運ばれたと聞いたからきたんや。お前じゃ話しにならん。別の奴を呼べ！」

受付担当「だから、何度も申し上げております通り、ここに坂下浩二さんという方は、入院されておりません」

妻「じゃあ、連絡をして下さった木村さんが、嘘をついているとでもあなたは言うのね？」

受付担当「そう申されましても、入院台帳にも、入院病棟にも坂下浩二さんという方はおられませんし、大体その木村さんが来られたという、記録ありませんので……」

夫「だから、さつきから言ってるだろ？ お前じゃ話しにならん。別の奴を呼べ。呼ぶ気が無いなら、もういい！ 警察に調べてもらう。ここで、息子が監禁されているとな！ ……で、どうするんや！」

老紳士は、とてつもない剣幕で受付の担当者を大声で怒鳴っていた。

受付担当「どうすると言われても……」

と、もう泣きそうになりそうな受付担当の横にスツッと白衣を着た中年の男性が現れた。

医師「どうされました？ 何かありましたか？ あまり、大きな声で話されると他の患者様にもご迷惑になりますので、奥で話を伺いましょうか？」

と、突然今までの話を聞いていたかのように老夫婦に話し掛けた。夫「やっと、話の分かる奴が出てきたか。……分かった、案内してくれ」

その途端医師は、フツと不気味な笑みを浮かべ、すぐ真顔に戻る

と老夫婦を連れてEVに乗り、EVの表示には存在しないB2より下に連れて行った。

夫「おい、あんた。どこへ連れていくんや」

老紳士は、不安になってきたのか、少し強めの口調で尋ねた。

医師「おや？ どうしました？ 大丈夫ですよ。少しお話を伺うだけです。ただ公的な場所では、お話できないのですよ」

夫「おい！ いつまで降りるんや！ もう、だいぶ降りたぞ。おい、聞いてんのか！」

と、老紳士が医師の胸倉を掴もうとした時、『チン』と音が鳴ってEVの扉が開いた。

老夫婦は、少し落ち着いたかのように、ゆっくりとEVから降りた。老紳士が振り返り、医師に何かを言おうとした、その途端EVの扉がバタツツと音をたてて閉まったのであった。

夫「おい！ 何の冗談や！ どうなつとんねん！ 返事せえ！

何やこれわ！ おい、こら！ どこ行きよつた！」

老紳士は、EVの扉をドンドンと叩きながら、大声で怒鳴っていた。

しばらくして、突然先程の医師の声が聞こえてきた。

医師「坂下さん。すみませんが、今後の余生は、そこでお過ごし下さい。浩二君は、医学的にもかなり貴重なサンプルですので、お返しする事は叶いません。また、この事を口外されては、今後の世界の為にもなりませんので…。それでは、失礼させていただきます。あつ、そうそう。食事は、そこにいるプラントモンスターや元家畜モンスターを殺して調理して下さい。それでは、楽しい余生を。さようなら」

放送は、呆気なく切れ、途端に辺りは静寂に包まれた。

夫「おい！ 返事しろ！ おい！ 何とか言え！」

何を言っても、もう何も反ってこなかった。

妻「ねえ、あなた。どうなるの？ これから、どうなるの？」

老婦人は、半分泣きながら老紳士に尋ねたが、老紳士ももうどう

したらいいのか分からなかった。

そんな老夫婦の周りに不気味な影が一つ、また一つと姿を見せ初  
めていた……。

## 人里離れた家に

老人「あゝ、よく来たね。道中、大丈夫だったか？ この辺りは少し人里と離れておるで、バケモノ共に襲われたりせんかと、心配しておったんじゃ。…………でも、よー来おった」

女「お父さん、心配し過ぎよ。ここまで車で来てるし、走っている車には、あの怪物達も危ない事を知っているかのように近付いてこないんだから」

少し山間を入った所にある、小さな集落のような土地の一軒の家で、老人は、先程深紅の軽自動車から降りてきた。女に話し掛けた。女の傍で、まだ小さい子供が何かをちぎって遊んでいた。

老人「しかしなあ、伴子。いつ何時、どうなるか分からんじやないか。今やこんな世の中だし…………」

伴子「そうね。ありがとう。これからは、気を付けるわ。でも、あの怪物も、かなり数が減ってきているみたいよ」

老人「ほう。またどうして」

伴子「うちの周りだけかもしれないけど、近所の子供達が、あれって遊びの一環なのね。モンスター狩りだとか言って、ほとんど毎日飽きもせず、どんどん殺していつているもの」

老人は、娘が、少し悲しげな表情をしながら話すのを見て違和感を感じながらも、『ほう』『へえ』と相槌をうちながら、話を聞いていた。

老人「そうか。では、お前の家の辺りは、安全そうだな。良かった。良かった。…………で…………、なければ聖史せいしも安心して遊べないからの。のう、聖史」

と、伴子の傍らですつと何かを破いている男の子に老人は話し掛けた。

伴子「ほら、聖史。挨拶しなさい。おじいちゃんだよ」

伴子が、座り込んで男の子に声を掛けると、男の子は持っていた

物をちぎるのを止め、伴子の顔をじつと見ると、伴子の耳元でボソツと何かを言った。そして、伴子の反応を見てから老人の方に振り返り、

聖史「こんばんは。おじいちゃん。今日は、ごちそうさま」

と言つて、うつすらと不思議な笑みを浮かべると、また手にしていた、何か……なにやらブチブチと音をたててちぎられるモノを、またちぎり始めた。「今日は、お腹いっぱい食べられる」……老人は、聖史がボソツと何かをちぎりながら言ったような気がした。

孫の変な対応に、小首を傾げながらも、老人は、遠方より訪問した、娘・孫を家の中に通して行った。

## 狂人

男「うひゃひゃひゃひゃひゃ！ 死ね！ 死ね！ オラオラオラ！ 死ね〜！ どうした！ もう終わりか？ ほら、来いよ！ 来やがれ！ ザコいわ！ よえーよ！ うひゃっひゃっひゃ！ ひゃーはっはっはー！ オラオラ！ 死ね、死ねえ！」

男は、頭の中から足の先まで返り血を浴び真つ黒になりながら、狂気的な笑い方をし、自転車のチェーンらしき物を振り回していた。この男、名を中田<sup>なかた</sup> 激<sup>げき</sup>といい、先月までは家族想いの真面目で優しい男であった。

しかし、中田の静寂を覆す事件が起こった。最愛の妻と、一人娘をモンスターと化した鳥の群れに殺されてしまったのだった。しかも、中田の目の前で……、妻子は生きていた状態のまま、逃げ惑いながら十数羽の鳥に啄まれ悲鳴をあげながら、この世から消えて行ったのであった。なぜか、中田は鳥から狙われること無く、無傷のままその場に立ちすくむしかなかった。

中田「おかしいな。この辺りに逃げ込んだはずだが。………っん？ そういえば、こないだの奴もこの辺りで見失ったな。………ということは、もしかしたら、俺はこの辺りのボスに近付いているんじゃないか？ この辺りのボス？ この辺りの？ ボスう！？ うおおお！ ボスう！ うひゃひゃひゃひゃひゃ！ 殺してやる！ 殺してやるぞ！ 待つてろよ！ この辺りのボスうう！」

## ある一軒家にて

女性「ふ〜ん。そうなんだあ。でも、どうしてかしら？」

男性「何が、どうしてかしらだよ。こんな気味の悪い部屋によく一日中居れたもんだな」

何かの研究室だろうか。部屋の四隅に、窓をも遮るように大きな檻のような飼育ケースが、積み重ねられており、その中に、いろいろな動物や植物が入っている。その檻に囲まれてる様にして、部屋の真ん中にはパソコンが2台不気味な光を放っていた。そのパソコンの光に照らされるように、一人の女性がパソコンと、その周りにある実験用の物なのか、大きな水槽を交互に照らし合わせながら、ぶつぶつと独り言を言っていた。

女性「あら、あなた、どうしたの？ この部屋に入って来るなんて珍しいわね」

男性「そう言うけど、お前、部屋の外まで、声が聞こえてきたら、気にならない方がどうかしてると思わないか？」

女性「あつ！ ごめんなさい。そんなに大きな声だったかしら。

……でも、……見て。このデータ。すごい事が分かったのよ。まあ、前々から少しは気が付いていたのだけど、確証が得られなくて」

女性は、不気味な部屋の中に居るにも関わらず、キラキラした子供のような目で、入り口のドアの方を振り返ると、そこに立っている男性に手招きした。

男性「どうしたんだよ。そんなに嬉しそうに。……どれどれ、んっ？ 何だこれ？ じゃあ、今のコレ何なんだ？ こいつら、おかしくなったヤツって、どうしてこうなったんだよ？」

女性「ね。不思議でしょ。でも、これが真実なのよ。これ、多分病気じゃないわ。多分、病院や何かの研究機関では、分かっていることなんだと思うけど……。これね、この狂暴化したモノの肉を別の動物に食べさせても、全く変化しないの。感染しないのよ。まず、

狂牛病や鳥インフルエンザの類いと、別物って事ね。でね、私もそうだけど、同じ部屋の中に居て、同じ空気の中で生きているにも関わらず、感染しないのよ。これは、空気感染・飛沫感染しないって事でしょ。さらに、同じ動物・同じ植物間で体液の交換、まあ輸血みたいな感じと思ってもらったらいいわ。それを行っても、やっぱり感染しないの。但し、この場合、輸血された方はショック死しちゃうのだけどね。まだあるわよ。これまで、なぜ人間やその他の生き物が、死滅せずに来れたと思う？……………何の質問だって顔してるわね。あのね、コレ、昆虫には感染しないのよ。そもそも、ここまでの話を聞いてると分かると思うけど、感染という言葉を使うのもどうかと思うでしょ。これは私の推測でしかないのだけど、これは病気ではなく、これ、いわゆる進化にあたいするものと考えるのが、妥当じゃないかと

考えるわけ、さつきショック死した話したでしょ。これを、私は別の生物に変化したと考えるのよ。どう思う？……………しかも、これは政府の未発表事項なんだけど、確かな情報よ。あのね、この事象、日本でしか起こってないのよ」

その言葉を聞いて、男性は絶句した。

男性「今の、この、出来事が病気じゃない。しかも、メディアの未発表事がある……………。これ、本当……………か……………」

男性は、気の遠くなる思いで、パソコンの中の情報をもう一度見直していた……………。

## 狂人再び

中田「鳥のボスは、やっぱり鳥か!? ホーホーか? カーカーか? うひゃひゃひゃ! まさか、チュンチュンじゃないよな! うひゃ! うひゃひゃひゃあゝ!」

中田は、血まみれのチェーンを振り回しながら、森の奥へと入って行った。相変わらず、発狂したような笑いを続けていたが、目は笑っていないかった。

……突然! 辺りの空気が変わった。辺りの草木がガサガサと音をたて、獣の唸り声のようなものも聞こえる。

中田「来たか! おおおっしやあゝ! 来い! 来い! 来い! いい! ……??? ん? ……あれ? なんだ? どうなってるんだ?」

中田が、かまえをとり、辺りを見渡しても、何も襲ってくる気配が全く感じられなかった。少し先の茂みの方から、何やら凄い覇気を感じ、中田はゆっくりと慎重にその場所を確認しようとした。途端!

中田「ぐわあ!」

何かにいきなり、頭を上から押さえ付けられた。

中田「クソッ! 不意打!」 振り返り攻撃体勢に入ろうとしたが、

「静かに! 見付かる!」

と、誰かがさらに頭を押さえ付けた。

中田「なんだ? おりゃ! なんじゃ、テメエ!」

「しっ! 黙って! ……ほら。始まる。ただ、採取に来ただけなのに、とんでもないものに遭遇したわね」

声の主から、徐々に力が抜けていく。中田は、ゆっくりと横にすり抜けると、その声の主の横に座り、今始まったと言われた方を見た。そこには……。

獣の群れ、ペットで飼われるような物から、野生の物・鳥類に至るまでの物が2つのグループになっている。そこに自由を得た植物達、これも大木から雑草に至るまでの物が一つの布陣を組んでいた。ただこれは周囲の草木に紛れて、どれが普通の植物なのか、どれがモンスターなのか、見分けが付き難い状態であったが……。3つのグループが、今、この場で、戦闘を始めようとしていた。

中田「なんだ？  
何が始まるんだ？  
……ん？  
あれか！  
ボ

中田が立ち上がりうとした瞬間。横にいたヤツが、腕を引いた。「待つて。これは、縄張り争いよ。今、出て行ったら全てのグループの標的にされるわ。下手に動いても危ないから、しばらくここで様子を見ましょ」

[illegible]

女「だからッ！　じつとしてなさい！　しっ！　あんたが、死ぬわよ」　中田「クソッ！　何だってんだ！　しかしよ。テメエ、誰なんだよ。何だってこんな所にいる！」

女「始まつたわ。なるほどね。これで私の仮説が正しいという事に一歩近付いたようね」

中田「だ〜か〜ら〜！ テメエは……」

女「うるさい！ 静かに！」

中田「……誰だつて聞いて……」

女「やかましい！ 騒がしい男は嫌われるわよ。ちょ、黙って……ふーん。あいつらってあんな連携出来るんだ。一番不利なのは、野生の動物達ね。全く統制がとれてない。うわっ……プラントモンスターって、種類が増えると危険ね。あの上下からの攻撃は、乱戦の中じゃ多分かわせないわね。………やっぱり、アニマルモン

スターが強いか……。あの攻撃力は侮れないわね。あつヤバ！動物達もうダメ。バラバラに攻撃してちゃダメよ。あつ、あゝ。あゝあゝあれも野生のカンってやつなのかしら。みんな逃げちゃった。……。それにしても……。すごいわね。雑草達、戦闘区域がこんな所だと全然ザコじゃないのね。周りの草と見分けがつかない。へゝ、根っこって、移動手段だけって訳じゃないのね。あれは連発できないみたいだけど、確実に不意打ちになるわね」

中田「あれは、ヤベエぞ！ 地面から突然突き上げられる！ あれ、出てくる場所が分かんねーんだ。……。うひゃひゃひゃ、あれは、俺の一番嫌いな攻撃だ。鳥どもゝ！ 卑怯だぞ。空からの啄み攻撃」  
モンスター同士の戦いは、優劣を予想させることなく、続いていた。中田と女は、じつと草むらの陰からその戦いの結末を待っていた……。。

## 怪しい子

聖史「おじいちゃん、今日の晩ご飯何？」

老人「ん？……そうじゃなあ、聖史は、何が食べたい？」

突然、右手を掴みほお擦りしながら、孫にびっくりしながら、老人は、優しく聖史に話し掛けた。

聖史「えつとね、おじいちゃん」

老人「??? えつ。何だつて？」

何かの聞き間違いかと思い、老人は聞き直した。

聖史「だからね。おじい…ひやむ」

伴子「何してるの聖史！ おじいちゃん困ってるでしょ！」

突然飛び出した手に口を塞がれ、びっくりしたような顔をした聖史だったが、伴子の顔を見て逃げるように去って行った。

伴子「ごめんね。お父さん。また、訳の分からない事言っただしよ」

老人「いや。大丈夫だよ。聖史が、晩御飯を楽しみにしていたぞ。孫に期待されると頑張らないといけないな」

伴子「もう！ お父さんたら。……ふふつ。……でも、ごめんね。こんな事になって…」

老人「ん？ 何じゃ？」

伴子「ううん。何でもない。何か手伝う事があつたら言ってね」

伴子は、申し訳なさそうに言い残して、聖史の後を追って行った。

老人「あやつ、何か隠しておるな。聖史も、おかしい。いや、伴子もおかしいのかもしれない。これは、わし一人では危ないかもしれないな。……大阪で、……確かアレの感染者が出たと、ニュースでやっておつたな。一応、何かあった時の対策をしておくか」

老人は、一人でぶつぶつと言った後、電話の方へ歩いて行った。

蔵には…

頼「クソツ！ 何もねーじゃねーか。おっ！ この箱は、期待出来そうじゃねーか。やっぱ、蔵は最高だね。正志、これが家の格の違いだよ。へへっ！ ……では、どれどれ……って、……何じゃこりゃあ！ ばあちゃん！ ここは、物置じゃねーんだぞ！ クソツ！ 期待して損した。……また振り出しかあ。はあ。……っーか、もう止めた止め！ もうねーわ！ ……どうしよう。……だゝゝ！ 何も浮かばねゝ！ ……そうだつ、……技だ、……何か技をいくつか覚えたら、新しい武器を手に入れるより、役に立つんじゃねーか？ ……よーし！ 燃えてきた！ へっ！ やるぞ！ やってやるぞ！ よーし！ よーし！ よおゝし！ 善は急げだ、今からやるぞ！ ……でも、何も無い所でやっても、何も思い付かなさそーだな。……うしや！ 狩りしながら、考えてやる！ よしや！ 行くぜえ！」

頼は、技の習得を目的に家の外に飛び出して行った。

正志「おう！ 頼！ どこ、行くんだよ」

頼「えっ！ あっ！ 正志？ どしたのさ」

正志「なんか暇だからさ、何か新しい武器でも見つけたかなと思つてさ。なんとなく来てみた。なんか邪魔だった？」

頼「いや。邪魔じゃねーけど……、あのさ……正志、新ウエポンなんだけどさ……、家の蔵ん中探し回ったんだけどさ、……見付からなかったんだわ」

正志「ん？ そか。じゃ、どーすんだよ。やっぱ刀だけでいくか？」

頼「るせつ。しゃーねーじゃねーか。……でも、ただ振り回してるだけじゃダメじゃねーの？ って思つてさ。今から、実地訓練兼ねて技を覚えに行ってくるぜ！」

正志「そかそか。じゃ、俺も一緒に行こーかな。もし、ヤラレち

まったら後味ワリーしな」

頼「また二人で大暴れか？ 懲りないねえ君も。ははっ！」

正志「じゃあ、行くか!？」

二人は顔を見合わせると、ダッシュで駆けて行った。

## 目的達成

女「びつくりしたわね。まさか、植物が残るなんて」

中田「うおおおお！ どーしてくれるんだ！ 俺の……。俺の……」

女「何？ 一体何なのよ」

中田「俺の仇は……。どこへ行きやがった〜！」

女「命があっただけでも良かったじゃない。それとも、あの中に突っ込んで行って、どちらからも揉みくちやに攻められて、何をどう攻撃したらいいか分からないまま死にたかった？ それこそ、亡くなられたお嫁さんと娘さんが、うかばれないわよ」

中田「……。くそっ！ くそお！ くそおおお〜！ ……ふーっ！ ふーっ！ ……で、テメエ、誰なんだよ！」

女「あっ！ ごめんなさい。自己紹介してなかったわね。……私は、山里 神名（やまざと かな）、自称研究者、……本当は専業主婦なんだけどね。……でも、戦いには自信ありよ」

中田「何が、自信ありよ。だ！ 何もエモノ持ってねえじゃねえか」

神名「あっ！ しくじったなあ。まだあいつらいたの、忘れてたわ」

中田「何！？」

話をしている二人に、先程縄張り争いに勝利したプラントモンスター達が、標的を変更し襲い掛かるうとしていた。

神名「話は一旦終わり。あいつら、潰すわよ！ 準備はいい？」

中田「うひゃひゃひゃひゃ〜！ お〜し！ 来い！ テメエらは、仇の仇だ！ 俺様が、再起不能にしてやる！ してやるううう〜！ うひゃ！ うひゃひゃひゃひゃひゃ〜！」

神名「もう！ 聞いてないし。じゃあ、行くわよ！ はあ〜〜！」  
二人は、遅い掛かるモンスターに向かって走り出していた。

中田「うひゃひゃひゃ！ 死ねえ！ おらあ！ うりゃあ！」

神名「あ！ 危ない。ちよつ！ 危ないじゃない！ この人にチームバトルは無理なようね。ハッ！ 何、この人。たっ！ これじゃ、野生動物と何も変わらないじゃないの！ あゝもう！ うるさい！ はゝつ、だだだだだ！ うわっ！ また？ もう！」

中田「うひゃひゃひゃひゃ！ 死ね！ 死に腐れ！ ひゃあはっはっは！ うゝひゃああ！ ラアストオ！ うひゃひゃあ！ はあはあはあ！ うおおお！ 渚あ！ 愛里いい！ お父さんは、やったぞお！ お前らの仇、とったぞおおお！ おおおお、とったぞおおお！ とった。ははは。やった。やったあ！」

神名「はあつ！ はあつ！ はあつ！ ふーっ！ ふふ、良かったわね」

中田「あんた。ありがとな。あの数は、俺一人じゃ絶対無理だった。ありがとな。……でもよ、あんた、すごいな。本当にただの主婦か？ あの身のこなし。しかも、素手？ そのうち、腕へし折れるぞ」

神名「バカね。素手で戦えるわけないでしょ。こーれ、ナツクルメリケンサックっていうのかな？ 私は、これが一番死角の少ない武器だと思っているのよ。……ていうか、あなた！ ちよつと回り見て戦いなさいよ！ 危ないじゃない！ なぜ、あいつら相手にしながら、味方と思っているあなたのチームを避けながら戦わないといけないのよ！ あなたは、チームバトルっていうものを覚えた方がいいわね」

中田「えつ。すつ、すまん。いや、ごめんなさい。本当に、ゴメン。敵討ちって考えてると、周りが見えなくなって……。これから、気をつけるよ」

神名「当たり前よ。……って何よ、これからって。今後、一緒に戦うの？ ……まあいいわ。よろしくね。あなた名前は？」

中田「ゴメン。申し遅れた。俺の名前は激。中田 激だ。今後ともよろしく。……で、大変言いにくい相談だけど、……部屋

空いてない？ …… 今、住む所ないんだ」

神名「はあ？ 何よそれ。本当に？ …… まあいいわ。じゃあ、家にいらつしゃい。でも、私の旦那、けっこうヤキモチやきだから喧嘩しないでね。まあ、喧嘩になっても、多分中田さんは勝てないけどね」

中田「はは。気をつけます。それでは、今後色んな意味でよろしくお願いします」

神名「あつ、そうそう。旦那の名前は、霧斗<sup>きりこ</sup>よ。山里 霧斗。覚えておいてね」

中田は、一生懸命愛想笑いをしながら、神名の後ろについて行った。

## 秘密集会

木村「浩二があんな状態になって、病院に行ってから一ヶ月が過ぎた。浩二は、戻ってこない。入院の見舞いに行っても、入院していないと言われる。しかし、あの病院から別の病院へ患者が移送されたという話も聞かない。……また、浩二の両親も、見舞いに行きたきり戻らない。……俺は、……あいつと、……浩二と同じ状態になって気が付いた。これは、病気なんかじゃない。俺は、……俺達は、浩二を見殺しにしたらいかんだ！　そうだろう、同士達よ！」

木村は、集会場の舞台に立ち、多くの人達の前で、静かに演説するように語りかけていた。

一同「おおおお！」

木村「あの病院は、何やおかしい。何か隠してる。俺達の変化の秘密も知ってるかもしれん。まずは、あの病院の周りから調べるでもな、一人では動くなや。浩二が、出てけえへんところを見ると、捕まったら出られへん可能性あるからな。ほな、4つに分かれて行動や。分かってんな。深追いしない。何か分かったら、すぐメールか電話やで。おーし、行くでえ！」

一同「おおおお！」

集会場の壁が、人の声で震えていた。

## 研究室

医師「ほほう。なるほど。なるほど。これは実に興味深いですね。坂下さん、ご協力感謝しますよ」

看護師「先生、何か分かったのですか？」

医師「ん？ いたのかね。ああ、面白いことが分かったよ」

看護師「何が分かったのですか？」

浩二を乗せた拘束ベッドの隣の部屋で、医師は楽しそうにガラス越しの浩二を眺めていた。

医師「教えて欲しいかね。……では、君にも教えた後でいろいろと協力してもらう事になるがそれでもいいかね？」

いやらしい笑みを浮かべながら話す医師に、ゾットとする気持ちを抑えながら、看護師は首を横に大きく振った。

医師「ふふつ、冗談だよ。すまないが、これは重要事項になる為教える訳にはいかんのだ。すまないねえ」

その時、部屋のドアが開いたと思うと一人の中年男性が現れた。

男性「何か分かりましたか？ やまなべ 矢馬鍋先生。」

矢馬鍋「ああ？ …… あつ！ そのがわ 園川先生ではないですか。どうしました？こんな所に。」

園川「いやあ。何か研究の進展でもあったかなと思ったものでね。ちよつと、お邪魔させていただきましたよ」

矢馬鍋「そうですか……。キミ、ちよつと園川先生と大事な話しをしないといけないので、席を外してもらえるかな」

看護師「……… はい。……… 分かりました。……… それでは、失礼します」

看護師が、部屋から出るのを確認し、一呼吸置いてから、矢馬鍋は、話始めた。

矢馬鍋「園川先生は、今回のコレについて、どうお考えですか？ …… 多分、巷で言われている新型のインフルエンザとは思われて

いないでしょうが」

園川「前置きは、けっこうです。本題に入って下さい」

矢馬鍋「そうですか。……では、私が調べたコレについての結果をお教えしましょう。……但し、まだ研究中の為確定とは言えませんが……ね。コレは、確かにインフルエンザのようなウイルス性の感染症ではありません。コレは、………言わば………寄生虫なのです。

アニマルモンスターや坂下君の身体を調べて見ると分かるのですが、普通の動物や人間と全く違う箇所が幾つかあります。まず、完全に異なるのが、血です。動物や人間のような赤色をしていません。どちらかと言うと、青に近い黒っぽい色をしています。また、骨格や皮膚といった、カルシウムやタンパク質で構成される物が、逆転しています。どういう事かと言うと、皮膚にあたる部分の大半がカルシウムを主成分に構成され、その内側にある物が、タンパク質や他の栄養素で構成されています。ただ、プラントモンスターについては、これに該当しない部分もあり、まだ研究中です。で、気になると思いますが、なぜコレが寄生虫なのかということですが、………お分かりかも知れませんが、今報告した身体状態は、昆虫のソレと酷似するのです。また、プラントモンスター以外、すなわちアニマルモンスターとヒュムモ

ンスターの類似点の共通することなのですが、生命のコア、………核となる部分………すなわち、心臓に何かいる事が分かっています。アニマルモンスターに関しては、解剖して調べた結果、昆虫のような物、見た事の無いような物ですが……。が、確認されています。これに関しては、数種類のモンスターの解剖を行い、まず90%の確率で、心臓部に同じような生物と言ってよいのかわかりませんが……。が、確認されていますので、ほぼ確証を得たと考えて良いと思っています。ただ、ヒュムモンスターについては、現在サンプルが、坂下君だけという、かなり厳しい状態にある為、解剖には至っていません。殺してしまつては、今後のサンプル、モルモットがいなくなつてしまふのでね。どうですか？　ここまで、一挙に説明致しま

したが、何か質問でもありますか？」

矢馬鍋の説明を聞く内に、園川の顔はだんだん青ざめ、途中で質問をしようと口を開くのだが、上手く声が出てこなかった。

園川「……………、ん！ んんっ！ そつ、それでは、その、なんだ、それは、…どこから身体に入ったと考えているのですか？」

矢馬鍋「えつと、それについてはですね。…まだ、調査中ですが、今のところ『蚊』が原因という考えが一番強いです。これにつきましても、一応の根拠がありまして、まず『蚊』の食料となるのが、植物の体液です。そして、産卵の為の栄養素となるのが、人間や動物の血です。そして、この3種族の発症しか確認されていません。

そう、昆虫は今回のコレにはならないのです。という事から、『蚊』を媒体に何かの別生命体が、身体内に侵入し、生態組織そのものを变化させていると考えています。……おつと、そうでした。後もう一種族、発症しないのがいましたなあ。それはですね、水の中に棲息する生き物、基本は魚類ですよ。これで、いかがですか？」

矢馬鍋は、園川にもうこれ以上言い返せないだろうと自慢げに少し見下したような言い方をした。

園川「それでは、プラントモンスターについては、長期間研究をしたにも関わらず何も分かっていないという事ですね？」

矢馬鍋の言い方が、気に食わなかったのか、園川は少し怒り気味の口調で質問した。

矢馬鍋「おやおや、先生も意地が悪い。植物、プラントモンスターについても、似たような結果はでています。こちらも、茎や葉、根などの外に露出している部分に関しては、やはりカルシウムを主成分とした物質で構成されていることが判明しています。ただ、寄生虫に関してですが、これが茎、葉、根、花など至る所を調べても出てこないのです。その為、プラントモンスターについては、まだ研究の必要があると考えています。また、プラントモンスター、アニマルモンスター、ヒュムモンスター、この3つの関連性を考える必要があるため、今後も研究が必要だと考えています。……………」

園川「でも、……ヒュムモンスターのサンプルが、少ないと。……  
そういう訳ですね」

矢馬鍋「そういう事になりますな」

園川「分かりました。そのあたりは、検討しましょう。あと一つ  
お聞きしたい事があります」

矢馬鍋「はい。何でしょう」

園川「コレの原因は、『蚊』の可能性が高いという事は分かりま  
した。しかし、蚊に刺されたモノが全て発症するわけではないです  
ね？」

矢馬鍋「そうですね。まだ、はっきりとした解答を出せないのが  
現状ですが、それについてはフィーリングの可能性が一番高いです  
ねえ。蚊に刺されて発症する人は、フィーリングの良かった人。発  
症しなかった人は、フィーリングの悪い人というのが現在出せる答  
えですね」

園川「分かりました。それでは、今後の課題もありますが、引き  
続き、研究・調査の方よろしくお願いしますよ。……矢馬鍋先生」

そう言い残すと、園川は部屋を出て行った。

矢馬鍋「うるさい奴だ。自分では何もせんくせに！……穴淵君、  
いつまでそこに隠れているつもりなのかね。……話を聞きたかった君  
の事だ、隠れて聞いていたのは、分かっているのだよ」

そう言くと、看護師がおずおずと部屋の入り口とは逆の方より姿  
を現した。

矢馬鍋「部屋に2つ、出入口があるのは、問題だな。……まあ良  
い。穴淵君、これからは君にもいろいろと協力してもらおうよ」

青ざめた顔で、震えながら立っている、看護師（穴淵）<sup>あなぶち</sup>に対して、  
いやらしい笑みを浮かべながら、矢馬鍋は手を差し出していた。

矢馬鍋「よろしく頼むよ。君は、きつと歴史上とても素晴らしい  
人物になれる。……どうしたのかな？ 聞きたかったのだろう？  
聞けて良かったじゃないか。もっと、嬉しそうな顔をしたらどうだ  
ん？」

穴淵は、自分のした事に嫌悪感を覚えながら、矢馬鍋の言葉の意味が理解出来ずに、困惑と不安の表情のまま、立ち尽くしていた。

## 我慢

伴子「聖史。今日の御馳走は、晩御飯が終わってから。周りの家の人も寝てからよ。……それまでは、我慢してなさい。分かった！？」

聖史「うん。分かった」

と、また手にしたモノをちぎろうとした途端、伴子に取り上げられた。

伴子「聖史！ もう、それ止めなさい！ ……『お父さん』、ボロボロじゃないの」

聖史「だって。そこ、もう食べられないんだもん」

伴子「だからって、こんなにボロボロにしちゃう事ないでしょ。」

……ごめんね、あなた。もう小さくならないようにするからね」

伴子は、自分の旦那だったモノの一部をそと、ポケットの中にしまい込んだ。

聖史「あゝあ。まだかなあ、御馳走。お父さん、美味しかったなあ。おじいちゃんは、どんな味がするんだろう。ねーねー、お母さん。お母さんは、どこ食べるの？ 僕、どこもらつていいの？ 楽しみにしてたんだよ。久しぶりの人間なんだもん。ねーねー、お母さん。お母さんてばあっ」

うきうきしている我が子を見ながら、自分の父親に申し訳ない気持ちでいっぱいになりながら、伴子は聖史に微笑みかけていた。

伴子「聖史は、頭と体。私は両手足でいいわよ。……そのかわり、分かってるわね。御馳走の時間までは、変な事しないの。分かった？ 後、御馳走が終わったら、すぐ帰るからね。いつまでもいたら、近所の人に気付かれるかもしれないから。分かった？ ……聖史！

返事は？」

聖史「う、うん。分かった。」

伴子は、父親が何やら怪しい動きを見せているため、初めの計画

を変更し、夜中に襲う事に変更したのだった。聖史は、いつもと様子の違う母親に、少し戸惑いつつ、言う事を聞いていれば、御馳走にありつけると、うきうきしていた。

一方その頃、伴子の父親は、近所の男衆を集め、自分の娘、そして孫が、今話題の病気に感染している可能性が高い事を告げ、もし自分の家から大きな音や声が聞こえたら、すぐに駆け付けてもらうよう懇願していた。

男衆は、自分達への感染を恐れていたが、伴子の父親の深い頼みであった為、了承を余儀なくされていた。

聖史「あゝ。楽しみだな。……頭か。外は力チ力チ、中はふんわり。……体か。お肉沢山あるかなあ。外の皮は、美味しくないけど、遊び道具になるし。あゝ、まだかなあ。早くみんな寝てよ。まだかなあ」

聖史は、ぼーっとながらうわごとのように、ボソボソと呟いていた。

## 山里家にて

霧斗「……で、激君は家に来たというわけだ」

中田「はい……、すみません」

霧斗「いやいや、謝らなくてもいいんだよ。しかしなあ、……………」

中田「何ですか？」

霧斗「まさか、神名のやつが人を連れてくるとは、思ってもみなかったのですね」

中田「いや、すみません。無理言つて、お邪魔しちゃつて」

霧斗「だから、謝らなくていいつて」

山里家に転がり込んだ中田は、神名が自室にこもってしまった途端、霧斗の話し相手を否応なしに任されていた。

霧斗「ところで、激君は、鞭を使うようにして、チェーンで戦闘を行うと聞いたのだが……………」

中田「えっ！ え〜と、その、え〜とですね。あのぉ、そんな格好の良いものじゃありません。ただ、渚や愛里…、すみません、名前言つても分かりませんよね。妻や娘の仇を取ろうと、思った時に一番身近にあつたのが、自転車のチェーンだっただけで……………」

霧斗「…………でも、その武装であのバケモノ達を倒してきたんだろ。

……………」

中田「ええ。まあ、一応」

霧斗「うん。そうだね。君も今じゃ戦士になつてるんだ。一度、今から手合わせ願えないかな？」

中田「えっ？ でも、それってお互い、危なくないですか？」

霧斗「うん。危ないね。じゃあ、こうしよう。今から、子供達の言う狩りに行つて、お互いのバトルスタイルを見せ合う事にしようじゃないか。これならば、仲間同士で傷付けあう危険性は回避出来るだろう」

その時、居間の扉がガチャッと開くと、神名が入ってきた。

神名「それはどうかしらね。その人、戦いになると周りが見えなくなるみたい。……まず、チームバトルの基本から、教えるべきじゃないの？」

霧斗「いや、大丈夫だと思うよ。これまでは、周りが見えなくなる理由があつたんだ。でも……、これからは違う。……だから、大丈夫だと思うよ。何の根拠も無いけどね」

神名「ふーん。そうだといいわね。ところであなた、自分のスタイルは言つたのかしら？」

霧斗「ああ。そういえば、すっかり忘れていたよ。……激君、僕は、ナイフで戦うんだ。ナイフの類いなら、ペーパーナイフからサバイバルナイフ、包丁に至るまで何でも使う。……それと、僕は、二刀流だね。僕も、近くに來られると、少々危険なんだ」

中田「へー。短剣使いつてわけですか。……でも、夫婦でリーチの短い武器使つてるんですね」

霧斗「僕は、こいつ程じゃないよ。あまり長い刀は使えないけど、ある程度の長さの物なら、ナイフじゃなくても、そうだなあ、棒のような物、鉄パイプなんかでも使えるしね」

神名「はいはい。じゃ、話はここまでね」

霧斗「そうだね。じゃあ、激君そろそろ行こうか」

霧斗は、中田の肩をポンッと叩き部屋の外へと出て行こうとした。神名「ちょっと待って。……私は、あなた達と話しをしに來たのじゃないの。……ちょっと、二人とも私の部屋まで来てくれる？」

神名は、霧斗の襟首を掴み、部屋から出て行くのを阻止しながら、中田の方を見て真剣な表情で話した。

霧斗「何？ また何か、発見したの？」

うんざりしたような霧斗の顔を余所に、神名は足早に自室の方へと歩き初めていた。

霧斗「やれやれ。激君、じゃ行こうか」

二人も、神名の後を追って、神名の部屋へと歩いて行った。



## 新技開発

だだっ広い、河川敷。広さを活かし、草野球用のコートが敷かれた所に、正志と頼は来ていた。少し前なら、草野球チームとかの練習などでもやっていたのだろうが、今は無人の、ただ、ただ広い、空き地と化していた。しかし、今は違う。正志と頼が、頼の技訓練の為、多くのアニマルモンスターを引き連れて、そこで今まさにバトルを開始しようとしていた。

頼「よし！ やるぞ！」

正志「頼！ さっきの事、忘れるなよ！」

頼「分かってるって！ 刀の最大の攻撃は、上から下への振り下ろしてやつと、左右から、反対側への横一文字だろ！ へっ！ よゆーっだぜ！」

正志「気をつけるよ、頼！ お前のウェポンは、長刀って部類の物らしいから、一回一回の攻撃後の隙がでけーぞ。……おい！ お前ら邪魔だ！ ……頼！ ……攻撃後の……邪魔すんな！ ……攻撃後の切り返し……後で遊んでやるから！ ……切り返しを忘れるんじゃねーぞ！ ……お前ら！ 人が話してる時は、……じっとしてやがれ！ 邪……魔……！ ……どお……けえ……！」

と、正志は、右手にバット、左手に片手でも使えるように改造した火炎放射機を持ち、モンスターに囲まれた状態で、ぐるぐると回転した。

頼「おお！ それ、すげーなそれ！ 俺も、やるーかな。」

正志「お前の武器じゃ、無理じゃねーか？ ……あ！ 思い出した！ ……頼！ これ、お前に前に貰った物だけど返す！ これ、使え！」

正志の投げた物を、頼は咄嗟に受け取ろうとしたが、危険を感じて、サッと手を引つ込めた。

頼「正志！ 危ねーじゃねーか！ でも、返してもらったく。お

「し、これで俺も二刀流だ！ 行くぞ！ モンスター！」

正志の投げた物、それは小振りの短刀であった。頼は、長刀の両手持ち。右手に長刀、左手に短刀の二刀流。この二つのスタイルを切り替えながら、戦うのであった。

## 新たな実験

穴渕「イヤあ！ 助けて！ 先生！ 助けて下さい！ イヤ！ 離して！ イヤあ！ イヤああ！！！」

穴渕は、全裸にされ、浩二の監禁用拘束室に放り込まれた。

穴渕「先生！ 助けて！ 助けて下さい！ 先生！ 先生え！ 助けて！」

穴渕は、ガラス越しに不気味に笑う矢馬鍋の方に駆け寄ると、ガラスをドンドンと叩きながら、叫び続けていた。

その時、穴渕の後でガチャ！ ガチャ！ と金属が、動く音が聞こえた。

穴渕「！！！！！」

穴渕「先生！ イヤあ！ 助けて！ 先生え！ 助けて！ 助けて！ 先生！ 出して！ イヤ！ 出してよ！」

穴渕は、音が聞こえた途端、半狂乱状態になり、矢馬鍋の方で、ガラスを叩きながら叫び続けていたが、扉があった方へ駆け寄ると、その場所でまた壁を叩きながら叫んでいた。そこへ矢馬鍋の声が聞こえてきた。

矢馬鍋「穴渕君、キミはラッキーだよ。現在、君も知つての通り、ヒュムモンスターのサンプルが希少な状態にある。その為、そこにいる坂下君の解剖などは行えないというのが現状だ。しかし、坂下君は男としての機能は顕在らしい。という事で君には、重大な協力をしてもらう。さあ、坂下君、今までベッドの上に縛り付けてすまなかったねえ。お詫びと言ったらなんだが、そこにいるメスの人間を好きにしてもらって構わないよ。でも、殺さないでくれたまえよ。ふふつ。穴渕君、良かったねえ。君は、もしかすると人類初のモンスターとのハーフの子の母親になれるかもしれないんだよ。では、後は二人で愉しんでくれたまえ。私は、ここから眺めている事にするよ。坂下君、遠慮はいらないよ。好きなだけ、そのメスに

君の種子を注いでやってくれ。：あつ、それと穴渕君。今から行くことは、立派な研究資料となるので、きちんと録画しておくので、綺麗な顔をしてるのだから、良い顔をした方が演出的にはいいんじゃないのかね。ふふつ、では、さようなら。うれしい、性生活を。は。ふはははははは」

と突然、矢馬鍋の声が消えた途端、ガラスの向こうの部屋の電気が消えた。

穴渕「イヤあああああ！ 誰かああ！ ああああ！ イヤあ！ 助けてえええ！」

坂下「女。女。女だ。女だ！ ヤラセろ！ 女ああああ！」

穴渕「イヤあああああ！！！」

矢馬鍋「ふふふつ。さあ、どうなるのでしょうか。後は、あの女も拘束ですね。かわいそうですが、もし妊娠したあと、降ろされても、困りますからねえ。ふははははは！」

隣の部屋で、逃げようとものがく穴渕。それを押さえ込み、激しく交尾する坂下。その二人をいやらしい笑みで、静かに見下す矢馬鍋がそこにいた。

## 老婦人

老婦人「今日のご飯は、何にしましょうかね。ポチ！ポチはどこ？ああ、サスケ。ポチは、どこ行つたの？」

サスケと呼ばれた猿のモンスターは、知らないふりをして通り過ぎようとした。

老婦人「サ〜ス〜ケ〜！！どこに行こうって言うのお！？」

サスケは、ビクツツとして老婦人の傍にやってくると、ウキツ！つと言つと、バツつと走り去つた。

しばらくして、サスケが大きな熊のモンスターを連れて帰つてきた。

老婦人「ああ、ポチ。どこ行つてたの？じゃあ、今日の予定を説明するわね。……ポチ、あなたは私の護衛。サスケとルナは狩りに行つてらっしゃい。分かつた！？」

老婦人は、サスケとルナと呼ばれた、猪のモンスターにきつく言い放つた。

しばらく、サスケとルナはじつとしていたが、老婦人の顔をチラツと見ると、目の前の闇の中に消えて行つた。

老婦人「じゃあ、ポチ！こつちも始めましょうか。今日は、ここにしましょう。ん？はいはい、分かつてるわよ。…あなた、ごめんなさいね。ポチ。今日は、指ね。勿体ない事しないでね。これは、私の大事な主人なんだからね。じゃあ、やりましょう。待つてなさい、今行つてあげるから。じゃあ、ポチやるわよ」

ポチは、グウオオオと大きな声を出すと、老婦人の後について闇に姿を消した。

しばらくしてから、突然暗闇の中からドン、ドンツ、ドオオオンと大きな音が聞こえてきた。

老婦人「絶対ここで間違いないわ。ここがE.Vの扉よ。今回で当たりね。……でも、この戦力じゃ少し心持しないわね。そうね、じ

やあ、ポチ。私達も行くわよ。仲間を探しましょう。あなた達、動物ばかりもいいけど、植物も欲しいわね。じゃあ、私もちよつと、真剣になるわね」

そう言った途端、ポチは一回り程小さくなったように見えた。

老婦人「ほなら。行くで。ポチ！ 何やつとんの！ はよ、来んかい！ 何やつとんねん！ ポチッ！ あんた、私の言うことが、聞けんて言うんやないやろな！」

老婦人が、そう言うときポチはトボトボと老婦人の後について歩き出した。

老婦人の腕には、プラントモンスターから採取した後、何かで加工したような、鋭利な刃物のような枝が取り付けられていた。しかも、数本束ねた状態で。まるで、腕から大きな爪が生えているような状態であった。

## 情報収集

木村「どうや。なんか分かったか？」

男「いや。外見は、ただの病院やで。患者も、普通に通つとる。怪しいとこ見つけるいうほうが、難しいわ」

木村「中は、どないや？」

女「別に。さっきそいつが言つてたけど、普通の病院や。内科やろ、外科やろ、眼科に整形外科、婦人科、小児科、他にもあつたけど、変なとこは別にあらへん」

木村は、集会場で小数の集まりを開き、情報収集の集計を行つていた。

木村「そうやるな。まあ、一応初めから分かつてた事やけどな。

これでなんか掴めんねんやつたら、あの病院、既になんかおかしいって問題になつてやるうしな」

男「なあ。外から攻めんのは、もう限界ちゃうか？」

女「せやけど、ちよつと危険ちゃう」

木村「……せやな。もう、それしかないな。しゃあないな、何人かでまとまつて、捕まりに行くで。絶対氣い抜くなや」

女「なんか作戦あんの？」

木村「そんなん、中が分からへんねんから当たつて砕けろや！行くで！」

そう言つと、木村らは病院へ行くため、集会場をあとにするのだつた。

## 惨劇

辺りは静寂に包まれ、虫の声だけが響いていた。少し前まで、辺りを優しく照らしていた家々の明かりも消え、漆黒の空間の中に、時折遠くを走る車のライトが何かの合図かのように見えていた。

聖史「ねえお母さん、もうおじいちゃん寝たかなあ。まだ？　ねえお母さん」

伴子「もう少し。ね、聖史もう少し待ってね」

聖史「うん。あと、ちょっとだね」

伴子「おかしい、静かすぎる。いつも、こうなの？　もう少し様子を見た方が良さそうね」

伴子「聖史。お母さん、ちょっと見てくるから、ここで寝たふりをしてるのよ。……もし、おじいちゃんが来ても、寝たふりを止めちゃだめよ。分かった？」

聖史「うん。分かった。早く戻ってきてね」

伴子が部屋から出て行くと、聖史は布団に潜り込み、じっと息をひそめた。辺りが静かな為か、耳にキーンと小さな音が聞こえる。

聖史は、早く母親が帰って来ることを願っていた。

聖史「……………ん。あれ？　僕、寝てた？　ねえ、お母さん。……………」

……

聖史は、布団から出ると辺りを見渡した。伴子の姿が無い。少し寝てしまっていたのなら、その間に伴子が戻って来ても不思議ではない。不信感と何とも言えぬ違和感を覚えた聖史は、伴子の後を追って部屋から出て行った。

老人「お、どうしたんじゃ聖史。便所か？」

部屋から出ると、おじいちゃんが暗闇の中からスツと現れた。

聖史「ううん。お母さん。目が開いたら、お母さんいなくて。おじいちゃん知らない？」

老人「伴子か？　おらんのか？　まったく、こんな夜中にどこに

行つたんじゃ。こんな小さな子を置いて。……そうじゃ聖史、わしの所で寝るか？わしが一緒なら寂しくないじやろ。どうじゃ？」

『獲物が自分から呼んでいる』と、聖史はウキウキした気分になったが、母親の戻らない不安感と、拭いきれない違和感の為、「うん」と小さな声で返事をする、祖父と手を繋ぎ、祖父の部屋の方へと二人で歩いて行つた。

祖父の部屋に着いて、聖史は感じていた違和感の正体は何なのかすぐに分かつた。そこにはまだ布団が敷いてなかった。しかも、数名の男の人が、隣の部屋に行ったり来たりしている。皆、戻つて来る時、ズボンに触りながら戻つて来るのだった。

老人「聖史。お母さんが戻つて来るまでここにいろといい。もう寝るかい？寝るのだったら、布団を敷くけど、どうする？」

祖父は、優しく語りかけてきていたが、聖史には部屋に入つた時から、母親がどこにいるのか、なぜ戻つて来なかつたのかが分かつていた。

聖史「うっん。まだ、寝ない。………かわいそうなお母さん。…

…今助けてあげるからね。………おじいちゃん、僕お腹すいた。お

じちゃん達も、おじいちゃんも、ここから二度と表に出さないよ！

お母さん！ 今、行くからね！」

聖史は、隣の部屋に聞こえるように大きな声を出すと、表情が子供のソレとは全く違う野獣のようになり、口から長く糸を引くよだれを垂れ流すと、目の前の祖父に飛び掛かつて行つた。

老人「なんじゃお前は！ どうなつとるんじゃ！ ギャア〜！

止め、止めてくれ！ ギャ〜！ 助っ！ 助けてくれ！」

聖史「お母さんは、成り損ないなんだ。そんなお母さんをよくも！ よくもおお！」

聖史の風貌は、変わり果てていた。髪は大きく逆立ち、爪は長い鋭利な刃物のように伸び、全身の毛が針金のように逆立っていた。皮膚は、細胞のひとつひとつが分かる程硬化し、まるで鱗のようになつていた。

男達「うわああああ！ バツ！ バケモノだああ！ たつ。助け。助けて！」

男達が、入り口の方へ行こうとした瞬間、聖史は、祖父の足を貪るのを止め、祖父をくわえたままサツと入り口の前へ移動した。

聖史「おじちゃん達、お母さんに何したの！？」

竦み上がる男達に、聖史は大きな口を開き、荒らぶる声で尋ねた。聖史「何をしたのか、聞いているの！」

黙ったままの男達にイライラしているのか、聖史は手で押さえ付けていた祖父の腕を口でくわえたかと思うと、そのまま引きちぎり男達の方へ、投げ捨てた。

老人「うぎやああ！」

男達「ひいひい！ ……分かった。分かった。教えるから殺さないでくれ。はあつ、はあつ、そつ、その、オッサンが、静かにさせるなら何してもいいって言っから……」

聖史「言うから？ ……言うから何をした！」

男「大体、もともとは、あの、女が、いけないんだ。……その、オッサンが、娘がおかしいからって、初めは音がしたら来いって事だったんだけど、このオッサン、泊まってくれて、頼むから、ここで、皆で集まって、話してんだ。そしたら、あの女が入ってきて、すぐ立ち去ろうとしたけど、そのオッサンが捕まえるって言うから、……」

聖史「で、何をした！ さっきから、訳の分かんない事ばかり言って！ だから何をしたの！」

聖史は、祖父のもう片腕をまた食いちぎると、今度は投げずに、半分程をくちやくちや音をたてて食べ始めた。

老人「うぎやあああああ！」

男「うわあああ！ ひいひい！ こつ殺さないで。殺さないでくれ！うつ。うおえええ。」

男達は、部屋の中で蛇に睨まれた蛙のようになっていた。中には、目の前で行われるスプラッターな惨劇に嘔吐する者もいた。

男「と、隣の、部屋。隣の、部屋に、いる。俺、達は、交代で、あの女を、抱いていた、だけだ。それだけだ。た、助けて。か、帰して、帰してくれ。」

聖史「おじいちゃん、今の話本当なの！？」

祖父は、息絶え絶えに頷いた。その途端、聖史の鋭利な爪が祖父の腹部を貫くと中から長い臓物を引っ張り出し、長い舌で舐めながら呟いた。

もう祖父は、声も出なかった。

聖史「そう。じゃあ、おじちゃん達、やっぱり帰す訳にはいかないな。」

聖史は、そう言うと、祖父を押さえたまま、男達に一步近付くと右手の人差し指を立てた。男達が、一瞬たじろいた瞬間、聖史の姿が消え、周りからジュバツ！ジュバツ！と音が聞こえた。しばらくすると聖史が現れたが、もう男達は動く事すら出来なかった。先程の音は、男達の両足が、聖史の爪によって切断される音だったのだ。

男達「うぎやあああああ！ ひぎやああああ！ ぐああああ

！ こっ殺される！ 許し！ 助けて！ 殺さないで！ 助けて！ 死ぬう！」

男達は、口々に大声を出し、のたうちまわっていたが、一人また一人と静かになっていった。

聖史「お前らが悪いんだぞ。お母さんをいじめるから。お母さんをいじめるやつは、みんな死んでしまえ！」

.....。

聖史は、小さな子供の姿に戻っていた。部屋は一面真っ赤に染まり、赤い壁紙に包まれた部屋のようになっていた。所々にまるで壁紙の模様のように付いた肉片が、先程の出来事の酷さを物語っていた。聖史は全身血まみれで、辺りの生臭い異臭を感じる事さえできない状態になっていた。聖史は、祖父だったモノに近付くとその耳元で何かを呟くと、背中を上に向かせ背中 of 皮膚をベリベリと剥が

していった。剥がした皮は、無造作に床に投げ捨てられ、聖史は、隣の部屋へと歩いて行った。

聖史「お母さん。お母さん、どこ？ もう大丈夫だよ。お母さんをいじめる悪いやつは、僕がやつつけたからね」

聖史が歩いて行くと、全身にベトベトした液体が付着した伴子が、両手と両足をコンクリートで固定され、口に伴子の物と思われる下着を詰め込まれた状態でぐったりと横たわっていた。ベトベトした液体は、全身だけでなく、伴子の股間からも流れ出していた。聖史は、駆け寄ると……。

聖史「お母さん。お母さん」

と、何度も伴子を揺さ振りながら呼び続けた。

伴子「さ、と、し……。聖、史……。大丈夫？」

聖史「お母さん！ うん。大丈夫だよ。お母さんをいじめるやつ僕やつつけたからね。お母さん。今助けるね」

そういうと、四肢を押さえていたコンクリートを姿が変わったかと思うと一つずつ噛み砕いていった。

伴子「ありがとう。聖史。優しい子」

伴子は聖史を、ギュツと抱きしめた。『この子は、このままじゃいけない。どこかに隠さないと。近い内にもっと大変な事になる』

聖史「お母さん、痛いよ。……。あつ。お母さん、お腹空いてない？ 向こうの部屋に、いっぱい残してるよ。ねえ、お母さん立てる？」

伴子「ありがとう。大丈夫よ。さあ、ご飯にしましょうか。もう今日は、こんな事になっちゃったから、ご飯の後ここで寝て明日、帰るわよ。……。でも、もし近所の人が来たら、分かるわよね」

伴子は聖史の顔をじつと見つめて話し掛けると、ふっと優しい笑みになり、隣の部屋に歩いていった。

『でも、大丈夫かしら。聖史の下の子出来ないかしら。あの人達、遠慮無しなんだから……。私、いつまでこの子の傍にいてあげられるのかしら』

伴子「聖史。いらつしやい。私、こんなに沢山食べられないわ。

聖史も食べていいわよ」

聖史「うん。…でも、これはダメだよ」

と、祖父の背中から剥ぎ取った皮膚を拾い上げた。

伴子「もう！ お父さんの次はおじいちゃん？ それ、止められないの？ ……お願いだから、人がいつぱいいる所ではしないでね。みんな、変な目で見てるから。お願いよ。分かった？」

聖史「うん。分かった」

聖史は少し寂しそうだったが、母親の顔を見て、そう返事するしかなかった。

『ごめんね聖史。私がお父さんの皮なんかを、あなたに渡さなかったらそんな癖もつかなかったのに……。あの人がいけないのよ。聖史を殺そうとしたりするから……。なぜ、この子を殺そうとしたの。こんなに優しい子なのに。なぜ？ 私本当は、あなたを殺したくなかったのよ』

伴子は、聖史が祖父の皮膚を大事そうに取るのを見て、聖史が自分の父親に殺されそうになった時の事を思い出していた。

聖史「どうしたの？ お母さん？ 大丈夫？」

伴子「え、ええ。大丈夫よ。さあ、ご飯にしましょう。聖史、分かってると思うけど残したらダメよ。骨まできれいに食べないと、後から警察がややこしいからね」

聖史「うん。分かってるよ。でも、壁に付いた血はどうしようもないよね」

静かな部屋の中で、くちや、ぐちや、ゴクン、べちや、ゴリツ、つと臍物を咀嚼、嚥下、骨が碎ける音だけが、静寂を打ち壊すように響いていた。

老人の家の中で、壮絶な惨劇が行われていたにも関わらず、辺りの静寂は何も変わらず続き、虫の声だけが静かに響いていた。漆黒の闇は、老人達の悲鳴や絶叫も掻き消してしまったかのように、近隣の住民は何もなかったかのように眠りについていて、一人の男を

除いて……。

男「う。うおえええ。お、俺は、俺は何も見えてないぞ。うおええええええ。はあはあ。俺は何も見えてない。俺は何も見えてないぞおおお！」

老人の家の路地裏から下半身裸で青白い顔でふらふらと出てきた男は、嘔吐を繰り返しながら、渴いた声で、涙を流しながら叫んでいた。声にならない声で。

老人の家の玄関辺りに男が来た途端、ふっと男の姿が消えた。

男「うわあああ！俺は何も見えてない。だから、助け……。」

一瞬、男の声が聞こえたような気がしたが、すぐに辺りには静寂が戻っていた。

## 情報

神名「ちよっと、これ見て」

神名に誘導された霧斗と中田は、パソコンに表示された画面をいきなり見せられていた。

神名「どう思う？」

霧斗「どうと言われても、……これ全国模試の結果じゃないか。これが何だって言うんだい？」

中田「えっ！ 全国模試だって！」

神名「そうなのよ。ね、変でしょ？ ……あなたは何も思わないの？ 相変わらず鈍いわね。」

霧斗「なんだよ。何が鈍いつて？ え〜と、一位が徳島、二位が山梨、三位が……。これの何が変わって言うんだ？」

中田「霧斗さん、ちよっとどいて下さい。……。……。……。……」

「やっぱりそうだ。霧斗さん、ここ見て下さいよ」

霧斗「ん？ 最下位が、沖縄？」

神名「その下よ。」

霧斗「何だよ。え〜と……、京都、大阪、奈良、兵庫、和歌山、未回答？ ……何で？」

神名「あゝ！ もう！ 本っ当に鈍い！」

中田「霧斗さん、よく考えて下さいよ。今、街中じゃモンスターがつろついて、会社はおるか、学校へも誰も行っていない状態なんです。そうですよね？」

霧斗「うん、そうだね」

神名「そうだね。じゃないわよ！ じゃあ何で、全国模試の結果なんて出るのよ。学校にも行ってないのに！」

霧斗「どういう事だ？」

中田「しっかりして下さいよ。だから……要は、近畿圏だけなんですよ！ 今の事態が起こっているのは！ ……その他の地域じゃ、

今も何も変わらず生活しているって事です!」

神名「どう? 分かった?」

霧斗「ふ〜ん。そうなんだ。……という事は、近畿圏のモンスターを駆逐すれば、一件落着って訳だ」

中田「いや、そんな簡単な問題じゃないと思いますよ。強いて言えば、まだ近畿圏だけでおさまってくれてますが、いつ周りの、他府県に飛び火するか分からないって状態だと考えるのが妥当だと思いますけどね」

神名「そういう事。で、この件は、『今の現状が確認できた』という位で置いといて、後二つ見て欲しいものがあるの」

そう言くと、神名はパソコン内の、『Real RPG』というページを開いた。

中田「何だ? これ?」

霧斗「ほう! 俺達と同じようにモンスターハントしている奴らのリストか。でも、こんなもの誰が作ってるんだ?」

神名「制作者は不明。ある意味、ゴーストサイトなのよ。でも、確実に更新されていつてるの。これ、使えないかしら」

中田「なるほど、これを使って仲間を増やそうって訳だな」

霧斗「でも、アマチュアハンターをいくら増やしても、足手まといにしかないんじゃないのか?」

神名「そう言うと思っていたわよ。だから、え〜と。ちょっと待ってね。……。……これじゃない。……この人達も違う。

……あれ? どこだったつけ。……。……あつ、あつた。これ、この子達なんてどう?」

中田「え? この子達? 子供?」

霧斗「お前なあ。子供、仲間にしてどうするんだよ」

神名「甘いわね二人とも。ちゃんと読む。そして見る。この子達、この文章上で見るとただ者じゃないわよ」

神名は、パソコンの画面を指差して得意気に言った。

霧斗「でもな、子供だろ……。何々? 『奈良県在住の二人組。』

一人は釘バットで殴り倒しながら、接近戦にはサバイバルナイフを使用。多勢に無勢時は、腰にぶら下げてあった、油の入った水鉄砲で油を撒いた後、ライター付き殺虫剤で火炎放射。もう一人は、シンプルファイターながらも、身の丈程ある長刀を両手、片手で器用に振り回し、こちらも接近戦には脇差しから短刀を抜き出し、二刀流ヘスタイルチェンジ。たった二人で、50を超えるモンスターをほぼ無傷で戦う。しかも笑いながら。奈良県、最強か？」か

神名「ね。すごいでしょ。ねえ、この子達に会いに行ってみない？」

中田「でも、奈良だぞ。神戸から奈良まで会いに行く必要があるのか？」

神名「強力な戦力よ。遠いなんて言ってられないんじゃないか？」  
霧斗「……分かった。行ってみよう。但し、仲間にするかどうかは、当人達の能力を間近でみてからだ。いいな」

神名「ええ。いいわよ」

中田「ええ！行くのお？」

山里家二人は、意気揚々としていたが、中田は嫌々笑っていた。

中田「で、あと一つは？」

神名「あつそうそう。これはちよつと見つけた記事なんだけど気になる事が書いてあったから。え〜と、読むわよ。『昨日未明、京都の山間の村にて惨殺現場発見。現場の佐久田正三氏さくたしょうぞう74歳の家の一室にて、佐久田氏とその近隣住民数名の血液が、部屋中に飛散、付着しているのを、近隣住民が発見。その場に死体が無かった事から、警察は死体を移動させた可能性が高いとして捜査を開始した』これだけなんだけど、これってただの殺人なのかしら。場所が京都だし。ごめんね、これはちよつと気になったただだから。聞いてもらいたくて」

霧斗「確かに気になるが、それは置いておこう」

中田「ねえ、神名さん。さっきのサイトだけど、俺達の事も載ってんの？」

殺人には、興味がないとばかりに中田は突然話題を変えた。

神名「えっ、え〜とお。載ってるわよ。読みましようか？」

霧斗「お、それは俺も興味ありだな。読んでくれ」

神名「じゃあ読むわよ。まず中田さんからね。『姫路の鬼神。異様な笑い声をあげながら、チェーンを鞭のように振るう男あり。全身にモンスターの返り血を浴びながら、戦う男の姿はまさに鬼神そのもの。しかし、笑い方の為か、狂人にも見えてくる。兵庫県内では、四天王クラスか？』どう？」

中田は、返答せずに苦笑いだけしていた。

神名「次は私達ね。『神戸の街に、バトルマシーン発見。夫婦なのか、二人の男女が戦う姿は圧倒的。男の方は、両手にナイフを持ち、小刻みに攻撃を行うも、そのほとんどが致命的ダメージを与えており、瞬時に急所を見極めているようだ。女の方は、ナックル装備。ナックルも数種類持つているようで、シンブルな物から長い爪の付いた物まで、現在確認しているだけでも3種類。また、蹴りも強力な武器になっている事を考えると、あの靴には秘密が隠されていそうだ。近距離バトルにおいて、スピード、パワー、テクニクどれをとってもトップクラス。この二人、兵庫県内では四天王クラスか？ 一人一人が四天王クラスの可能性も拭えない』ってこんな感じ」

霧斗「これ書いてる奴、よく見てるな。どこから見てるんだろ？」

中田「確かに、不思議ですね」

霧斗「まあ、それは今はいいや。じゃあ、行こうか。奈良へ」

三人は、立ち上がると部屋から出ていった。

中田「でも、俺、あれ書いてる奴知りたい……」

中田はボソッと呟いた。

## 潜入

園川「クッククックツ。貴重なサンプルが、こんなに手に入るとは、全く笑いが止まらないな。クッククックツ。矢馬鍋から人間との見分け方も聞いていたので、苦勞もしなかったし。これで、矢馬鍋に高飛車な顔はさせんぞ。クッククツ。それにしても、活きの良いのが……、7体も。待ってるよ、矢馬鍋。クッククツクツ、ハアハッハッハッハ！」

木村「お前ら、まだおとなしくしとけや。奴ら俺達的能力にまだ気が付いとらへんようや。あの男、俺達を矢馬鍋って奴に引き渡すつもりらしい。もう少し様子見てから、浩二に近付いたら行動開始や」

女「あんた、ほんまに地獄耳やな。惚れ惚れするわ」

木村「しゃあないやろ、これが俺の覚醒した能力やねんから。それより保、動く時は頼むで」

保「分かつとる。こんな鎖、糸みたいなものや。問題あらへん」

女「あんたらええなあ。役に立つような力があつて」

木村「何ゆうてんねん友利。お前のその動態視力、一番侮れへんのとちやうか？」

友利「そんなことないわよ。ただ動いてるモノが、ゆっくりに見えるだけやんか。そんなんより、ほんまに7人なんかで良かったん？」

木村「俺は、バランスのとれた6人を連れて来たつもりやで。ちやうか？怪力の保やろ。雑食の蓮見。駿足の轟。動態視力の友利。強嗅覚の犬飼。皮膚硬化の羽瀬。そこで地獄耳の俺や。最強やないか？……ん？誰か来る！」

しばらくして、ドアが開いた。

園川「おやおや、おとなしくなってしまいましたね。それでは、

この中枢、研究施設へ移動しましょうか？ クックク何も心配いりませんよ。すぐに浩二君に会わせてあげます」

木村達は、言われるがままその男の後について行った。

しばらく行くと、男は壁の前で立ち止まり、壁に手を当てた。すると壁に019の10個の数字が浮かび上がると男は6ケタの番号を押した。すると、壁だと思っていたところが両側にスーッと開き中にEVが現れた。男を含む9名が乗り込むと、EVは下へと動きはじめた。

かなり下まで降りたような気がした時、突然EVガタツッと大きく揺れたと思うと、明かりが消え、ボウツとほのかな光に変わった。

園川「どうした!」

引率していた男は苛立ちの表情に変わり、横にいたまだ一度も声を発していない女に怒鳴り付けた。

女「確認します。」

女は、表情を一つも変えず、ポケットの中から小さなマイクのような物を取り出すと、ボソボソと何かを話始めた。時折頷くだけで全く表情を変えずボソボソと話をしていたが、「了解しました」と一言 言ってマイクをしまい込んだ。

園川「どうなってる!」

男の動揺とは反対に、女は平静を保っていた。

女「中層にて爆発事故が発生したようです。原因は不明。現在、確認中です」

園川「事故とは何だ! 中層は、サファリエリアではなかったのか!」

女「現在確認中です。詳細は不明です。しばらくこのままお待ち下さい」

園川「くそっ! 何だと言うのだ! なぜお前は、そんなに落ち着いている!」

女「……………」

園川「何とか言ったらどうなんだ!」

女「……無駄な私語は不要です。」

園川「くそっ！機械女め！」

男は、女に聞こえるように悪態をついた。

木村「上から何か来るぞ」

犬飼「臭い、臭いぞ。獣臭せえ」

蓮見「メシの臭いだ。メシが近付いて来るぞ」

園川「お前ら何を、……！」

男が、木村達に何かを言おうとした時EVの上にドンツッと大きな音があったと思うと、EVがガタガタツツと揺れた。

木村「来るぞ。来るぞ。今、上にいる。今、天井を開ける音がする」

犬飼「臭せえ。獣臭せえ。ん？人間がいるのか？」

女「Dr.端へ！バトルフォームへ入ります」

木村「保！扉を開ける！ここ狭いやろ！広いとこ探せ！」

犬飼「少し下に臭いの薄れている空間がある。多分部屋か何かや」

保「おっしやつ、分かった！うおおおお……！」

保はEVの扉を素手でこじ開けると、扉の前に現れた壁を上を持ち上げるようにし、EVをゆっくりと下に動かし始めた。

木村「保急げ！もう時間ない！」

保「分かってる！犬飼！あとどれくらいや！」

犬飼「あと少しや！……よしっ、ここや！保！前の壁、壁とちゃう！扉や開けてくれ！」

保「分かった！」

女「バトルフォーム、チェンジオン！来ます……！」

女が、声を出した瞬間EVの天井の一部が剥がれ、そこからモンスターの顔が覗いた。

保「うおおおりやああ……開いたぞ！分散しろ！」

木村「各自、戦闘体制に移行！得意範囲に、分散しろ！」

木村、保、女の声を引き金に園川を除く8名は、EVの外に姿を消していった。



## 強敵

正志「頼！ 後ろがあまくなつてっぞ」

頼「へへっ、サンキュ！ って正志、上、上！」

正志「うおっと。何で上から降ってくんだよ！ ……なあ、頼。技の完成度合いどうだ？」

頼「うっせー！ くそっ！ 上手いかねーな」

今日も頼と正志は、狩りをしながら頼の技の習得に励んでいた。声「力ばかりで振ってても、その剣の力は出しきれないよ」突然頭の上の方から、声が聞こえてきた。

正志「誰だ！」

頼「何！？ お前何者だ！」

土手の上に男の子が、母親と手を繋いで二人を見下ろしている。

頼「おいガキ！ ナマ言ってくれんじゃねーか！」

正志「ほっとけ、頼！ ガキの戯言だ」

子供「ガキじゃないよ。聖史って名前があるんだ。剣のお兄ちゃん、もう一人のお兄ちゃんに勝ちたいんだね？ でも、勝ちたいばかりで、力が入りすぎだよ。そんなんじゃ、そのお兄ちゃんに勝てないし、そのうちモンスターに殺されちゃうかもね」

頼「言ってくれんじゃねーか！」

正志「ほっとけて」

頼「正志。ちょっと黙っててくれ。……おいガキ！ それだけ言うなら、一戦やるーぜ！ それとも俺が大人げねーか？」

聖史「ううん、いいよ。本来なら、お兄ちゃん程度の能力なら僕の力を使わないで、お母さんと戦ってもらっただけど、僕が言い出した事だし、指名を受けてるのにお母さんに任せたら、逃げてるみたいで嫌だから特別にお相手するね」

頼「じゃあ、降りてこいよ！」

聖史「じゃあ、ここから行くよ。構えてね。じゃ…」

と言ったと思うと、聖史の姿が消え、頼の目の前にスツッと現れた。

聖史「ぼーっとしてると、すぐ終わっちゃうよ」

頼「何!？」

驚いた頼が刀をすかさず振ると、聖史は頼の背後から「こつちだよ」と一言 言った。頼はすぐ振り返り、構えに入ったが土手の上から聖史の声が聞こえてきた。

聖史「やっぱりお母さんとやってくれる? お兄ちゃん、遅すぎでつまないよ」

頼が土手を見上げた時、すでに聖史は母親の手を握りそこに立っていた。

頼「くそっ! 何だあのガキ。見えねー」

伴子「では、選手交代です。行きます」

そういうと、母親が土手より走り降りて来た。

頼「ガキの次は、オバハンかよ。今度は遅れをとらねーぞ」

伴子「手を抜いてあげるから、本気できてね」

伴子はそう言うのと、頼に向かって一直線に走ってきた。頼が、すかさず左に避け右から横切りを放つと、伴子は左腕の背で受け流すと、右手に力を入れ大きな石でも持つような形のまま頼の胸元を引っ掻こうとした。頼は、危険を感じ一歩後退し、すぐさま上に弾かれた刀を切り返し、切り下ろしたが、伴子に瞬時に避けられ、そのまま左に刀を移動すると右上に向かって切り上げ、避けられるのを予想してたの如く左手で右の脇差しより短刀を引き抜くと右から左へ一閃の斬撃を放った。伴子は切り上げには、反応したが短刀の一閃は予想外だったらしく、右手で受け止めると、後ろに大きくジャンプした。頼は、すかさず短刀を脇差しに納めながら、攻撃の手を緩めず伴子を追従し、刀を地面に付けたまま伴子の方へとダッシュした。宙の伴子が着地の瞬間と同時に渾身の力で、両手で切り上げを放ち、そのまま前進し、再度短刀を引き抜くと右から左への一閃、左上から右下への一閃、右下から左上への一閃の後、右手に持った

刀を叩き付けるように振り下ろした。伴子は、連続の斬撃を避けることが出来ず左右の手の甲で受け流し、頼に向けて右手を開いて向けると、「負けたわ」

と言 言つと、聖史の所に戻って行つた。

頼「はあ、はあ、はあ、はあ。どうだ！ この、俺の、どこが、弱えーって、言うんだ！ はあ、はあ、ガキいー！」

頼は、刀を杖のように地面に突き立て、聖史の方を向くと大声で叫んだ。

聖史「すごいねえ、お兄ちゃん。でも、まだまだだね」

頼「何、だと！ ……大体、お前ら、人間じゃ、ねーだろ！ 何で、刀で、切れねー、んだよ！」

聖史「うん。人間じゃないよ。でも、人間みたいでしょ。………ねえ、お兄ちゃん。強くなりたい？ ……今よりも、もっと強くなりたい？」

頼「はっ！ バケモノが何言つてんだよ！」

聖史「お兄ちゃん。強くなりたいなら、僕と一緒においでよ。お兄ちゃんなら、もっともつと強くなれるよ。もしかすると、そこのお兄ちゃんより強くなれるかもしれないよ」

頼「阿呆か！ 何で友達裏切るような事しねーといけねーんだ！ お前と行かなくても、俺は正志といたら強くなれんだよ！」

聖史は少し困ったような顔をしたが、すぐ平然とした表情に戻つた。

聖史「そつちのお兄ちゃん、このお兄ちゃんは、こう言ってるけど、本当に強いのか？ 確かめさせてもらっていいかなあ？」

と言うや否や、突然襲い掛かってきた。

正志「……！」

聖史が消えたと同時に、正志は火炎放射を回転しながら行つた。その際、一部火炎が途絶える部分を確認すると、放射を持続しつつ、サバイバルナイフでの連続斬撃を無数に放つた。聖史は、火炎の中を突破しようとしたが、ナイフの斬撃の為、一時後退し、横飛びか

ら再度攻撃体制に入った。すぐさま正志の背後に入ると、爪で背中を攻撃した。が、そこには、釘が打ち込まれたバットがあり攻撃を受け流されると、正志の体が回転し横一閃のナイフの斬撃が飛んできた。すぐさま爪で刃を合わせ、飛び下がったが、油が体中に浴びせ掛けられた。攻撃の意味を知らない聖史は、左右のフットワークを使い、見えない恐怖を与えながら聖史に突如襲い掛かったが、目で追わず気配のみで聖史を探っていた正志に火炎放射を浴びせ掛けられ、火だるまになりたうちまわった。正志は、火だるまの聖史を傍観せず、釘バットを取り出すと、殴り掛かった。聖史は、全身の火を消ながらバットの打撃を避けると、一時戦闘区域より離脱し正志に向かって叫んだ。

聖史「お兄ちゃん、本当に強いね。僕、本気出していいたかなあ？  
ねっ、いいでしょ？ 殺さないから、ねっ」

と言うと容姿が変貌し始めた。頭の髪や身体中の毛が逆立ち針金のようになり、手足の爪が長く伸び、全身の皮膚が鱗のようになった。

聖史「じゃあもう一度行くよ」

と言うと、正志の体は宙に浮いていた。正志は、左肩に痛みを感じたがすぐに空中で体勢を立て直し、追撃に備えた。地面に叩き付けられると同時に、頼の方へダッシュすると、「ちよつと借りる」と一言 言うつと、右手に長刀を逆手で持ち、左手にサバイバルナイフの逆手持ちの二刀流スタイルにチェンジした。膝の動きが激しくなり、腰と上体を低くした姿勢で、死角を無くす如く、キョロキョロと辺りを見渡しながら、左右へのフットワークを繰り返した。聖史は、その状態を見て正志の背後に周り、一直線に攻撃に入ったが正志のサバイバルナイフに爪での斬撃を流され、長刀での十文字切りをすぐさま腕で防いだ。しかし、後退せず余った手で次なる斬撃を放った。正志は、バックステップでかわすと同時に刀を縦に持ち斬撃の防御を行った。斬撃を弾かれた聖史が、次のフォームに入る前に正志は落ちていた鉄の棒を拾い上げると、油をかけ火を付けた。

刀を鞘に戻すと、燃え上がる鉄の棒を持って聖史に襲い掛かった。聖史は、縦、横、斜め、回転とオールポジションに対応する棒の攻撃を回避することのみを行っていたが、下から上に振り上げた隙について、その懷に飛び

込むと爪の斬撃を放った。超近距離に対応出来ない棒を持った正志は、棒を盾にバックステップでかわそうとしたが、避けきれず両足の大腿部付近のズボンに5本の切れ目が入りズボン、靴下、靴が赤く染まり始めた。正志は、火炎棒を捨て、刀とサバイバルナイフで追撃への防御と同時に反撃への姿勢に入ろうとしたが、上手く足に力が入らずその場に倒れ込んだ。

聖史「お兄ちゃん、すごいよ。この姿でこんなに動いたの初めてだよ」

そう言うと、子供の姿に戻り、頼の所へ駆けて行った。

聖史「ねえ、お兄ちゃん。これで分かったでしょ。誰いたら強くなるか。じゃあ、行こうか？」

聖史に差し出された手を、しぶしぶ握り返した頼は、正志を気にしながら、聖史と共に姿を消した。

その場には、聖史に負け悔しさを感じる暇もなく、頼がいなくなった虚無感と絶望感に流される正志と、主を失った刀だけが残っていた。女「ねえ、あの子じゃない？」

男「でも一人じゃないか」

突然、後ろから声が聞こえたので、正志は咄嗟に振り返った。

女「やつぱりそうだよ。顔覚えてるもん」

もう一人の男「じゃあ、あと一人は？」

女「聞いてみたら分かるんじゃない？」

3人の男女は正志の所まで来ると足を止めた。

女「ねえ、君、正志君？」

突然知らない人に声を掛けられた正志は、声も出せずに戸惑っていた。

男「違うんじゃないのか？」

女「いいえ。間違いないわ。ねえ、正志君でしょ？」

正志は事態が掴めないまま、頷いていた。

女「ほらね。ねえ、君一人？ 頼君は？」

正志「頼は、……。頼は、……。変な子供と、……行っちゃった」

男「は？ どういう事だ？」

女「知らないわよ」

正志「あなた達は、誰なんですか？ 何で俺の名前知ってるの？ 何のようですか？」

正志は頭が混乱していたが、出来るだけ正常に尋ねた。

女「あつ。ごめんなさい。私、山里神名っていうの。こつちが主人の山里霧斗。で、こつちが中田激よ。私達パソコン内のあるサイトにあなた達が紹介されていて、モンスター退治に仲間が欲しかったから、探しにきたの。ねえ、仲間にならない？」

霧斗「おい、神名。とりあえず行くとは言ったが、仲間にするかどうかは、見極めてからって話だっただろ」

中田「じゃあ、ここで一戦やりますか？」

神名「ちよつと待つて。ねえ、正志君、私達と一緒に行かない？ 人数が多い方が、頼君を探すのにも楽じゃない？ ね。どう？」

正志は少し考えてから、「分かりました。あなた達が人間ならば」と答えた。

中田「????? は？ 人、間だったら？」

霧斗「俺達は、人間だよ。ニユースでやってたような感染者じゃない」

正志「じゃあ、よろしくお願いします」

正志が手を差し出すと、霧斗がその手を振り払った。

霧斗「さつきも言ったが、俺達は仲間を探している。サイトは見ただ。確かに強いらしい。しかし、それは二人いる時の強さかもしれない。俺は神名のように楽観的ではない。一戦を交え、足手まといにならない事を確認させてもらってから、お願いしたい。ダメかな

？」

正志「いいですよ。俺も実際は同じですから。……でも、……少し休んでいいですか？」

そう言つと正志は、その場に倒れ込んだ。

神名「ねえ、正志君、どうしたの？」

中田「何やこれ。こんな傷で戦うつて言つたんか？」

三人は、正志の両足に刻まれた五本の裂傷を見て息を呑んだ。

神名「手当てしなきゃ」

そう言つと、中田が正志を抱え、車へ運ぶと病院へと急いだ。

霧斗「いつもいつも何なんだ。一戦やろうつていうと、邪魔ばかりだ」

霧斗は、大きく溜息をつきながら車を走らせていた。

## 乱戦

館内放送「サンプル保管エリアにてバトル発生。館内のファイターは、鎮圧に参加せよ。バトルしているのは、サファリエリアのモンスター多数と本日捕獲のヒュムモンスター7体、園川Dr.の護衛。モンスター、ヒュムモンスターは大事なサンプルの為生きたまま捕獲せよ。繰り返す、サンプル保管エリアにてバトル発生。館内のファイターは、すぐに現場に急行しこれを鎮圧せよ。バトルに巻き込まれた園川Dr.を保護し、モンスター、ヒュムモンスターを捕獲せよ。なお現場は、非常灯のみの為、十分注意せよ」

けたたましいサイレンと共に、落ち着いた話し方だが、パニック状態を隠しきれない声の放送がフロアー内に響き渡っていた。

木村「すごい数だな。どんどんやって来るで。ん？ 先制攻撃か？ やるな、あの女。でも、まだまだだな。……ほら、すぐに起き上がった。襲われるな。大丈夫か？ ……何！ 女の周りのモンスターが吹っ飛んでやがる、轟か？ あいつ、いきなりトップスピードかよ。……ってこっちきた。しょうがないな、召集かけるか。」

木村「……お前ら！ 聞こえるか！ バラバラやと戦力的に不利や！ 一旦集合！」

木村が声をかけると散らばっていた仲間達が次々と木村のもとに集まってきた。その時木村は聞き逃さなかった。遠くの方で「バラバラに攻撃しない。一度集合！」という声が聞こえたのを。

犬飼「モンスター共が集まっていくで。すごい数や。ん？ 人間？ 人間がモンスター使ってる？ ……まあ、今はええわ。何か知らんけど、モンスター達を束ねてる奴がおんぞ！」

木村「ここの戦闘員も到着したみたいだな。という事はあつちに移動手段があるいう事だな。……おいお前ら、今から言うことよう聞けよ。あのモンスター達の敵は、もともと俺らやない。ここの奴らや。だからモンスターとまともにやり合うな。今、ここの戦闘員

達が集まってる奥の通路、あそこに移動手段があるようや。あの通路を確保すること最優先。邪魔する奴は排除してかまへん。そんじやあ、ちよっと3グループに分けるで、まず轟と友利。蓮見と犬飼と羽瀬。で、保と俺や。じゃあ行くで！」

そう言つと木村達は、戦闘員達の方に向かって行つた。

犬飼「蓮見。羽瀬。俺らの右側にモンスター共が固まってやがるが、動く気配がない。前方に戦闘員が4体や行くで！……羽瀬！突っ込んで、攻撃をガード！」

羽瀬は、ファイターの前に走って行くと全身の皮膚を鎧のように変化させ大の字で立ち塞がった。ファイター達は、現れたヒュムモンスターに驚き、各々持っていた武器で攻撃した。……が、羽瀬の皮膚に弾かれ、傷一つ負わせること叶わなかった。犬飼「……蓮見！一番左の奴、弾かれてふらついてる。喰うたれ！」

犬飼が言つや否や、蓮見はファイターに喰らい付いた。

ファイターA「ぎゃああああ！」

ファイターB「どうした！」

ファイターA「腕が！腕が！」

蓮見がファイターから離れるとファイターの右腕が右肩から喰いちぎられていた。

犬飼「羽瀬！そのままタックルや！全員押し倒して、蓮見の餌にしたれ！」

犬飼の号令で、羽瀬はファイター達に突進して行つた。ファイター達も、犬飼の声が聞こえている為、武器で応戦してきた。4人の内1人は、腕を喰われ戦意喪失状態であつたが、3人はフォーメーションを組み、羽瀬の前方に1人が立ちはだかつていたかと思うと後方に回り込んだ1人が、後ろから切り掛かった。不意を突かれた羽瀬だったが、背中は無傷のまま、上体を勢いよく起こし切り掛かったファイターを跳ね退けた。その瞬間、前方のファイターの足の間から1人滑り込んでくると、羽瀬の下から連打の打撃を繰り出した。が、羽瀬はものともせずファイターの上にのしかかると、踏み

付けた状態で前方のファイターへタックルを見舞った。

蓮見は、犬飼の指示を受け順に倒れるファイターに近寄ると、足や腕など移動、戦意に関する箇所を次々に喰らっていった。

犬飼達が駆け抜けた後には、手足が無くなったファイター達がうめき声をあげながら、横たわっていた。

轟「はあゝはっはあゝっ！ 弱えーし、遅え！ こいつら、俺の姿見えねーんじゃねーの？ 弱えーわ！」

友利「轟！ 前っ！ 狙われてるわよ！」

ファイター「死ね！ 格闘、戦士ダイブじゃ接近戦で、奴のスピードに順応できないらしい『アローレイン！』」

その言つと遠距離から、無数の弓をランダムに放った。

友利「轟！ まず、左右に矢が分散してくるわ。中央突破！ 次は全包围の矢がくるわ。右の矢が早く着弾するから、まず左に移動！ ……今よ！ すぐさま左へ！ それをかわしたら中央へ移動！

10本の矢が飛んでくるわ、左右のフットワークでかわしつつ右へ移動！ 右に移動したら、そのままアーチャーに接近！ 近距離には苦手のはずだから一気にきめて！ ……轟の攻撃は手数が多いけど、ダメージをあまり与えていないようだから、わたしの指示に従って！ 分かった！？」

轟「さすがやな、友利！ 俺のスピードについてくるなんてよ！ 分かった。相手の攻撃の読みは任したで！」

戦士タイプ・格闘タイプ・アーチャータイプのファイターが入り乱れる中、轟は得意のスピードで縦横無尽に駆け回り、友利は戦局が有利になるようアドバイスをした。友利達は、戦闘の後、まるでカーペットの上を歩くように戦闘員達の上をゆっくりと歩き、通路へと辿り着いた。

木村「保！ 右や！」

保は、自分の右にいた戦闘員の足を掴むと、まるで剣を振るかのよう目の前で振り回した。

木村「保、お前と組んだんは、その力があつたら、俺の聴力と併

せて敵無しと読んだからや。頼むで」

保「おう！ 任しとき！」

保は、木村に向かって『にっ』と笑うと、両腕をグッと曲げて力こぶを見せた。

木村「おい！ 保。そいつは捨てる！ そんなん持ってたら戦いにくいやる。」

木村がそう言うのと、保は持っていた戦闘員を遙か彼方に放り投げた。

木村「じゃあ行くで！」

と二人は、走り出した。

木村「保！ 左！ すぐに右！ 前も！ あっ！ 右と左にまだおる！」

木村は、保に戦闘員の音のする方をその都度伝えるも、保はそのスピードについていけなかった。

保「ぐわっ！」

保が前方の敵に攻撃を加えた瞬間、左右の戦闘員が保を攻撃していた。

木村「保！ 大丈夫か？」

保「大丈夫や。ちよつと不意打ちくろうただけや。…何さらすんじゃワレら！」

頭から血を流しながら、保は両横の戦闘員をわしづかみにするとお互いの頭を叩きあわせた。その途端『グジャ！』と鈍い音と共に二人の戦闘員の頭は、砕けて無くなっていた。

木村「おい、血い出てんぞ。ちよつと休むか？」

保「大丈夫ゆうてるやろ！ そんなんやつとつたら、他の奴らに置いてかれるで！ 頼むわ木村。お前のその耳が頼りなんやで。急ぐで！」

木村「保。とりあえずこれ持つとけ。丸腰よりは、全然マシや」と戦闘員が持っていた鉄の棒を保に放り投げた。保の頭からいつまでも流れ出る血を見ながら、木村は心配な気持ちを抑えて走り出

した。

しばらく目の前の戦闘員を倒しながら走っていた二人だったが、木村は妙な音に立ち止まった。

木村「ちよっ！ 待て！ 保、ストップ！」

保「なんや木村。また頭の心配か？ それやったら問題あらへん。大丈夫や。な、大丈夫」

木村「ちやう！ ちよつと待て。この音、人間やない。冗談きついわ！ 後もう少しやゆうのに」

保「どないした。木村」

木村「氣い付けろ。今、前におんの人間ちやうぞ。……モンスターや。……しかもこのモンスター達何かに操られてんのか？ 氣配消しとる。うようよおるぞ」

保「どないした木村。たかがモンスターやろ！ 蹴散らして行ったらええんとちやうんか！」

進もうとする保を木村は、腕を掴み

木村「あかん。まだや。まだ行くな！ 今、行ったらあかん！ ちよつと待つんや。……保……おかしいと思わんか？」

保「何があ？」

木村「止まつてる。俺らの前、なんや知らんけど止まつてるんや。モンスターが襲ってこんと止まつてるんや」

保「そんじゃあ、ちようどええやんか。一気に突っ込んで蹴散らしてもうたらええんとちやうんか？」

木村「それもせやけど、一気には止めとこ。音だけでの判断やけど、あいつら何かおかしい」

保「おかしいのお前とちやうんか？ モンスターごときにびびつて」

木村「そこまで言われるんやったら分かったわ。そんじゃあ行くこか。但し、慎重にや。これはびびってんのとちやう。じゃあ行くで、氣い抜くなや！」

と二人がしばらく走ると、保にも分かるモンスターの氣配が現れ

た。……つつつ途端！目の前のモンスター達の布陣がばらけた。  
木村達を出迎えるかの如く半円の状態で布陣であったのが、前方の息遣いが消え左右にババツつと飛び消えた。木村はその音に慎重に耳を傾けながら走り続けた。

木村「保！来るぞ！お前、死ぬなよ」

その言葉が終わらない内に、左右から弾丸のようにウルフ型モンスターが飛び掛かってきた。モンスターの数は左右共に4匹ずつ」

保「うおっ！つと。おおおりやあああ！」

保は木村の指示のないまま突如現れたモンスターに少したじろいたが、持っていた棒を横一閃に振り、モンスター達をまるで野球のボールかのように打ち返した。

保「な。大丈夫やろ！木村行くで！」

木村「油断すんな！保！前から……この音は……プラントモンスター。しかも大木タイプ！左右からも来んで！激しい息遣いが聞こえる！アニマルモンスターや！一気に来るぞ！構えろ！この数はお前だけでは抑え切れん！俺も入るからな！ゴメン。もう指示してる余裕ないと思うわ！」

保が構えたまま木村に返事しようとした瞬間、目の前に無数のどんぐりのような木の実が、まるでライフルの弾丸のように飛んできた。しゃがみ込みかわしたが、足元に木の根が伸びてきたかと思うと二人の足に絡み付き二人を持ち上げた。

保「しまった！」

木村「くそっ！いつの間に！」

逆さ吊りになってもかく二人に一つの影が近付いてきた。

老女「あなた達、いくつか聞きたい事があるの。死にたくなかったら、素直に答えてね」

近付いてきた影は、一人の老女だった。身体中にモンスターの返り血らしき黒いシミが付き、両腕にはプラントモンスターの樹皮を加工したような鋭利な爪が装着され、裸足で音もたてずに移動していた。

老女「さてと、まずは、あなた達、一体ここで何してるの？ 二つ目、坂下浩二という男の人をご存知？ 最後に、もし坂下浩二を知ってるのならば、どこにいるの？ どうやってそこに行くの？

さあ、答えてもらおうかしら。……黙っていると身の為になりませんよ。この子達、私の主人で人間の味を覚えたようで、私が止めなかったら、すぐにあなた達を食べてしまいかねないから。さあ、どうかしら？」

木村「答えてやるからこれ離せや！ って言うか、何であんた浩二知ってんねん！」

老女「やつぱり浩二の事知ってるのね。じゃあ、答えて下さいな」  
保「おい！ ババア！ とりあえず、これ離せや！ おいつて！

……くそっ！ それは聞く耳持たずかよ！」

木村「あんた、何か勘違いしてるで。まあええ話したる。俺らはここが何してるとか知らへん。俺らの目的は、浩二の救出や。何で浩二の事知ってるって、そりや同僚やからな。知らん方がおかしいやろ。浩二の居場所は、俺らも探してるとこや。でもな、あっち俺らの乗ってたEVから右の方にある通路、あっここからこの戦闘員の奴らがようさん来よった。という事は、あっちにこの中の移動手段があるって事ちゃうかと睨んどる。どや、これで納得したか。早よ降ろしてくれ。……後付け加えや、俺らは人間やないで。」

木村が一通り話しをした後で、スルスルと足に絡み付いた根が外れ『ドサツ』と二人は床に落とされた。

老女「同僚？ 救出に來た？ 人間と違う？ ……………もしかして、……木……村……さん？」

そついうと老女は、木村のもとに近付いてきた。

老女「やつぱり！ 木村さんやないの！ 何してんの、こんなとこで、……ごめんなさい。この人やと思っただから」

木村が改めて老女の顔を見ると、木村は驚きの表情を隠せなかった。

木村「浩二のお母さん！ 何してはるんです？」

坂下母「私ね、ずっと前に浩二に会いにこの病院に来たの。そして、ここの先生みたいな人にこの子達がいる所に閉じ込められたの」

と言うと、坂下の母親は近くにいたモンスターの頭を撫でた。

坂下母「初めは、この子達に怯えながらなんとか生きていたんだけど、主人がモンスターに食べられちゃってもう駄目だと思った時、サスケが助けてくれたの。あっ！サスケってこの猿の事よ。それから私も戦うようになって、いろんな子仲間にして、で、いた所からこの子達と協力して出てきた。という訳。今では、この子達、私の言う事をちゃんと聞いてくれるようになったから、この子達と浩二を探しに行くところなのよ。……ところで木村さん。人間ちゃうてどついう事？」

木村「俺……いや、僕も浩二と同じように意識が無くなったんですわ。で、僕の場合、周りに誰もおらんかったから、病院に運ばれる事もなく、気が付いたら何か耳がよう聞こえるようになってたんですね。あまり気にせんと生活してたんですけど、怪我した時があつて、その時、血の色が青黒くて初めて自分が人間や無くなってる事に気が付いたんですわ。それから、僕のようにいろんな特殊能力を持った人達を集めて、浩二の救出に乗り出したという訳です。一応、病院の外、転院の情報等調べたんですが、浩二の事何も出てくれへんかったから、小数精鋭で内部潜入に入っただです」

坂下の母親は、木村の話を真剣に聞いていたが、突然口を挟んだ。坂下母「で、浩二はどうなったん？知ってるの？」

木村「どうなってるかは、知りません。ただ生きてるのは確かです。僕らを浩二の所へ連れて行くつて、僕らを先導してたオッサンが言うてたから間違いないです。確か名前が園川いうオッサン。僕らの事サンプルやのモルモットやの言うつたけど、そのうち暴れるつもりやったから一緒ですわ。あのオッサンは、もう逃げてもうておらんけど、僕らを下の方へ連れて行くみたいやったから、下に行ったら浩二はおると思います。……あと、乗ってたEVは、お

ばさん達の襲撃で壊れてしもたみたいやけど、ここの戦闘員の奴らが、さっきの放送の後、あっちの方の通路からゾロゾロ来たので、あっちに移動手段があると睨んで、今仲間達と向かってる最中でした」

しばらく黙って二人の会話を聞いていた保だったが、木村に近寄ると「そろそろ行かへんか？」と耳打ちした。

木村「おばさん。僕らもう行きますので、よかったら一緒に行きませんか？」

と言うと木村は保と並んで歩き始めた。坂下の母親は、モンスター達に小声で何かを言った後、木村達の後を追って行った。

## 手合わせ

霧斗「どうだ？ 足の具合は？」

正志「はい。もう大丈夫だと思いますよ」

霧斗達は、病院を指して車を走らせていたが、ろくに会社も動いていない現在の状況で、病院がまともな機能をしているとは考えられないと、近くの薬局で処置器具を入手し、山里家まで戻って来たのだった。

神名「ちよつと！ 正志君！ この人の前で大丈夫とか、言っちゃダメ！ そんなこと言うと、『じゃあ、君の力を早速見せてもらおうかな？』とか言い出すに決まってるんだから！」

中田「で、神名の言う事は置いて、実際のところどうよ？」

神名「何よ！ 置いてってのは！」

霧斗「まあ落ち着けよ。神名の言う事も分からない訳じゃない。でも、俺達……いや、俺は激君や正志君と正式に手をまだ組んでいないつもりなんだ。……もし、正志君がもう動いても本当に大丈夫なのだったら、神名！ お前も含め、4人で手合わせしたいと思ってるんだが……」

神名「えっ！ 私も？」

中田「俺、もう仲間のつもりでいたのに違うんですか？」

霧斗「バトルの方法はいたって簡単。4人で、戦うのだけど、それぞれが敵。要は、全員が1対3みたいになるって方法で」

霧斗のバトルの説明が終わると、正志は「やりましょう！ 俺はもう本当に大丈夫だから」と言うと、ベッドから飛び起き、自分の装備の点検・装着を始めた。

神名「正志君！ もうどうなっても知らないからね。私もやるからには本気で行くから」

中田「じゃあ、行きますか？」

と中田が部屋を出ようとした時、正志が「ねえ、何か棒ない？」

と聞いてきた。

神名「棒ねえ。何よ唐突に。物干し竿でもいい？」

神名が、少し怒ったような口調で言い返したが、正志は「いいですよ」と笑顔で返答し、4人は、近くの空き地に移動して行った。神名が、物干し竿をとって来た後で。

霧斗「さあ！ 始めるか！」

霧斗が全員に聞こえるように声を張り上げ言うと、正志がまた口を挟んだ。

正志「ちょっと、ルール変更！ 霧斗さんのさっきのルールじゃ、俺の強さは絶対分かんねーから、俺対みんなね！ …… OK？ 返事は聞かない。じゃあ行くよ！ レディイイ！ Go！」

霧斗・神名「ちよつ、待つ！」

何か言おうとした二人だったが、掛け声と共に正志が動き出した為、すぐに戦闘に集中した。

掛け声と共に正志は、長刀を右手で抜くと、抜刀と同時に激に左からの一閃を浴びせ掛けた。激は、咄嗟にチェーンを縦に持ち攻撃をガードすると、後ろに大きくジャンプし、チェーンを大きくクロスに振り下ろした。正志は、初撃の後すぐさま激の方にダッシュし、左に横飛びすると激の後ろから走り寄る神名に火炎放射を浴びせ掛けた。火炎はそのまま周りに放たれ、激の後ろへも放たれた。神名は、咄嗟に火炎の来ない所へ移動したが、激はチェーンを振り下ろした瞬間、背面から火炎を浴びせ掛けられ避ける間もなく背中が燃え上がった。激は、すぐに背中を地面に付け消火を行うと、一度戦闘区域より離脱した。神名は、火炎を回避しながら正志に向かって行った。正志は火炎放射後、今度は背中にあつた物干し竿を抜き出し、両手で構え、神名の方へ走り寄ると上から下への打撃を繰り出し、そのまま自分の後方へ、物干し竿を突き立てた。神名は、物干し竿を右手で払い退けると、そのまま正志の方へダッシュし、拳と蹴りを交えた連打を仕掛けた。正志は、近距離の神名が迫って来た途端、両手で物干し竿を掴んだまま、体を回転させた。正志の後方

へ突き出された物干し

竿は、正志の後ろから迫っていた霧斗が、サツつと横へ避けていた。霧斗も、物干し竿の一撃を回避と同時に、正志の方へ走り込み、得意のナイフの斬撃を正志へと繰り出したが、物干し竿の中央付近を持ち、体を回転させる正志に、神名も霧斗も近付く事が出来なかった。ヒュツつと空を斬る音が聞こえた瞬間、正志は物干し竿を頭の上に差し出していた。チェーンが物干し竿に巻き付いた途端、正志は長刀とサバイバルナイフを抜刀し後方へ下がるとスピードスタイルへ変化した。激は、チェーンを手元へと戻すとチツつと舌打ちした後、物干し竿を投げ捨てると、正志の方へダッシュした。神名・霧斗の二人もこの隙を逃すまいと、正志の方へ走って行った。攻撃範囲に入った激は、右手でチェーンを左上から右下へ流れるようにたたき付け、左手で左の腰からチェーンを取り出すと、そのまま上へ突き上げるように流撃を繰り出した。激の右手のチェーンが空を斬っている間に、霧斗・神名は正志の左右へ展開し、霧斗はナイフでの無数の斬撃を、神名は拳での連撃を仕掛けた。正志は3方向からの攻撃に、チェーンはまず無視し、右手の長刀で霧斗の連撃を、左手のサバイバルナイフで神名の連撃を回避しつつ、後方に下がると見せ掛けて、前方にダッシュをすると、前から迫るチェーンを刀で右へ反らし、激の胸元へ一蹴すると、激の喉元にサバイバルナイフを寸止めし、左右の二人に威嚇しつつ「一人撃破！」と叫ぶと、そのまま前方へダッシュし、振り返りスピードスタイルに戻った。

激「嘘お！ 俺、もう終わりかよ！ マジで！ くそっ！」

激は空を見上げたまま叫んだ。その声を合図のように、神名と霧斗の二人は正志の方へと走り寄ろうとしたが、突然目の前に炎の壁が出現しその足を止めた。

正志は、振り向き様にペットボトルを水鉄砲から離し自分の目の前にぶちまけた。スピードスタイルに戻すと、火を着けたライターをオイルの中に放り込むと、音もたてずにその場から立ち去った。

神名「もう！どこ行つたのよ！」

神名は、正志を探して林の中を歩いていった。やみくもに歩き回っても見付からないのは分かっていたが、じつとしていて襲われるより、ずっとマシだった。神名が歩いていると大きな木が目の前に現れた。プラントモンスターの可能性もあると思い、慎重に近付くとその幹に、渾身の一撃を放った。しかし木は、ただの木で上からハラハラと落ち葉が舞い降りて来たただだった。「ふうっ！」と気を少し抜いて、また歩き始めたその瞬間木の上から大きなモノが落ちてきた。殺気を感じた神名は、咄嗟にファイティングポーズをとったが、ドサツつと神名の後ろで音がした瞬間、神名は左脇腹に激痛を覚えた。神名は咄嗟に「正志君！」と叫んで後方に裏拳を繰り返したが、そこに正志はおらず、今度は右足に痛みが走った。神名は再度裏拳を繰り出そうとしたが、咄嗟に危険を感じ前方に大きくジャンプすると、一回転し振り向き様に下段の回転蹴りを行った。神名がファイティングポーズをとり立ち上がった際、目の前では刀の柄と物干し竿を腹部に突き立てられた霧斗の姿が飛び込んできた。

正志「霧斗さん。甘いッスよ。後ろから殺気をちらつかせてたら警戒しない訳ねーッスよ。」

霧斗「正志君。君は人の気配を感じる事が出来るのか。」

正志「まあ、経験が違うんでね。」

そう言う正志は、一度両手を前に出したと思うと、再度後ろの霧斗に刀の柄と物干し竿を突き立て、その反動で前転すると、神名の前で二ツつと笑ってザツと音と共に横飛びし姿を消した。

神名「霧斗！」

神名は、名前を呼びながら駆け寄った。

霧斗「神名、大丈夫か？あの子……正志君だが、思っていた以上だ。私としたことが見誤っていた。神名、彼に一人で立ち会うのは危険だ。彼は、気配や殺気といった目に見えないものを感じる事が出来る。また、初めての場所でもその土地の活用法やバトルスタイルも瞬時に判断して対応する事が出来るようだ。味方に就ければ、

一騎当千だが敵に廻すと、恐ろしい存在だ。このバトルを申し込んだのは私達なのだから、せめて一撃だけでも入れないと申し訳ないじゃないか。……じゃあ行くよ」

と二人は、林の中へ駆けて行った。

霧斗「正志君。正々堂々と勝負しないか？」

霧斗は一人歩きながら何度もそう叫んでいた。しばらく歩くと、突然横の茂みがガサガサと音をたてた為、霧斗はナイフを取り出し構えに入った。

神名「キヤア！」

後ろを隠れるように尾行していた神名が、突然悲鳴を挙げた。

霧斗「どうした！ 何かあったか！？」

霧斗が駆け付けると、神名の前にアニマルモンスターが数匹血を流して倒れていた。

神名「来ちゃダメ！」

神名が叫んだ瞬間、霧斗の肩に何かが乗った。

正志「動かないで下さいよ。動いたら斬れますから。」

霧斗が右肩をそつと見ると、肩に刀が置かれており、首筋に刃がたてられていた。

正志「そのまましゃべりましょう。霧斗さん、挟み撃ちは正々堂々とは言いませんよ。霧斗さんなかなか卑怯ですね。……じゃあ、正々堂々とタイマンで勝負しますか？ それとも、2対1でやりますか？」

と言うと正志は、刀をスーッと後ろに下げて、ニツツと笑った。霧斗「そうだね。君の言う通りだ。挟み撃ち、しかも騙し討ちつてのは正々堂々じゃないね。……そうだな、僕はまだ君とまともに一騎打ちつてのをやってないからなあ……。神名！ ちょっと見学してくるかい？ 僕もこの子の力を見てみたくなった」

神名「ちよつと、霧斗。本当に一人でやる気？ ヤバくない？ 本当に大丈夫？」

神名は心配そうに霧斗を見つめたが、霧斗は楽しそうにファイティングポーズをとった。

霧斗「じゃあ始めようか？」

正志「お！ やる気だねえ。じゃあ、やるっきゃねーな！ 行くぜ！」

と二人はお互いに飛び出して行った。

先制攻撃を仕掛けたのは霧斗だった。霧斗は素手で近付くと、正志の傍に来た途端、両手で両腰にぶら下げてあったナイフを抜き、両手を上に上げるように斬り掛かるとその手を左右交互に、切り下ろし切り上げを続け様に繰り返しながら前進した。正志は、一度飛び出したが、迫ってくる霧斗を見て、長刀を抜くと両手で構え、受けの体勢に入った。霧斗のナイフの斬撃を刀で受け流しながら、正志は少しずつバックステップを繰り返した。

神名「霧斗すごい。あの刃の雨の中ならどうする事も出来ないかも。もしかして霧斗勝てるんじゃないの」

霧斗は、一撃もヒットしていない事に不安を覚えたが、連撃の手を緩める事無く、前進して行った。と、突然目の前から正志の姿が消えた。と同時にドサツと音が聞こえた。『しめた正志君後ろに倒れたのか。今だ！』と霧斗が、追い撃ちを掛けようとした。『！！』霧斗は身の危険を感じ思い留まった。その瞬間、霧斗の目の前を何かが下から上に勢いよく通り過ぎた。

正志「霧斗さん。正解！ でも、残念！ 一撃じゃ、終わらねーよ！」

既に立ち上がっていた正志が、嫌味垂らしく笑ってそう言つと、目の前を通り過ぎた物『物干し竿』が上から落ちてくると霧斗の顔の前でピタッと止まると、突然顔に向かって突き出した。正志はわざと倒れる時に置いた物干し竿を足で器用に操ると、何度も霧斗の顔面に突きを出した。物干し竿を左手に持つと正志は、そのまま右から左へ物干し竿を振ると、右手で刀を抜き右上へ切り上げた。霧斗は、形勢逆転とばかりに攻撃に入つた正志の突きを左右のフツ

トワークでかわしながら、後退していった。突きが止まり、横一閃の打撃をバックステップでかわした霧斗は、次の刀の斬撃が上がるのを見届けると、正志に向かって切り込んだ。ナイフを逆手で持ち、縦横斜めの斬撃を連続で放った。と、突然正志の姿が消えたと思った瞬間、霧斗は宙に浮いていた。ドサツと背中から地面に落ちた途端、上から正志に乗られ、首筋にサバイバルナイフを添わされた。

正志「霧斗さん。連撃のスピードは確かに速えーけど、足元が無防備になってますよ。二人目撃破！」

そう言っていると正志はスツツと立ち上がり、ニツツと笑うと霧斗の手をとった。

霧斗「ありがとう。……そうか、足元か。確かに僕の武器はリーチが短い、それをカバーするようにスピードを上げていたんだけど、……そうか、君みたいにスピードにも対応し尚且つ、防御の隙に反撃の方法を考える事が出来る僕の攻撃方法には問題点があるようだね。ありがとう、君のおかげでいい勉強になったよ。……後は神名だけか、……神名も近距離タイプだけど強いよ。でも、君の方が上手かな？ 君はオールレンジ、万能タイプみたいだし。まあ頑張れよ。激君と二人で見学してるよ」

霧斗は正志にニコツツと笑って見せると握手をして立ち去ろうとした。

正志「霧斗さん。ちょっと生意気ですが、霧斗さん用の戦術指南しますよ」

霧斗「ん？ 何かな？」

正志「霧斗さんは、自分の事を近距離レンジ型のスピードタイプだと思ってると思うけどそれはハズレ。本当は、中距離プラス近距離レンジのスピードタイプが当たり。何でかってーと、ナイフ投げれるっしょ。で、今まで通りの近距離攻撃も出来る。……ここから本題なんだけど、霧斗さんはスピーディーな連撃を出そうとするせいで、相手をしっかり見てねーっしょ。だから、突然避けられて反撃くらったり、テンパったりするんですよ。まず、相手をしっかり

り見る事。で、レンジやタイプなんて気にしねーの。霧斗さんの場合は、上下の状況にもしつかり目を配る事。この二つで、今よりも格段にパワーアップ出来ますよ」

霧斗「ありがとう。参考に考えるよ。正志君、君は本当にすごい少年なんだね」

霧斗が立ち去った後、激が大慌てで走って来た。

中田「おい！ 俺は。俺の戦術指南してくれよ！」

正志はふと呆れた顔をしたが、すぐに激の顔を見ると…。

正志「中田さん。あなたは、周りの状況をもっと見ねーと。中距離タイプなんだから、近すぎても遠すぎても攻撃にならない時間も長い。中田さん、あなたがこれからもその武器を使い続けるんだったら、もっと自分の武器の特徴を知るべきだね。まあ、俺が言えんのは、ロングウィップとロングウィップの組み合わせは最低だって事かな。せめてロングウィップとショートウィップ。これにナイフとか近距離に対応した武器を持った方がいいんじゃないの。あなたには、戦術指南はまだ早えーよ」

激は、話を聞く内に次第に元気が無くなり、正志の話が終わる頃には、半泣き状態であった。

中田「ん。ありがとう」

激は肩を落として、悲しそうに去って行った。

正志「じゃ！ 神名さんやる？ それとも場所変える？ ……ま

あ実戦だったら場所を変えるなんて出来ねーけどな！」

正志は神名の方に振り返ると神名に話し掛けた。

神名「ここでいいわよ。じゃあ行くわよ！」

そう言うのと神名は、いきなり凄いスピードで正志に向かって来た。正志は、サバイバルナイフを抜き防御に入ろうとしたが、神名の攻撃が一步早く武器を装備しないままの戦闘突入になった。神名は、先程の戦術指南を聞いていた為か、殴り連打の合間に上下の蹴りが入り、横に逃げようとすると、回し蹴りを放ってくる。後方への移

動のみを余儀なくされた正志は、一撃一撃を見極めつつ、反撃のタイミングを計っていた。神名が連打から蹴りに入り、その足が戻る瞬間、少し、攻撃が止まる。これを予測した正志は、蹴撃後にタイミングを併せ、サバイバルナイフの抜刀を行った。しかし、ナイフを抜いても連打の豪雨は止むこと無く続き、正志は避ける必要は無くなったものの、ナイフで攻撃を受け流す他に方法が無かった。と、突然猛打が止まり、神名が後退した。神名は正志から離れると息を大きく吸い込み、拳を脇腹付近に持つていく際『はっ！』と気合いを入れ直した。正志は、打撃の豪雨が止んだことにより安堵の表情を見せたが、神名と同じく大きくスタミナを消耗していた。しかし、これをチャンスとばかりに長刀を抜刀すると、『はああああ！』と気合いを入れつ

つ、神名の方へ向かって刀で地面に線を引くようにして、切り込んで行った。神名の手前迄来ると、刀を上手へ切り上げた。その途端、落ち葉がバサツツと舞い上がった。神名は舞い上がった落ち葉により、正志を見失ったが、『ふうっ』と息を吐き出すと、脇腹に拳を構えた状態のまま微動だにしなくなった。正志は、舞い上げた落ち葉と共に真つ向勝負では分が悪いと、一度戦闘範囲を離脱し戦況の確認を行おうと試みた。正志が神名を確認すると、神名は拳を脇に携えたまま動かないでいた。すぐさま正志は、神名の後方に移動し、物干し竿で足元に打撃を繰り出した。神名は、殺気が自分の後方へ移動しているのを感じていたが、動かず足元への攻撃が来た時、合図をされたかのように物干し竿を足で踏み付け、そのまま後方へ後ろ回り飛び蹴りを放つと、着地と同時に蹴りの猛襲を浴びせ掛けた。正志は、物干し竿の打撃が止められた瞬間、物干し竿から手を離し後ろに飛び退くと両刀を抜刀し構えに入った。蹴りの猛襲を両刀で受け流しつつ前進し、神名を後退しながらの攻撃へ移行させた。神名は連蹴りでは下がり難かった為、連打にチェンジしようと踏み止まった。その時

、右から斬撃がありかわそうとした瞬間、左からの刀を避けること

叶わず、左肩に寸止めされた。

正志「はあ、はあ、……最後、……撃破、………終了おお！  
はあ、はあ」

神名「はあ、はあ、はあ、………正志君………、………本、当、に………強いわね……。はあ、はあ、でも、どうして……。？」

正志「ば、場数じゃ……ないッスか？ はあ、いつも、頼と、狩りばつかしてたから………」

神名「そう。………はあ、はあ、じゃ、頼君も、強いんだ。………君達は………、すごいね」

正志「でも、………神名さんも、強かった………スよ。はあ、はあ、ふう〜」

神名「そう。ありがとう。………霧斗！ これで文句ないでしょ！  
どうなのよ！」

神名が大声で叫ぶと霧斗が激と共に歩いて来た。

霧斗「正志君、これからもよろしくお願いしたいのだけどいいかな？」

そう言つて霧斗は正志に右手を差し出した。

正志「ええいいですよ。こちらこそ、よろしくです」と、その手を握り返した。

正志「ただ、まだまだの人がいるよーですが」

正志は激をチラッと見て言った。

霧斗「まあ、そう言わずに………ね。ははは………」

中田「ははは……。はあ………」

激は更に落ち込んだ表情になっていた。

## 覚醒

頼「なあ、そいつ何なんだ？」

伴子「聖史。私の子よ」

頼「でもよ。何かバケモノみてーになっただぜ」

伴子「この子は特別な……。その性で不幸なところもあるけどね」

聖史・伴子・頼は、ある廃屋に身を潜めていた。

頼「でもよ……。何でコイツだけ違えんだよ。他の奴、あんたやモンスターと全然違いゃねーか」

伴子「教えて欲しいの？ まあ、何も無しで納得してって方が難しいか。そうだね、聖史が気に入ったあんだだからね、教えるよ。まあ、ゆっくり聞いてね」

と、くつろいだ表情になった。聖史は、伴子の傍でニコニコしていた。

伴子「あれは、6年前。あの頃はまだ主人も会社員で、あの特別変異達もいなかった。私は新婚すぐに妊娠して、もうすぐ出産だった。でも、聖史を出産してから状況が一変した。産まれた時、この子は普通の赤子だった。でも、それから2ヶ月後事件は起きた。ベビーベッドで寝ていた筈の聖史がいなくなってしまったの。私達は懸命に探したわ。そしたら、主人が見付けたの、聖史を、近くの公園で怪物のような姿になって、野良の犬や猫を弄んでいたのを。主人は驚いたのと同時に、聖史を殺そうとしたの。私は、咄嗟に止めに入ると聖史を家に連れて帰った。でも、主人の行為は止まらなかった。私の隙を見ては聖史を殺そうとしたわ。それから3年経ってから、私に我慢の限界が訪れた。その日も主人は、おもちゃで遊んでいた聖史を後ろから包丁で刺し殺そうとした。私は、もう何も考えられなくて、気が付いたら目の前に、頭が潰れてぐちゃぐちゃになった主人が倒れていたわ。私の手には血まみれのハンマーが握り

しめられていた。そんな主人を聖史は、しばらくぼーっと眺めていたのだけど、その後主人に近付くと、そのぐちゃぐちゃになった頭の中を食べ始めたの。頭

が終わると首から中身を取り出して。その頃からかな、巷で特別変異の話が出始めたのは。聖史はいつもと変わらなかったけど、周りがだんだん変わり始めた。あなたも知ってるでしょう？ テレビやラジオなんかで、新型のインフルエンザが動植物に感染しているっていうの。あの時、実は私も感染していたの。初めは気が付かなかったわ。意識が無くなったのも覚えてないし……。けど、私の横で泣いてる聖史に気が付いて、意識が戻ったの。それからよ、遠くの方のモノも良く見えるし、耳も良くなった。身体が軽くて、動き易くなって、何よりも変わっていたのが、爪が硬くなってて自分の意思で伸縮が可能になってた。初めはびっくりしたわ。病院にも行こうかと思った。でも、もし入院にでもなったら聖史は……。って思ったら行けなかった。それからしばらくしてからよ、これが何なのか気が付いたのは。あの時も聖史の相手をしていた時だった。聖史の周りに、小蠅がたくさんたかっていたの。私がその小蠅を振り払おうとした時よ、小蠅達が突然ブアって飛び去ったの。その小蠅達周りにあつた植物や動物の中に入って行ったのよ。私、その時分かつたの。これは病気じゃないって、これは聖史が自分を護る為に身体から何かを出しているんだって」

頼「はあ？ 何じゃそれ？」

伴子「黙って聞いて。……でね、聖史の出したモノには適性があるみたいなの。だから適合するモノは覚醒するし、適合しないモノは覚醒しないみたいなの。……で、あなたの質問にあつたこの子と私の事だけど、……この子はね、唯一の生まれ持った特別変異。誰から感染・覚醒したのではなく、産まれて間もなくして、自力で変異した特別変異の王なのよ。私は、この子を護ろうとするから、巷の特別変異と少し違う変異みたい」

のんびりと話をしていた伴子だったが、突然顔を赤らめモジモジと話し出した。

伴子「……………でね、これは余談……………なんだけど、最近分かった事で、……………私……………ね、普通のひと……………しても、……………ね、……………できないみたい……………なの。だから、……………分かる……………でしょ。あなたが……………したい時、……………私……………いいわよ」

頼「何だよそれ」

伴子「だから、……………H……………を、よ。ね。……………あなたも興味無い訳無いでしょ？」

伴子は恥ずかしそうに話すと頼の顔を覗き込んだ。

頼「あ？ ああ。分かった。その時は、よろしく頼む。てゆうか、聖史、モンスターの総元締なんだよな。じゃあこんな所でこんな事してる場合じゃねーだろ！ 違えーのかよ！」

頼は、いきなり立ち上がると、伴子・聖史に向かって叫んだ。

伴子「こんな事って？ 何すれば、いいって？」

頼「だから！ 王様がこんな所で逃げ回ってていいのかよ！ モンスター共集めて、護ってもらって、世界征服とかしねーのかよ！ その方がRPGばいじゃねーか！ ……俺、思ってたんだ。……………周りにモンスターが現れて、正志と狩りやって、なんかRPGみてーだなんて。……………しかも、そのうえ、魔王がいるんだぜ。これは世界征服しかねーじゃねーか！ 違えかよ！」

伴子「えっ。そんな事言われても、……………ねえ」

と伴子が聖史の顔を覗き込んだ時だった。

聖史「我がしもべ達よ時は来た！ 我が下に集い我を守護せよ！ 我は『キラヘル』の長なり！ 我はこれより大坂の社に身を移す。大坂の社に集いて我を待て！ この命は絶対である！ 背く事ならん！ 背くモノには、瞬時なる死を！」

すうっと聖史が浮かび上がったかと思うと、伴子の頭の中に響く声が聞こえた。その声の主が横にいるにも関わらず、耳からは一切の声は聞こえなかった。

頼「えっ、何？ 何なんだよ！」

伴子「分からない。でも、聖史が何か始めるみたい。大坂の社に  
って言ってたから、……大阪城の事かしら」

聖史「お母さん。今から行くよ。僕のチカラを見せてあげる。頼  
兄ちゃんも一緒にね」

そう言つと3人は立ち上がり、廃屋を後にした。

## 餌

矢馬鍋「穴淵君。ほら急いで」

穴淵「先生、ちょっと待って下さい。……私、お腹大きいんですよ」

矢馬鍋「分かっとう。でも後少しだから、急いでくれ。……あつ、だからと言ってその子を無しにするのは止めてくれよ。大事な研究資財なんだからね」

矢馬鍋達は、けたたましい警報とアナウンスの中、狭い通路を進んでいた。

穴淵「あつ先生っ！ この子が！ この子が栄養を欲しがっています」

矢馬鍋「こんな時にか！？ もう少し待ってくれないか。ここでは無理だ。あと少し、……あと少しだけ待ってくれ」

穴淵「ああ！ 先生っ！ お腹が！ お腹が食べられちゃう！」

矢馬鍋「あと少しだ！ あの扉の向こうに行けば、食べさせてやるから！」

穴淵「先生早く！ 早くして！ 早く！ ああ！ もう！ は、早くう！」

矢馬鍋達は、大急ぎで、非常口と書かれた扉に駆け込んだ。

矢馬鍋「君！ 駐車場！ 駐車場に入れてくれ！ くれぐれも、病院の外に出ないようにな！」

と言うと、ズボンと下着を脱ぎ捨てた。

矢馬鍋「待ってるよ。あと少し、あと少しだからな。……くそっ、勃起ない！ 勃起してくれ！」

穴淵「ああ！ 先生！ 早く！ 早くして！」

穴淵は、腹を抱えのたうち回っている。

矢馬鍋「穴淵君！ 勃起ないんだ！ 勃起ないんだよ！」

矢馬鍋は、穴淵の裸体を眺めながら、懸命に自分の股間を触って

いるが、焦りと恐怖で勃起しなくなっていた。

穴渕「先生！ 先生！ 貸して！ 私がやる！ 早くしないと！ 私死んじゃう！」

穴渕は、そう言々と矢馬鍋に覆いかぶさって行った。

## 変化

木村「浩二！ どこだ！ 浩二！ どこにいる！ 返事しろよ！」  
木村達はE.V.に乗り、研究所の最下層まで来ていた。研究所内は薄暗く見通しは悪かったが、先程まで人がいたという気配はまだ残っていた。

浩二母「浩二君！ お母さんよ！ どこにいるの！ 返事して！  
お願い！」

薄暗い部屋の中は、木村がいても物音一つ無かった。木村達は、分散して区画内を探索すべきではないか、または何かがあるか分からないと単独行動は控えるべきかと、意見が割れていた。

木村「こうしていても、埒が開かねえ。お前ら、なるべく単独で移動せず、3人以上で行動しろ。あと、お前らは浩二の顔しらねえやろ。だから、何かおあったらすぐ連絡しろや。連絡方法は任せる」と、木村が言い終わった時だった。

犬飼「ん？ みんな動いたらあかん！ なんかおる！ 木村の耳には何も聞こえてへんみたいやけど、臭うでこの部屋ん中におる。複数やない。一匹……いや一人や。……なあ！ あんた浩二さんか！ それやったら、俺らあんたを助けに来たんやで！ 姿見せてくれへんか？ あんたが誰かは分からんけど、あんたの臭いはごっつうしょんねや。どや、出てきてくれへんか？」

と犬飼が呼び掛けながら数歩歩いた時だった。物陰から突然黒い影が飛び出てきたと思うと、犬飼を背中から押し倒した。

木村「浩二！」

浩二母「浩二君！」

飛び出てきたモノの姿を見た途端二人は同時に叫んでいた。

浩二「はああああ！ ……よく来たな、『キラヘル』のしもべ共。我の名は『ホリスタ』、『キラヘル』とは対を成すモノよ。坂下浩二という人格は、既に我が取り込んだ。一度しか言わぬ、貴様

達も、ここで消されなくては、早急に立ち去るがよい。間もなく『キラヘル』の目覚めが始まる。」

浩二はそう告げると、犬飼の上からスツッと退いた。

羽瀬「おい！ 何言ってんねん！ 浩二はなあんたを助けなところまで来たんやで！ 何アホな事言ってんねん！」

と羽瀬が浩二の肩を持つとした時だった。

浩二「一度しか言わぬと申した筈だ。貴様達の触れてよい身体ではないわ！ さつさと『キラヘル』の下に帰すがよい！ すまぬが、貴様はもう手遅れだな」

羽瀬の身体は左右が真つ二つに割れて転がった。

木村「羽瀬！ …… 浩二！ テメエ何て事しやがる！」

友利「待つて、木村！ あの羽瀬がこの有様よ。コイツの言う事聞いた方がいいわ」

木村「けどよ！」

木村達は仲間割れを始めていたが、それもすぐに治まらざるを選なかった。

浩二「うるさい愚者共よ。ここで朽ちるか？ 貴様達は、この者を救うべく来たのであろう？ だからこそ『キラヘル』のしもべにもかかわらず、見逃してやろうと言うのに、朽ちてモノ言えぬモノに成りたいと言うのであれば、今すぐその望み叶えてやるぞ」

浩二の地の底から聞こえるような声が聞こえた途端、木村達は、ふと我に還り最下層を後にしようとした。

頭に響く声『我がしもべ達よ時は来た！ 我が下に集い我を守護せよ！ 我は『キラヘル』の長なり！ 我はこれより大坂の社に身を移す。大坂の社に集いて我を待て！ この命は絶対である！ 背く事ならん！ 背くモノには、瞬時なる死を！』

声が聞こえた途端、木村達は背筋が凍るような感覚を覚えた。

木村「今度は何だ！」

友利「大坂の社に来いって」

木村「大坂の社ってどこやねん！」

轟「大阪城の事やないか？」

浩二「ほう。『キラヘル』が目覚めたようやの。早よ行った方がええぞ。奴は、自分のしもべであれば、どこにおろうが消すことが可能やからの。我は、ここのある人間に用があるのでここで失敬する。今度会う時までには、強うなっておれよ。今度会う時は、必ず敵じゃからな」

と言うと浩二は音も無く消え去った。

## ホリスタ

矢馬鍋「穴淵君。どうだ、落ち着いたか？」

矢馬鍋は、穴淵に押さえ付けられたまま話し掛けた。

穴淵「はあ！ はあ！ 先生……。間に……。合った……。みたい。お腹の痛みが退いていく……」

穴淵は、矢馬鍋の上から退くとそのまま、矢馬鍋の足元に座り込んだ。

声「なんじゃ、かような所におったか。探したぞ」

突然声が聞こえた為、矢馬鍋達は悲壮な表情のまま、手を握りあった。その時、穴淵の後ろのドアが開き、坂下が入って来た。

矢馬鍋「うわあああ！ おつ、おま、お前は、何だ！ どうやってここに来た」

矢馬鍋は半狂乱に成りながら叫んだ。が、坂下はそれを聞こえなかったかのように穴淵の横まで行くと、穴淵に上着を被せ穴淵の横に座り込んだ。

浩二「それにしても、お前も不幸な女子じゃな。このような臆病者のいいなりになり、我が子を身籠るとは。しかし、お前が我が子の母になるのであれば、お前は我が妃に他ならん。お前の事は我が守ってやるから安心せい。……時に男よ。貴様、我の何を調べておったのじゃ？ 今も我が子に餌をやってくれたようじゃから、貴様も我が守ってやる。じゃから白状せい。」

矢馬鍋は、怯えた表情をしていたが、ゆっくりと話し始めた。

矢馬鍋「初めは本当に、新種のウイルスの研究だった。ウイルス自体のメカニズムの解明とその抗体となるワクチンの開発。これが私達の役割だった。しかし、調べていくうちにある事に気が付いた。それは、ウイルスの侵入による状態変化ではなく何物かの寄生による生態改造である事だ。この生態改造が、どこかの国又は、我が国

における生態兵器の可能性もあるとして、これの無力化ならびに、  
これの構築構造の把握、強いてはこれに関する一切の関連事項の調査が、我々の職務として言い渡された。私の職務は、寄生生物の解明と、生態機能の調査及び研究だった。始めは、捕獲を行い易かったプラントモンスターから入り、モンスター捕獲に伴い戦闘員の育成を行った。戦闘員が軌道に乗ると同時にアニマルモンスターの捕獲に移行し、両モンスターの生態調査・細胞研究・同モンスター化していない植物や動物との比較等を中心に行った。研究を始めて最初に分かった事は、モンスター化すると体液の色が青色に近くなるという事だった。植物は黄緑色から鮮明な青色へ、動物は赤色から黒っぽい青色、暗い紫色へ。また、固有差があり牙が発達するモノ、爪が発達するモノ、

幹の硬化が発達するモノ、枝や根を自在に伸縮出来るモノと変化形態が一定化しないのも特徴的だった。そうした中で私はある疑問に辿り着いた。この生態機能の全く異なる、元同種族間において子孫を残す事は可能なのかと。もし、これにおいて子孫繁栄が可能になつてしまうと、いくら駆除を行おうと駆逐に限界が生じてしまう。

そう考えた私は、いろいろな植物、動物において、配合研究を実施した。そんな時に君が運ばれて来たのだ。私は、それは嬉しかったよ。今までもし人間に寄生した時に打つ手なしという状況も覚悟していたからね。しかし、君が運ばれて来た。私は今まで、動植物に行った実験を君にも同じように行った。解剖実験を除いてだが。そこで、新たな発見があった。他のモンスターの時は、配合研究を行ったと言っただろう？ これは、どの種族も性意欲、交配の欲が全く無かったからなのだが、君は違った。君には異性を求める欲、交配欲・性欲があったのだ。私は、この研究にモニタリングしてくれる人材を募集したのだが、見付からなくてねえ。たまたま、私の側近にいた、この穴淵君が研究に大変興味があるようだったので協力してもらったのだ。そ

して彼女は懐妊した。これくらいで、いいだろうか？」

矢馬鍋は、一度に多くを話した為か少し落ち着きを取り戻していた。

穴淵「私協力するなんて言ってますん！ 先生が無理矢理！」  
と言ったところで浩二が口を挟んだ。

浩二「うむ。よいとしようか。しかし無駄足じゃったな。貴様の研究とやらも、『キラヘル』のしもべで終わっておけばよかったものを。我をモルモットにしたせいで、内容が混乱に陥ってしまったようじゃの」

矢馬鍋「ちよつと待ってくれ。先程の『キラヘル』とはなんだ？  
そして君の話し方からすると、君はその『キラヘル』のしもべでは無いような言い回しだが……」

浩二「さよう。我は『キラヘル』ではない。我は『ホリスタ』、『キラヘル』とは対を成す存在よ。貴様、先程配合研究だとか言っておったな。その答えをくれてやろう。あの植物や動物において交配意欲が無く、また子を宿す事も無かったと言っておったがそれは当然じゃ。『キラヘル』とは、唯一無二の存在を示し、その守護者としてもべを作り出す。その過程はいとも簡単な事で、『キラヘル』の体外組織、云わば皮膚のカケラが生命体に憑依すると、その適性により『キラヘル』のしもべへと変化する。この時、オリジナルであった肉体構造や精神構造は破壊され、強靱な肉体・狂暴な精神へと作り直されるのじゃ。その為、肉体と精神の再構築期間として、意識不明状態になるという事じゃ。ここまでで分かったとは思うが、『キラヘル』によりしもべへと変えられた時点で、もう子孫を残す事も叶わぬ肉体になつてもうておるのじゃ。……貴様、その疑問を隠せぬ顔するのは止めい。何故かという事じゃろ？  
それは、確かに生物である以上、子孫を残す遺伝子伝達機能は残つておる。しかし、その遺伝子伝達機能自体も『キラヘル』の寄生に伴い、強靱・狂暴に変化してしまっているのじゃ。平たく云うと、精子は卵子を食い散らし、卵子は精子を鉄壁にて拒むと云う事じゃ。分かったかの。あと

は我の事じゃったな。我も唯一無二の存在ではあるが、自我の細胞をもつて他を侵食するという機能は持ち合わせておらん。その為、遺伝子伝達機能が機能しなくなると云う事も無いという訳じゃ。…これはオリジナルの『キラヘル』も同じだかな。分かったか？…女子、オヌシ穴涑と云うのか。名は何と申す？我が妃の名を知らなんではいかんであろう？」

当然話し掛けられた穴涑は、ビクツツと体を震わせたが、すぐに浩二の方に向き「真由子<sup>まゆこ</sup>。穴涑真由子」と言った。

浩二「真由子か。良い名じゃ。これからはよろしく頼むぞ。真由子よ」

と浩二は、穴涑の肩を抱いたが穴涑はそれを払いのけ、浩二をキツツと睨むと…。

穴涑「ちよつと！聞きたい事があるんだけど！ねえ、この子ちよつとおかしいんじゃない？なんでお腹の中にいるのに、精子欲しがるのよ。っていうか、母体を痛め付けて精子を欲しがるってどういう子よ。普通受精の時だけでしょ精子が必要なのって！ねえ、答えなさいよ！」

怒りの表情で話し掛ける真由子を優しく見つめながら、浩二は口を開いた。

浩二「それは、申し訳ない。我は『キラヘル』と違い、子を宿す能力は維持しているものの、その精神的狂暴性は変わらぬ。我は自我を落ち着けているが、子にはそれが出来ぬ故、まだ赤子にも満たないうちより、肉食で狂暴的なのだ。ただ、真由子が思うておるように、母体を傷付けて暴れるという事はない。ただ、暴れておる事により痛みを生じておるだけで、そなたの体が傷むという事はないので安心せい。そしてその餌となるモノじゃが、我のモノではいかぬのじゃ。我のモノでは、普通の人間に比べそのモノ自体が強靱過ぎる故、子が補食出来ぬ。人間のモノは、ただの遺伝子伝達機能の塊でしかない故、餌として最適なのじゃ。と云う事で、貴様！まだ暫くの間、我が子の補食係としてよろしく頼むぞ」

そう言つと、再度穴淵の肩に手を掛け、穴淵を自分の方へ引き寄せた。

浩二「ところで、貴様らこれからどうするつもりじゃ。『キラヘル』が目覚めた以上、何処に居ても奴らに狙われる事は必至。しかも、貴様らは戦力を全く持たぬという状態にある。いくら我とて貴様ら二人を守りつつ戦うというのは、些か不安でもある。……そこでな、提案なのじゃが貴様ら戦力を強化せぬか？　ここから西に行くと『キラヘル』のしもべでも無いにも関わらず、強い戦闘力を持った者達が4体程集結しておる。今後、『キラヘル』共が攻め入った際に身を守る術を持つておくべきではないかの。また、今は『キラヘル』もこの界限にしか進出しておらん様じゃが、この界限を平定さすれば、近隣の國にも軍を進めるじやろうな。その前に食い止める必要があるのではないか？　どうじゃ、悪い話では無いと思うが」

矢馬鍋「西？　また、とてつもなくアバウトな事を言うな。西と言つても広いぞ。西のどの辺りなんだ？」

穴淵「先生。私、何となく分かる気がする。兵庫県、三田の方よ」  
浩二「ほう。真由子、お前、我が子を宿したことでさような事まで分かるようになったか。それでは参ろうかの。……貴様、ほれ！　そこにおるドライバーとやらに行き先を告げぬか」

浩二に睨まれた矢馬鍋は、渋々後部車両を降りると助手席に移動し、ドライバーに行き先を告げた。

救急車はサイレンを流さずに、今正志達の下に向かっていた。

## 集結

聖史「うわぁ！　たくさん来てるね」

はしゃぐ聖史を尻目に頼は、不安の思いと困惑の表情を隠せないでいた。

大阪城の周りには、プラントモンスター・アニマルモンスター・ヒュムモンスター達が、争う訳でも無く、種族毎に集結し徒党を組んでいる。その間を、堂々と聖史と伴子は進んで行く。頼は置いて行かれないようにしながらコソコソと後について行った。

頼「なあ、本当に大丈夫か？」

伴子「何が？」

頼「コイツら全員モンスターだろ？　俺が人間だって分かったらやばくねーか？」

頼が、心配そうに伴子と話していると、「大丈夫だよ。この人達、僕が『キラヘル』だと分かった時点でまず怒ると思うから。後、その時頼兄ちゃんの紹介もするから」と聖史がニコニコしながら言った。

しばらく歩くと、聖史達は天守閣の前に到着した。途端、聖史はモンスターのの方に振り返り突然、宙に浮かび上がった。

聖史『よくぞ集まった我が種を受け取りし我がしもべ達よ。我は『キラヘル』貴様らの創造主にして、唯一絶対無二の存在。貴様らに与えし、その力を持ちて我を守護せよ。また、この界限の愚民共を駆除し、我等の理想王国を築こうぞ。この界限を平定後、近隣の國々への進軍も行う。我への忠誠とくと見せるがよい』

頼には聞こえない声で聖史が話し掛けた途端、プラント・アニマルモンスターは深々と頭を下げたが、ヒュムモンスター達は不満の声を爆発させていた。

「おい！　ガキ！　テメエ何ほざいてやがんだ！　殺すぞ！」

「何でガキの子守しなくちゃなんねえんだ！　俺は帰らせてもら

うぞ」

「バカバカしい！ アホかデメエ！」

ヒュムモンスター達は口々に悪態をつき、その場から離れ始めた。聖史「我が力を与えなければ只の愚民だった存在が、よく言ってくれた。貴様ら我より褒美を執らせる。死という褒美をな！」

そう言うとき聖史は、その場からフツツと姿を消したかと思うと、両手に4つずつの頭を持ち元の場所に現れた。

轟「速え！」

友利「速い！ 私にも見えなかった」

木村達は、場を離れるヒュムモンスター達を眺めていたが、一瞬の出来事に目を奪われた。そして、聖史達の方に歩み寄って行った。木村「おい、ガキ。お前が『キラヘル』ってヤツなんだよな。俺達に守護しろって、俺達よりも弱かったら洒落にならんぞ。どうなんだ？」

犬飼「ちよつと待て、木村。このガキが『キラヘル』つても納得いかへんが、それよりその小僧。お前、人間やないか？ お前、人間と同じ臭いがする」

保「は？ 犬飼、お前鼻いかれちまったのか？ こんな所に人間がいるわけないやろ」

犬飼「いや、間違はなく人間や。どういふことや！ 説明してもらおうか。事と次第に選んだら、承知せえへんで！」

犬飼は、木村を押し退けて聖史の方に威圧的に歩み寄った。

聖史「うん。頼兄ちゃんは、人間だよ。でも、頼兄ちゃんはおじさん達よりも強いから、僕の側近なんだよ。もし、納得いかないんだったら、頼兄ちゃんと戦って勝ってみてよ」

聖史は、怯む事なくむしろ挑発的に犬飼・木村達に話し掛けた。

頼「おい！ 聖史。ヤベーって。挑発してどーすんだよ。…って、え？ どーしたの？ やだな、おじさん達。……マジ？」

聖史にコソツツと話していた頼に木村達がにじり寄って来た為、頼は少し尻込み気味になった。

聖史「お母さん。頼兄ちゃんにあれ渡して」

伴子「ねえ、本当にあれで戦わせるの？ まあ、いいけどね。じゃあ頼君、はい、これ。聖史からのプレゼントだって」

伴子はそう言うと、大きな包丁の様な鉄の塊を取り出した。

頼「何それ？ これやばくねー？ ありがとな、聖史。……じゃあ、オッサン達やるか！ 一人ずつか？それとも全員で来るか？」

頼は腹をくくったのか、普段の感覚に戻り、伴子より受け取った鬼包丁を肩に背負い込んだ。

保「テメエみたいなガキ一人に全員でやったら、その生意気なガキにそれこそ舐められるわ。俺が相手してやる。かかってこいや！」

周りの意見も聞かず、保は一步前にしゃしゃり出た。それを合図のように、頼は戦闘モードへと突入した。

頼「じゃあ、オッサン。遠慮しねーぞ。スタートだ！」

鬼包丁を肩に担いだまま、頼は大声で保に声を掛けると、保の方へ走り出した。保は、頼が目の前まで来ると、いきなり正拳突きを繰り返したが、目の前に頼はおらず、後ろから保の肩に鬼包丁を乗せられた。

頼「オッサン、遅えーよ。今のがマジバトルなら、オッサン死亡ね。はい。オッサン終了！」

頼は保の肩から鬼包丁を下ろすと、聖史の所に戻って行った。

保「あの小僧、あんなデカイモノ持って……。消えやがった。くそお！ 今度は、手加減無しだ！ もう一度やらせる！」

喚く保を遮るように、木村達が前に出てきた。

木村「なるほどな。言うだけの事はあるんやな。じゃあ、俺達全員相手にも出来んのやろな？ さっきそう言うてたし」

頼「おっしや！ じゃ、全員で来い！ その方が早く終わっていいんじゃないか？ あっ、さっきのオッサンも入っていいぞ。手加減無しでな！ じゃあ、やるぞ！ 構えろよ！ ……GO！」

と言うや否や、頼は飛び出して行った。

友利「轟、あの子速いわよ。あなたが一番追い付き易いんじゃない？」

友利が、轟に指示を与えた瞬間、ガッツと音がしたと思うと、轟が足の間に鬼包丁を挟まれ転倒し顔の前にその刀を突き付けられていた。

頼「はい。一人終わり。」

と言った瞬間、頼の右側より蓮見が大口を開けて飛び掛かって来たが、頼はその刹那鬼包丁を盾のように使い、それを回避すると、そのまま鬼包丁を両手で振り回すと蓮見の喉元に鬼包丁の刀を突き付けた。

頼「余裕。二人目終了！」

それを見ていた木村・犬飼・友利は、それぞれの特殊能力を生かし、三身一体で攻撃を仕掛けた。木村が、爪で攻撃を仕掛けると、頼の動きを見ていた友利が木村・犬飼に即座に指示。その他の二人が、攻撃した際も残りの二人が同様に指示を出して、頼の動きを封じ込めたつもりになって行った。

頼「この3人弱えーな。じゃ、いつぺんにやつちまうぜ！」

とボソツツと呟くと、攻撃を仕掛けてきた犬飼を鬼包丁で受け止めると、犬飼を攻撃すると見せ掛けて、友利の胸へ一閃の斬撃を放った。そのまま、犬飼をもう一度追尾すると、木村の首筋に鬼包丁の刃を一度当て、犬飼の顔の前に刀を突き立てた。

頼「オッサンら弱え！ 3人まとめて終了！ ……後は、弱えオッサンだけ」

と言うと頼は保に向かって走って行った。

保は先程の二の舞はうつまいと、頼の動きをよく見定め、目の前に来た際、正拳を出す振りをすると、裏拳を繰り出した。……が、頼は後方への移動を行っておらず、保は背中に鬼包丁を突き立てられていた。

頼「終了！ 弱え！」

吐き捨てるように呟くと、頼は聖史の所に戻った。

聖史「ね！ おじさん達じゃ、頼兄ちゃんには勝てなかったですよ。これで分かった？ なんで頼兄ちゃんが僕の側近なのか。……あと、頼兄ちゃんに勝てないんだったら、僕には到底勝てっこないよ」

聖史は、木村達を見下すように、そう告げると残りのヒュムモンスターの方に向き直った。

聖史「おじさん達も文句があるなら相手するよ。但し、これ以降は寸止め無しで殺すから。どう？ まだ、帰っちゃう？」

その言葉の後、ヒュムモンスター達は、ゾロゾロと引き返して来ると聖史の前にひざまづいた。

キラヘル「近々、私の宿敵『ホリスタ』の攻撃があると思われる。貴様らは、我を守護し『ホリスタ』を打ち倒してみせよ。その後、近隣國への進軍を開始する！ 貴様らの活躍期待しておるぞ」

その音無き声を聞き、各モンスター達は、深々と聖史に頭を下げた。

聖史「頼兄ちゃん。これからは、ここに住むからね。あと、みんなには、言っていないけど順位決めてるから、教えとくね。……えー

と、僕が『キラヘル』だから大将、お母さんと頼兄ちゃんは、僕の側近。ヒュムモンスターの中でさっきのおじさん達が隊長クラス。その後上からヒュム・アニマル・プラントっていう順番ね。どう？

よく出来てるでしょ」

嬉しそくに聖史は頼に話し掛けながら笑っていた。

聖史「あゝあ、早く正志兄ちゃん来ないかな」

と聖史はボソッと呟いた。

頼「正志か。今の俺なら、お前に勝てんのか？ 今何してんだよ、正志！ ……ん？ 今の聖史の言い方、もしかして正志がその『ホリスタ』ってヤツか？ ……どっちでもいいーや。打倒『ホリスタ』か、いいいよRPGって感じだな。おっしゃ！ やったるぞ！ ……って、何か俺悪者ハマってねーか？」

頼は心の中で呟いた。



## 来訪者

中田「なんじゃテメエら！ 突然やって来て、何が『我が傘下に入らぬか？』だ！ …… 大体よお、お前は何かも持ってねえし、そっちのオッサンは、何だ？ 何か出来んのか？ まあ、そっちの女は論外か。一体何の冗談だ？」

浩二達は、山里家を訪れていた。

浩二「貴様らの戦闘能力は非常に他の人間と比べて高い。我はその能力を評価する。我『ホリスタ』の為に『キラヘル』と戦え。どうじゃ、我が傘下に入る気になったか？」

中田「アホかテメエ！ いきなりやって来て、上から目線でモノ言われて、じゃあ傘下に入りますって誰が言うんだよ！」

浩二「ほう。貴様、我に逆らうつもりか？ 我に逆らうても、何もよい事など無いぞ。貴様では話しにならん。もつと物分かりのよい者を出せ。貴様が、この中で一番能力の低い者でもある事は分かっている」

中田「何を！ テメエ！ さつきから好き放題言ってくれんじゃねえか！ …… って霧斗さん何ですか？ コイツら俺だけで、追っ払いますから……」

玄関口で大声で喚き散らしていた激に怒りを覚えたのか、激の肩を持ち後ろに追いやると霧斗が出てきた。

霧斗「で、あなた方はどちら様でしょうか？」

浩二「もう一度、初めから説明しなければなるまいか？」

『ホリスタ』は、うんざりした顔で霧斗に話し掛けた。

霧斗「そうですね。私も、激君の声は聞こえていましたが、あなたの声は聞き取れ無かったもので。すみませんが、もう一度お話し頂いてもよろしいでしょうか？」

浩二「うむ。仕方ないのう。我の名は、……」

正志「その人は『ホリスタ』ってヤツ」

浩二が名乗ると同時に、いつの間にか横に来ていた正志が、突然言った。

霧斗「正志君いつからそこに？ …… というか何故君は、彼の事を知っているんだい？」

霧斗は突然現れた正志にびつくりしながら、尋ねた。

正志「何でって、さっきそのオッサンが自分で言ってたじゃないか。『我『ホリスタ』の為に『キラヘル』と戦え』ってな。なあ、オッサン。そう言ってたよな」

突然話を振られた浩二は、少し困ったような表情を見せた。

浩二「あ、ああ、そう申した。はて、貴様に云った覚えは無いのだが……」

霧斗「正志君。君、僕達と一緒にいたよねえ」

正志「ああ、いたけど俺には聞こえんだよ。そっちの頼りないオッサンは、名前は知らんけど、先生って呼ばれてる。女の方は穴淵それぞれ、互いに呼び合ってたから間違いない。だよな、オッサン」  
こちらでも突然話し掛けられた矢馬鍋は、困惑の表情を見せたが、大きく頷いた。

正志「ところでよ、オッサン。『キラヘル』って何だ？ 『ホリスタ』ってのもよく分かんねーんだけど、説明してくれっか？ …… 後よ、『キラヘル』ってヤツ、バケモノみてーな姿になったりしねーか？ そんなヤツだったら一人知ってただけだな」

正志の話を聞いていた浩二は、だんだん表情が険悪になり、今にも正志に飛び掛からん状態になっていった。

浩二「貴様、『キラヘル』を知っておるのか！ ヤツは今何処にある！ いかな姿をしておるのじゃ！ …… いや、申し訳ない。少し取り乱してしもうた。『キラヘル』の事であつたな。『キラヘル』とは、我『ホリスタ』と対を成す存在。我等は、人に在らざるモノ。実在する姿を持たず、人や獣の衣をまとい存在を有とする。我等は、幾度となく争いを続けてきた。『キラヘル』は自らの細胞を憑依させ、自身のしもべを作り出すが、我はしもべというモノを持た

ぬ。故に我が同朋・仲間となる強力な戦士が必要となるのだ。これで分かってもらえたであろうか？」

皆が呆然とするなか、正志は興味津々とばかりに身を乗り出し、眼をキラキラさせて聞いていた。

浩二「して、ここまで説明したのじゃ、貴様ら我が傘下に入らぬか？」

『ホリスタ』は苛立ちを隠せないのか、怒り口調で正志に言い寄った。

正志「まつ、いいんじゃないの。但し、オッサンの傘下には入らねー。オッサンを仲間にしてやるだけだ。ただ、『ホリスタ』って聞かされても、戦力になるかどうかってのは不明だからな、霧斗さん得意の見極めを行ってからじゃねーとやだね。どうだい？ オッサン達よ！」

浩二「我を愚弄する気が小僧お！ 人間風情が我を試すだと！ 誰が試されるのか、その身を持って知るがよい！」

正志「って事はOKって事だな。弱いヤツ程よく吠える、つからな。まあ、あんまり期待しないでやるよ。じゃあ、やるーか。前の広場でいいよな。じゃつ、いつくぜー！」

浩二「！！！！！！！」

憤怒した『ホリスタ』を挑発するかのように、正志は挑戦的な態度を崩さず自分の言いたい事だけ言つと、『ホリスタ』を後に駆け出して行つた。その後を追うように、『ホリスタ』も後に続いた。

霧斗「正志君……。大丈夫……か？ なあ、あんたあの『ホリスタ』という奴は手加減出来るのか？」

矢馬鍋「いや、私も戦闘中の彼を見た事は無いのだが……、難しい……かもな……」

霧斗「そうでしょうね。はあ。正志君。大丈夫かな」

そう言いながら、山里夫婦・中田・矢馬鍋達は、正志達の後を追って行つた。



腕試し、そして…

浩二「では、早速始めようではないか！ 小僧！ 力試しだからといって無傷で済むなどと思うなよ！ 我を愚弄せし罪、その身体に刻み込んでくれるわ！！！」

広場に到着した二人が向き合った途端、『ホリスタ』は正志に怒りを投げ掛けると、いきなり襲い掛かってきた。

正志「あれ？ 『ホリスタ』って、そのままなの？ まっ、いいか」

発声と共に『ホリスタ』は、その鋭い爪で正志の正面から斬り付けた。が、正志は刀の柄を上にし、縦に持った状態でその攻撃を防ぎ、左でサバイバルナイフを握ると浩二の喉元目掛けて斬り付けた。『ホリスタ』は、紙一重でナイフの斬撃をかわすと、正志の正面から音も無く消えたと思うと、『ガキッ』と音と共に正志の背後に現れていた。正志の背中に向けて、爪の斬撃を放っていたが、これも刀による防御にて、正志に傷一つ負わせることは出来なかった。

正志「なあ、オッサン。マジでやるーぜ！ 俺、楽しくねーよ！」  
攻撃を連続でガードされただけでなく、挑発的な言葉の前に『ホリスタ』は理性を失い始めていた。

浩二「私の足元にも及ばぬゴミの分際で、我をここまで愚弄するとは、もう生かして帰さん！ 偶然防ぐ事が出来たようだが、もう偶然は訪れんぞ！ 私の真の姿を見て死ね！ 貴様のような小僧、我が傘下には必要ないわ！ 消えろ！！！」

言葉を発した『ホリスタ』は、「はああああ！！」と力を入れ始めたと思うと、その姿はみるみると変貌していった。短髪だった髪が足元まで伸び、爪は指から鋭利なナイフが生えているかのようになり、肘と膝から槍状の骨が突き出し、皮膚が硬化しまるで金属で作られた皮膚のように皺一つ無くなった。」

正志「おー。やりやー出来んじゃん。つつっしやあっ！！やるぜ

「！」

『ホリスタ』の姿を見た正志は、今まで以上に生き生きした表情になり、フル装備に変更すると、まずスピードスタイルになり相手の出方を待っていた。

霧斗「な、何だ…あれは…」

矢馬鍋「あれが……、『ホリスタ』……か……」

中田「バ、バケモノじゃねえか」

神名「正志君……」

穴淵「あ、あ、あ、………」

バトル見学中の一同は、『ホリスタ』の姿に驚愕し、恐怖すら覚えていた。

変化を終えた途端『ホリスタ』は、フツツと姿を消した。……と思うと、正志がキンツ、キンツと何かに攻撃されているかのように、刀とナイフを振り回しながら防御姿勢に入っていた。正志は、前後左右からランダムで繰り出される斬撃と突きの攻撃を刀とナイフで凌いでいたかと思うと、突然その場から姿を消したかと思うと、地面から上向き、その後自分の周りへと火炎放射を行った。『ホリスタ』は、火炎などもろともせずに火炎の中を移動し、正志に攻撃を仕掛けたが、炎の切れ目に目を付けた正志は、釘バットにて渾身の一撃を放った。ガツと音と共に、矢馬鍋の足元に突然、『ホリスタ』が倒れ込んで来たかと思うと、ガバツと起き上がるとそのまま、残像を残しその場から消え去った。正志は、バットでの攻撃に手応えを感じたが、攻撃直後無手の状態で目を閉じ、両手をだらんと下に下げた状態で静止した。『ホリスタ』は、攻撃が一撃も当たらない事に苛立ちを感じていたが、正志の一撃が左顔面にヒットし吹き飛ばされた為、妬けに成り始めていた。矢馬鍋の足元に飛ばされた後、すぐさま起き上がると、正志目掛けて斬りかかったが、無手で閉眼している筈の

正志に一撃をも入れることが出来ず、攻撃の全てを紙一重でかわされ、その度に腹や胸・顔に一撃ずつ拳での打撃を受けていた。そし

て、『ホリスタ』が一時離れた瞬間、正志は『ホリスタ』とは関係の無い方向にダッシュしたかと思うと、「神名さん！ 激！ これ借りるぜ！ とナツクルとチェーンを奪い去って行った。

中田「な、なんでお前！ ……俺は、呼び捨てなんだあ！」

正志は、バトルポジションに戻ると、両手にナツクルを装備し、両腕にチェーンを巻き付け、ファイティングポーズをとった。

浩二「くそお！ くそお！ 何でだ！ 何故、何故人間ごときに我が翻弄される！ くそお！」

『ホリスタ』は、素早い動きでの斬撃の間に肘や膝での突きを織り交ぜ攻撃を仕掛けた。正志は、降り注ぐ斬撃の豪雨を両腕のチェーンでガードしながら、突き攻撃を避けた瞬間、ボディの同じ場所に一撃ずつ打撃を与えていた。ギツ、ギン、ガツと金属の擦れるように音が時折聞こえていたが、正志がニヤツと笑った刹那、グゴボツと何かが凹むような音がした途端、『ホリスタ』は後ろに飛びのいた。『ホリスタ』が、バックステップすると正志は、左腕のチェーンをスルツと抜き取ると、取り出しと同時に左上から下に向けてチェーンを振り下ろした。『ホリスタ』は、後ろに下がると自分の身体を確認した。腹の部分に亀裂が入り、中から黒っぽい体液が流出していた。ヒュツという音が聞こえ、身の危険を感じた『ホリスタ』は、正志に向かって攻め込んだ。正志は、振り下ろしたチェーンが着弾する前に手前へ引き寄せ、攻め入る『ホリスタ』を確認するとチェーンに入れた力を抜き、その場に座り込んだ。『ホリスタ』は、地に片膝をついている正志を見て違和感を感じたが、正面突破はことごとくガードされ、左右からの流撃もガードされていた為、正志の少し手前で飛

び上がった。しかし、それを待っていたかのように「ビンゴ！ かったぜ！」と正志は地面に這わせていたチェーンを振り上げると、右腕のチェーンも左手で抜き取り下から来るチェーンと挟み込むように、真上から叩き落とした。『ホリスタ』は、宙に身体があった為この攻撃を回避する事が出来ず、片腕と片足にチェーンが巻き付

いた状態で落下した。手足にチェーンが巻き付いた『ホリスタ』は、何とか取り外そうともがいたが、外れぬまま落下しこのままでは危険だと起き上がるうとしたが、時既に遅く正志にマウントポジションを取られると、顔面に正拳突きを寸止めされていた。

正志「大勝利〜！」

正志は、マウントポジションのまま両手を上に掲げて、大声で叫んだ。

浩二「に、人間ごときに。我が苦汁を飲まされるとは。認めん。認めんぞ！ 貴様、どんな卑劣な手を使うた！ ……くそお！ バケモノか貴様は！」

正志「バケモノはテメエだろ！」

『ホリスタ』の上に乗っ掛かり勝利の雄叫びを挙げる正志を見ながら、一同は驚愕の思いを隠しきれずにいた。

神名「……………」

霧斗「正志君、君は……………」

中田「嘘だろ……………おい！……………」

矢馬鍋「バケモノだ。あのバケモノを倒すなんて。本当に人間なのか、あの少年は……………」

『ホリスタ』は正志から逃れると、立ち上がり元の浩二の姿に戻っていった。

浩二「貴様……………いや、正志殿その力我にお貸し頂けないか。我は、思い上がっておったようじゃ。我より強き正志殿の力を借りる事が出来れば百人力じゃ。お主は、一騎当千の能力をお持ちのようじゃ。この通りじゃ」

と、『ホリスタ』は片膝を付き、頭を深々と下げた。

正志「だから、いいって。初めから仲間になるって言うてたろ。傘下には入らねーって言っただけじゃん。後さ、あんたにしても、あのガキにしても、スピードに任せた近距離攻撃に頼り過ぎだよ。大技の後の隙がでけーよ。直さねーと、相手によっちゃあ死ぬぜ」

浩二「敗北した上に指南まで頂けるとは、有り難く思う。これよ

り我の事は、この身体の持ち主でもある浩二、坂下浩二と呼んでくれ。して、正志殿。お主どこで『キラヘル』と一戦交えたのじゃ？  
また、あやつは今何処におるのじゃ」

正志「あのガキが、オッサンの言う『キラヘル』なんだったら、霧斗さん達と出会う前に一度バトツたんだよ。頼が勝てねー相手だったけど、いいとこまでいったんだぜ。でも、姿が変わった途端スピードが格段に上がりやがって、負けちゃった。その時、頼を連れてかれちゃったんだ。今は何処にいるのか知んねー。でも、必ず見付けてやる。見付けて、頼を取り戻して、あのバケモノを倒してやる！」

話ながら、正志の目はだんだんと怒りに満ちていった。

浩二「そうか、知らぬか。では仕方ないな」

と浩二が肩を落とした時、神名が口を開いた。

神名「ねえ、これ『キラヘル』と関係あるかどうか分からないんだけど、最近ね大阪城にモンスターが集まっているっていう内容の書き込みがあったの。参考になるかしら」

浩二「そう云えばあやつら、『キラヘル』の覚醒の時、大坂の社がどうとか言っておったな。女よ、手柄であつた。『キラヘル』は、大坂の社におるとみて間違いなさそうじゃ。貴様ら、覚悟があると云うならば、我に協力願えぬか？ 今より大坂の社に攻め入る。但し、敵の総戦力が集結しておるとみて間違いないじゃろう。それでも良いのであるば協力願う」

霧斗「それで、元の生活に戻れるのであれば、協力は惜しまない……先程の正志君とのバトルを見て感じたが、私では君達程の戦闘力は無いがそれでも良いのなら……」

神名「その『キラヘル』っていうのやつつけたら、いいのよね。私も、そんなに戦力にはならないかもしれないけど、黙って見ているだけなんて出来ないから……。それでもいい？」

中田「お前は嫌いだ！ 俺をナメてる正志も嫌いだ！ でも、お前達だけに見せ場がある訳じゃねえ！ ……ザコは任せろ……！」

俺の力貸してやる！」

周りの反応を見ていた浩二が口を開こうとした時、正志が浩二の前に割って出た。

正志「霧斗さん、神名さんありがとな。ガンバローぜ！……あと、激！……死ぬなよ」

中田「だから！ 何で俺は呼び捨てなんだよ！ しかも、死ぬなっで縁起でもねえ！」

正志「弱えーからだよ。嫌なら、強くなってみろよ」

中田「……………」

浩二「それでは皆の衆参ろうか」

浩二は正志達を先導するかの如く車に向かって歩き出した。

矢馬鍋「私達は……、どうすれば……………」

矢馬鍋と穴淵は、まごつきながら浩二に助言を求めたが、「貴様らは、我と共に来るのじゃ！ 特に真由子は我が子を宿しておるのじゃぞ！ 貴様、それを離して、何をしようと考えておる！」と浩二に睨まれ、「い、いえ何も……………」と口ごもると、正志達の後に続いた。

変わらぬ日常・変わらぬ生活、この非常識な現実から脱出するための戦いが今始まるうとしていた。

## 決戦

獣「ぐうるるるゝ!!」

獣「ガアアゲエア！」

男「どうしたお前達、何かあったんか？」

男「静かにしろや。集中して見張りも出来へんやろが！」

修道館前広場、ここでヒュムモンスターとアニマルモンスターが数体ずつ見張りをしていた。突然唸り声をあげ始めたアニマルモンスターに不安の表情を見せながら、ヒュムモンスター達は、辺りを見渡した。

男「何やねん。何もおらんやないか」

女「あんたら紛らわしい声出しなや。びっくりするやろ」

ヒュムモンスター達が、アニマルモンスターをなだめ肩の力を抜いた時だった。強い風が吹き抜けたと感じた瞬間、ブシュツという音と共にヒュムモンスター達の首が無くなり、周りにいたアニマルモンスターにヒュムモンスターの首の付け根から噴き出した体液が降り注いでいた。突然の出来事に戸惑いを見せたアニマルモンスターは、ヒュツという音と共に、チェーンの打撃を受け前身部と後身部分に分かれて倒れ込んだ。

中田「へっ！ 余裕だな」

正志「激！ ザコ相手しかも不意打ちで、意気かんじゃねーよ！」

中田「んだとコラア！ しかも、また呼び捨てで言いやがったな

！ 一応年上だぞ俺わあ！」

浩二「まあ、良いではないか。所詮そやつは、その程度の者という事よ」

ヒュムモンスターの頭を数個髪をわしづかみにした状態で現れた

浩二は、一笑しまた歩き始めた。

中田「んだとコラア！……」

霧斗「まあまあ、ドウドウ」

激の背中を後ろから霧斗が叩いて、そのまま通り過ぎていった。

中田「霧斗さんまで……。って俺は馬か！」

喚き散らす激を余所に、一同はゆっくりとだが確実に天守閣へと足を進めて行った。

浩二「やはりここまで来ると、素直に通してくれんようじゃな」

歩きながら、浩二がボソツツと呟いた。

正志「だろーな。さっきから殺気の数が、どんどん増えてやがる」

霧斗「これは……。ちよつと危険じゃないか？」

神名「ええ。既にかこまれてるし……」

一同は顔色一つ変えず、落ち着いた表情で軽口をたたきながら、一步、また一步と足を進めた。

中田「何処？ 何処だ？ 敵は！ ……みんな、脅かすなよ。いねえじゃねえか」

激のみ辺りをキョロキョロと見渡していた。

神名「ねえ、これ以上は無理じゃない？」

浩二「そうじゃな、限界かの？」

正志「テメエら、出てきやがれ！ 隠れてコソコソしてねーでよ！」

一同が足を止め、正志が一声すると、辺りの茂みや木の上、堀の下、からゾロゾロと3種のモンスター達が集まってきた。

中田「……よ、……よし、……こ、……ここは、お、俺に、ま、ま、任せ、……ろ！ ザコは、……俺専門……だからな」

激は突然立ち止まると、他のメンバーに向かって叫んだ。

霧斗「激君、無理するんじゃない。震えてるじゃないか。何なら、僕も残ろうか？」

中田「俺だっけいつまでもナめられてられねえんだよ！ 言っただろ、ザコは任せろって！ お前らは、先に行きやがれ！ すぐ追いついてやるからよ！」

激は震える足に力を入れ、震えを見せないようにしながら、ありったけの大声で叫んだ。

正志「悪い、激！ 死ぬんじゃないぞ！」

と正志達は、一番近道となる道にはだかる敵を薙ぎ倒しながら先へと進んで行った。

中田「へっ！ マジで行きやがった。あの薄情者共が！ 呼び捨てだし。……うおおおお！ じゃあ、始めようじゃねえか！  
……うひゃ！ うへへへ！ ううひゃやひゃ！ 行くぜえ！」

激に向かって突き進んでくるモンスターの群れの中に、激は自ら身を投じて行った。

犬飼「来おったで。ひい、ふう、みい……。全部で6体やな。」

木村「ん？ 二人程は、非戦闘員か？ 物腰の音が軽いで。」

保「ほんなら、6対4で俺らの方が有利やな」

木村「けど、氣い抜くなや。あのガキの時の事忘れた訳やないやろ！」

その様子を嗅覚と聴覚で、木村達は判別し敵の到着に際し戦闘体制に移行していた。

保「でも、あのガキはバケモノやで」

轟「今から来る相手もそのバケモノや。言つてたやろ、対を成す存在やて」

木村「来るで！ お前ら、氣い引き締めろや！」

その木村達を肉眼で捕えられる位置まで正志達は来ていた。

正志「おっ！ 今度は人型ばかり6体か。これなら余裕じゃねーの」

霧斗「正志君、それは甘いと思う。あの数の後にこの数、どう考えても小数精鋭と考えるべきだろう。……どうかな？ ここは、僕に任せて貰えないかな？ 僕も最近強くなったような気がするんだ。君達にばかり負担も掛けられないしね。……どうかな？」

神名「霧斗！ じゃあ私も残るわ！」

霧斗「いや、君は正志君達と行くんだ。ここは、僕だけで凌いでみせる」

神名「霧斗？」

霧斗「分かったね？ 神名」

神名「うん。じゃあ、気をつけてね霧斗」

霧斗は神名をギュツつと抱きしめると、すぐに離し背中を押した。正志は神名を、浩二は矢馬鍋と穴淵を抱えると、相手の方へダツシュし見向きもせず木村達の間を通り過ぎた。

蓮見「お、なんや。……オッサン一人で相手してくれんのか？」

保「俺らもナめられたもんやな」

轟「ここで死んで一生後悔しろや！」

霧斗「徒党を組まないと、一人前に何も出来ないあなた達に負ける道理はありません。いつも正志君相手に練習していたのでね、君達に負ける気が全くしないよ。……こっちはいつでもいいよ。さあ、始めようか？」

伴子「あら久しぶりね、正志君。……やっぱり聖史に用事かしら。でも、私は通さないわよ。聖史に会いたければ、私を倒して行く事ね」

もうすぐ城下という所に来て、伴子が立ちはだかった。

神名「正志君、何か馴れ馴れしいけど、この人誰？」

正志「俺も一度しかあつた事ねー。あのガキの母親だ」

浩二「ほう。貴様が『キラヘル』の産みの親か」

伴子「その呼び名。あなたが聖史のいう『ホリスタ』ね。じゃあ、

尚更ここを通す訳にはいかないわね」

神名「でも……、残念ね。あなたの相手をするのは私。この二人には先に行ってもらわよ」

伴子「ふーん。でも私を振り切って行けるかしら。もし、それが出来れば、あなたの相手をしてあげるわ」

正志「じゃあ神名さん、ここはお願いします」

浩二「気を付けられよ。この女、少々手強そうじゃぞ」

伴子「えっ……。何……。？ 何でそんな所に」

正志「ごめんな、おばさん。じゃあ、神名さんに相手してもらってよ。じゃーな！」

会話の最中に伴子の後方へ移動していた正志と浩二は、神名を置いて先を急いだ。

正志「うおっと！ 危ねー！ …… おおっ！ 地面が割れてんじやねーか！ …… 誰だ！ ガキか？ 出てきやがれ！」

正志と浩二は、辺りを見渡しながら、警戒体制をとり次の攻撃に備えた。

浩二「……！！ …… はっ。貴様……、一体誰じゃ」

第二撃をかわした浩二は、攻撃を仕掛け相手を追尾し話し掛けた。

頼「よう！ 正志！ 久しぶりだな！ お前んとこのボス、俺が相手してやるぜ！ …… なんかさ、前に言ってたゲームならって話覚えてるか？ 今のこの状況RPGばくねーか？ 何かよ、俺悪者になっちまったみてーだけどな！ …… 正志！ この先で聖史が、お前の事待ってんぜ！ …… 俺もお前と戦ってみてーけど、このオッサンで我慢してやる。早く行け！」

浩二「正志殿の知り合いか？ だとしても、我は手など抜かぬぞ！ …… では、いざ尋常に勝負！」

頼「古りいんだよ、お前らのしゃべり方は！ …… オッサンこそ、俺の鬼包丁の餌食になりやがれ！」

正志「ガキ！ 来てやったぞ！ 出てきやがれ！」

聖史「ふーん、頼兄ちゃん、正志兄ちゃんとやらなかったんだ。

…… 久しぶりだね、正志兄ちゃん。じゃあ、早速だけど始める？」

正志「最初っから全力で来いよ！ 俺は前の俺よりも強えーぞ！」

聖史「そうみたいだね。…… でも、初めは小手調べからだよ。僕も、前の僕より強くなってるからね」

正志「へっ！ そーかよ！ じゃあ、おしゃべりは終わりだ！  
こっちから行かせてもらっぜ！」

今は誰も気が付いていなかった。いつの間にか、矢馬鍋と穴漕が  
姿を消していた事を…。

## V S

### 激VSモンスター

中田「うひゃひゃひゃひゃー！ 久しぶりだぜ！ こんなに大暴れするのはよお！ おら！ こいや！ どんどこいや！」

激は、モンスター達に取り囲まれた状態で、チェーンを振り回していた。以前に比べチェーン捌きもさまになり、前後左右の敵を一歩も動くこと無く撃破していた。但し、周りからの一斉攻撃には対処出来ず、近距離の噛み付きや斬撃・突きにダメージもくらっていた。

中田「くそお！ それにしても数が多いな！ キリがねえ！ 終わりが見えねえな！」

激はチェーンを振り回しながら、愚痴り始めていた。……その時だった、激の目の前のモンスターが突然のけ反ったと思うと、バタバタと倒れ込んだ。

女の声「おや？ 人がいたの？ ねえあんた、浩二知らないかい？ こんだけモンスターが集まってるんだから、浩二もここに来てると思うんやけど」

中田「浩二？ んな事より、バアさんこんな所にいたら危ねえよ！ 早くどっか行けよ！」

婆「そんな事言うて、ええの？ 苦戦してるんとちゃう？ ……ええい、うるさい！ 今はお前らの相手やない！ ……浩二の事教えてくれたら、助太刀しましょか？ どう、話す気になった？」

中田「何や、このババア。……浩二ゆうたな、同じヤツかどうかは知らんけど、あの『ホリスタ』とかゆうヤツの名前がそやったでもう、先に行ったけどな。これでどうや！」

激の話を聞き終えると老婆は、少し悔しそうな表情を見せたが、「それやったら、こやつら片付けて早く後を追うで」と言うのと、両

腕に付けた鋭利な爪を振り回しながら、辺りのモンスターを切り刻み始めた。

中田「なかなかやるやんけ、あのババア。おゝし、俺も負けてらんねえぞ！」

と、中距離攻撃を激、近距離攻撃を老婆のフォーメーションを即興で組んでいた。

### 霧斗 V s 木村達

友利「轟、そいつ、あんたの事見えてないみたいよ。ガンガン動いて、手数で攻めて」

犬飼「蓮見！ 左がら空きや。今なら喰えんぞ！」

木村「保！ 結構素早く動いてるから、蓮見や轟の攻撃後の移動地点を狙え！ …… もう少し右、今や！」

霧斗は、木村達の実力の見定めには防衛・回避を繰り返していた。

霧斗「はあ、はあ、はあ、痛っ！ 今度は、何処から来るのかな

…… おおっと、はあ、はあ、うっ、痛っ！ ちくしょう！ 一人見えない」

霧斗「こやつら、それぞれが部分的な特殊能力者なのは分かった

…… でも、向こうの三人は司令塔。こっちに三人いるはずなのに轟と呼ばれている奴の姿が確認出来ない。あとの二人も、厄介だな。

あの保って奴は、力まかせ。もう一人の蓮見って奴は、顎が強いのか？ とりあえず、あの轟って奴をどうにかしないと、なぶり殺されてしまうな」

霧斗は、蓮見・保の攻撃をかわしつつ、周りに注意を配っていた。しかし、肉眼で轟を捕らえることが出来ず、少しずつ、少しずつダメージを受けていた。

轟「ははっ！ オッサン、一人で調子こイタのは間違いやったな。ははは、ほら、ほら、俺に切り刻まれて死ねや！ ほら！ ほら！」

霧斗は、ドンドンスピードをアップさせ攻撃をしてくる轟に翻弄

され、轟の動きだけに集中しようとした時、左顔面に激痛が走り、右側に吹き飛ばされた。

保「おっしゃあ！ クリーンヒットや！ ごめんやでオッサン、顔潰れたんとちゃうか？ おーし、もう一発いこか！」

霧斗「なんて力だ。一撃で頭がクラクラする。…………駄目だ…………このままじゃ確実にやられる。この際仕方ない、正志君…………ちよつと真似させてもらうよ。…………まあ、彼なら相手を見た途端にこうしてるかもしれないな」

霧斗は、スツツと立ち上がると両手のナイフを逆手に持ち、腰を落とすと、目を閉じ動きを止めた。

轟「ほう。死ぬ気になったんか？ いい心構えや」

犬飼「ちよつと待て轟！ 待て行くな！ ……何だ、あいつから、焦りと恐怖の臭いが消えた。何を企んどる」

蓮見「目えつむつてたら、見えねえやろう！ 俺が一思いに喰つてやるわ！」

と蓮見が、口を開けて飛び掛かった時だった。閉眼していたはずの霧斗が、突然蓮見の方へ振り返ったと思うと、ナイフが蓮見の口に当たるように体を捻った。その刹那、蓮見の口から下腹部が二つに分かれ、臓物を撒き散らしながら落ちて行った。

友利「あれは、無駄な動きを省いたスピードスタイルね」

木村「ああ。しかも、心眼やな。気配のみで相手の動きを読んどうる。友利、轟止めで大丈夫か？」

友利「無理無理。もう調子に乗ってもて、私の言う事なんて聞きもしないわ」

犬飼「ああ、もう轟は無理だな。あとは保だけか。ちよつとの油断が命取りだな」

轟「そのまま目えつむつて死ねえ！ 何したって俺は見えねえやろ！」

霧斗の横を爪をたてて走り去ろうとした轟を霧斗は、身を屈めナイフを轟にあてがうようにし、轟の腹部を切り裂いた。スピードの

止まらない轟は、そのままもう一撃走り込んだが、完全に気配を読まれており、肉斬骨断の精神の霧斗に、同ヶ所を攻撃され、上半身と下半身に分断し下半身は走り去り。上半身は地に落ちた。

霧斗『早く来い！ 次はあの怪力だろ！ 早く来てくれ！ 力が抜ける』

保「嘘やろ。蓮見い！ 轟い！ おい、マジかよ！ 何やねん。いきなりどうなってんねん！」

半混乱状態の保を木村達は、止めに入った。

木村「相手のペースに乗るな！」

友利「保、今あんたが行ったって絶対勝たれへん。オッサンのあれ、心眼スピードスタイルや。様子見た方がいいわ」

犬飼「と、言うよりや、もうちょっと待ったらええ。あいつからは、血の臭いがプンプンする。放ついても死ねんとちゃうか？」

保「そんな事言うても、轟と蓮見、殺されたんやぞ！ ……お前ら、そこでじつとしいたらええやろ！ 俺は行くで！ 一矢報いたる！」

木村「ちよつ、待て！ 保！ 待てっ！」

三人の警告を余所に、保は霧斗に向かって走り出した。

保『気配を読まれてるって事は、何処から攻めても一緒や。こうなったら……』

霧斗は、突然全身に激痛を覚えた。気配を感じ無いのに、各所に痛みが走る。危険を感じた霧斗が目を開けると、少し離れた所から、保が投石を繰り返していた。

霧斗「くそ！ なるほどな。考えたな、でもその距離なら私の射程範囲内だ！」

と、霧斗は飛び出すと瞬時に保に接近し、斬撃の豪雨を浴びせ掛けた。保は、防ぐ事も出来ず、全身から大量に体液を吹き出しながらその場に倒れ込んでいった。霧斗は、そのまま駆け出すと木村達の所へ接近し、走りながら、ナイフを無造作に振り回し、駆け抜けた。

霧斗が駆け抜けたあと、木村達は保と同じように全身から大量の体液を流しながら、動かなくなっていた。

霧斗「私の勝ちだ。だから言っただろ、徒党を組まないと何も出来ない君達に負ける道理は無いって」

そう言つと全身を真つ赤に染めた霧斗は、その場に倒れ込んだ。

### 神名 V s 伴子

伴子「ふふつ。あなた、私に勝とうと思っていない？」

神名「だとしたら、どうするの？ あなたこそ、私には負けなくて思ってるんじゃないの？」

伴子「あなた、面白い事言っわね。私があなたに負ける訳無いでしょ」

神名「あら、面白かった？ あなた関西人じゃないのかしら？」

今のに笑いが何処にあるのかしらね」

伴子「じゃあ、無駄口はこれくらいにして始めましょうか？ 私も、聖史の手伝いに行かないといけないしね」

神名「そうね。早く正志君達と合流しないといけないからね」

神名と伴子は、まるでゴングの音が聞こえたかのように、ほぼ同時に駆け出した。

始めに仕掛けたのは伴子だった。伴子は、神名の目の前まで走り込むと、残像を残し消えたかと思うと、神名の後ろから背中を斬り付けた。神名は、残像には見向きもせず、伴子が消えた瞬間、動きを止め、後方に危険を感じると、スツツとしゃがみ込んだかと思うと、最下段の回し蹴りを放った。足元をすくわれた伴子は、バランスを少し崩したが、すぐにバックステップしそのまま神名へ近寄ると、小細工無しの連撃を繰り返した。足に手応えを感じた神名はすぐさま振り返りファイティングポーズをとったが、伴子が突っ込んで来ると、連撃を避けるでもなく、連打を繰り返した。時折、神名の体や服がスパツと切れ血が滲み出していた。それでも神名は、連

打の手を休める事なく打ち続けた。この時見た目には変化は無いものの、伴子も神名の打撃がヒットし、腹部や胸部に痣が数ヶ所発生していた。手応えを感じ取った両者は、攻撃のスピードをアップさせ、完全に向かい合ったままの打ち合いになっていった。伴子の服に穴が開き、肌が露出したと思うと、皮膚の色はどす黒く変色し、数ヶ所から黒い体液が流れ出していた。神名の服も切り裂かれ、もう既に下着のみで戦って

いるような状態で、体の至る所に裂傷があり流血していた。しばらく、打ち合いが続いた後、突然神名がひざまづき、攻撃の手を止めた。神名の腹部に大きな傷が開き、大量に出血を始めていた。

伴子「あら、もう終わりかしら？ 負ける気が無いとか言っておきながら、呆気ないわね。だから言ったでしょ、私には勝てないってね」

神名「ふふつ。惨めねあなた。痛みに鈍感なのね。その体で勝ったつもりなの？ じゃあ、もう一戦してみる？」

神名は、腹部の傷を押さえながらフラフラと立ち上がると、フアイティングポーズをとった。

伴子「そう。死にたいのね。じゃあ、今楽にしてあげるわ！」

と、伴子が神名に斬り掛かるうとした瞬間、伴子の体がグラツツと傾くとそのまま前に倒れ込んだ。

神名「バカね、あなた。それだけお腹にダメージ受けてたら、普通なら立っているのもやつの筈よ。それが分からないくらいあなたは鈍感なのよ！」

と言うな否や神名は、伴子の上にマウントポジションを取ると、顔面に連打を打ち込んだ。神名が伴子から離れると、伴子の顔面はもう原形を留めていなかった。

神名「正志君、ごめんね。私、追い付けそうにないわ」

神名は、腹部を押さえながら倒れ込むと呟いた。

中田「ババア！やるじゃねえか！」

坂下母「当たり前前よ。私だって少し前までは、この子達仕切ってたのよ」

激と坂下母は、ぎこちないながらも連携のとれた攻撃で、モンスター達を撃破していた。中田「よおし、終わりが見えてきたぜえ！」

坂下母「後もう少しよ。あんた頑張りなさいよ。」

百を超えていたモンスターの大量も、既に数える程に少なくなっていた。調子に乗った激が、数体のモンスターに飛び込んで行った時だった。

坂下母「ギヤア！」

突然、坂下母が悲鳴を挙げて倒れ込んだ。

中田「どうした、ババア！」

激が近寄ると、背中一面に深い五本の斬り傷を受けた坂下母が、大量の出血と共に横たわっていた。

中田「テメエら！老体相手によつてたかつて何してやる！うおりやあああ！」

激は、坂下母に傷を負わせたと思われる目の前のモンスターを薙ぎ倒すと、坂下母に駆け寄った。

中田「おい、ババア！こら！返事しろよ！おい！浩二はどうすんだよ！おいってよ！ババア！」

激は頬を叩いたり、肩を揺さ振ったりしながら、大声で叫んだが、もう坂下母が声を発する事は二度と無くなっていた。

中田「テメエら！もう、許さねえ！皆殺しだ！……ゴフッ！！グフッ！！」

激が鬼のような形相で立ち上がった時、激の腹部に爪が突き刺さったと思うと背中へと貫通していた。

中田「テメエ！これで終わりじゃねえぞ！まだ、俺は生きてるぞ！後はテメエらだけなんだ、刺し違えてでもテメエらは殺し

てやる！ ああああああああ！！」

気合いと共に腹部に突き刺さった爪をへし折ると、激はその爪を腹部より抜き出し、チェーンにくくり付けると、それを力任せに振り回し始めた。ただでさえ鋭利な爪は、チェーンの遠心力を得て、触れると一刀両断の武器へと変化していた。身の危険を感じ後退を試みたモンスター達だったが、既にチェーンが通り過ぎた後で、動こうとした途端、体が二つに分断し、その場に崩れ落ちていった。

中田「へへっ。な、俺だってやりゃあ出来るだろ。」

激もまた蒼白な顔でその場に倒れ込んだ。

## 決着

### 頼 V s 浩二

浩二「貴様の事は、正志殿よりよく聞いておるぞ」

頼「じゃあ、気が抜けねーな。お前の事は、名前以外聖史も知らねーみてーだったしな。まあ、誰が相手だろーが、俺は負けねーぞ」

浩二「正志殿と手合わせした時もそうであつたが、貴様らはどうしてそんなに自信満々なのじゃ」

頼「初めから負けると思つて勝負するバカいねーだろ。勝てると思つてつから、勝負すんだよ」

浩二「貴様は、人間であろつ。なのに何故、人間を超越した我に勝てると思ふのじゃ」

頼「お前、バカだろ。俺が、お前らがここに来るまでの事知らねーと思つてんじゃねーか？ お前らが、攻めて来た時から、俺は見てんだよ。お前が、他の奴らには貴様呼ばわりするくせに、正志には『殿』を付けて呼んでいる。これはお前がさっき言った手合わせで、正志に負けた証拠だろ。という事は、俺も勝てるって訳じゃねーか。よく考えてしゃべれよ」

浩二「確かに正志殿には、遅れをとつた。しかし、貴様に負ける道理は無いであろつ」

頼「まあ、話しても分かんねーだろーからよ、俺とも手合わせしたらよく分かんじゃねーの。手合わせって言つても、死合になつちまうけどな！」

頼は、自分の言葉が終わると、鬼包丁を肩に担ぎ浩二の方へ飛び掛かつてきた。浩二は、頼が飛び出したと同時に両手の爪を長く伸ばし、防御姿勢に入つたが、頼は目の前に来るとサツと消え去つた。浩二は頼が奇抜な攻撃に入ると見て、辺りを見渡すようにした

が、頼は消えた場所に消えた時と同じような姿勢で現れると、鬼包丁を横一閃に振り払った。不意を突かれた浩二は、鬼包丁の斬撃を爪で受け流し、上方へ流すとそのまま空いた手で、頼の腹部へ斬撃を繰り出した。浩二の斬撃が頼を捕えたと思った瞬間、浩二は目を疑った。上方へ受け流し、その重みに翻弄されている筈の頼が鬼包丁を片手で自由に捌き、もう一方の手にもう一本の鬼包丁を握り、爪の斬撃を防御していたのだった。

頼「へっ！ 驚いたろ。鬼包丁の二刀流だ！ これがまた軽いーんだ。何故か知らねーが、何も持ってたねーみてーなんだな。これでまた一步お前に勝ちが無くなったぜ。……今度は、お前が打ち込んできてみるよ！」

そう言っていると、頼はサツつと後ろに下がり鬼包丁を、一つは前に盾のように持ち、もう一つを肩に担いで仁王立ちになった。

浩二「貴様！ 我を愚弄する気が！ よし、そこに立つておれ、今斬り刻んでやろうぞ！」

浩二は頼に向かって大声で叫ぶと、頼目掛けて突撃した。スピードを活かし、頼の前後左右より不規則に斬撃を繰り出した……が、全て動きを読まれているが如く、鬼包丁の鉄面で弾かれていた。浩二は、スピードアップする為、容姿形態をバケモノに変化させ、再度斬撃を繰り返したが、結果は変わらずやはり全てを弾かれていた。頼「駄目だな。駄目だ。お前、正志と手合わせしたって言ったよな？ あいつ何も教えてくれなかったのか？ そんな攻撃じゃ絶対俺には勝てねーぞ。お前、スピードに頼り過ぎなんだよ！ 確かに速え。でも、それだけだ。お前は不規則に動いて、相手に次の攻撃場所を読まれねーよーにしているみてーだけど、俺には見えんだよ。お前のその怒りに満ちた気配がよ。攻撃なんてお前ら近距離タイプは、気配のする方から絶対飛んでくるんだからよ、かわすなんてわけねーんだよ。お前、やっぱ俺には勝てねーわ。諦めて降参したらどーだ？」

浩二「貴様あ！ 云うに事欠いて何だとお！ 我に戦わずして、

負けを認めると言うのか！」

怒りに身を染めた浩二は、体を震わせ顔が真っ赤に染まっていた。頭から湯気のような煙を出し、体中の毛が今にも飛び去りそうなくらい逆立っていた。

しばらくすると、浩二の目に平静が戻り、表情が穏やかになったかと思うと、バケモノのような容姿が崩れ、浩二の姿に戻っていた。

浩二「ふっ。我としたことが怒りで自分を見失うところであったわ。……確かに、貴様に言われた通り正志殿よりスピードに頼り過ぎた戦闘方法だと指南は受けた。……そうであつたな、それでは続きを行おうか。敵に塩を贈った自分の愚かさを後悔するがよい」

頼「おおっ！ 何か感じが違わねーか？ やつと本気かよ。待たせんじゃねー！ ほら！ きやがれ！」

身構えた頼目掛けて突撃して行くと、伸ばした爪を更に伸ばし、頼を抱きしめるようにすると、素早く後ろに下がった。頼は突撃の後方からの攻撃に、鬼包丁を合わせる事が出来ず、上体を屈め攻撃をスルーした。浩二は、攻撃をかわされると同時に蹴りに移行し右足でのハイキックを放つとその勢いのまま、上体を倒すと右手での斬撃を連続で繰り出した。浩二は、隙の多い移動を増加した攻撃を封印し、頼の正面から上下幅の大きい攻撃を繰り出し、時折不意に伸びた爪で正面から背部攻撃を行った。

頼「やりやー出来んじゃねーか！ おーし、俺もマジでやんねーとな！ 受けてばっかじゃ悪いからよ！」

と言うと頼は、一歩下がると、鬼包丁をブンブンと振り回し、バトルフォームへと変換した。

## 正志 V s 聖史

聖史「うわあ！ 痛っ！ ……本当だ。正志兄ちゃん本当に強くなってる。でも、それ頼兄ちゃんの刀でしょ。人の物使って強くな

っても、強くなつたつて言わないんじゃないかなあ」

正志「ガキが言ってくれんじゃないか。でもよ、コイツのおかげで強くなつた訳じゃねー！ コイツは一要因に過ぎねーんだよ！ お前も、そろそろ本気出しやがれ！」

聖史「ふう。じゃあ、本気でいくよ。でも、驚かないでね」

聖史「…………貴様か、我を呼び出したのは。ほう、姿が変わるのが不服のようじゃの。安心せい。この宿主の潜在能力以上を発揮してやるからの。では、参ろうか」

聖史は突然両手をだらんとさせたと思うと、その場から姿を消した。時折宙がキラツと光ると、正志の体にビシツと傷が入った。正志は、神経を集中させ攻撃の瞬間を読み取ろうとしたが、光を発する場所と攻撃を受ける場所が定まらず、防戦に徹していた。聖史は、残像も残さぬスピードで動き回り、爪と爪を合わせて火花を散らすと、少し動いた後、爪での斬撃を繰り返していた。正志は、かわせないという悟り、体を回転させるとそのまま火炎放射を行った。が、攻撃は止まったものの、時折光が見えるだけで聖史は姿を現さなかった。

正志「すげーな、お前！ 見えねーよ。どーすつかな？ このままじゃ、俺の負けじゃねーか！」

聖史「姑息な奴よ。それで我が止まるとでも思つたか。貴様の浅はかな考えなど、御見通しよ！ 我に火など効かぬぞ。そろそろ遊びは終わりじゃ！」

正志「へっ！ 姑息つてか！ でもありがとよ！ 今の会話で、もう見えねーお前は終わりだ！ ……その証拠に、そこだあ！」

正志は、そう言う正面に駆け出し、サバイバルナイフを大きく振りかぶると、そのまま斬り付けた。

聖史「何が終わりじゃ。全く見当違いではないか。…………な、なんだと！ 偶然じゃ！ 偶然に決まっておる！」

正志の後方に姿を現した聖史の腹部に深々と長刀が突き刺さっていた。聖史は、刀を両手で掴むと体を後ろに下げ刀を抜き取った。

正志「偶然ねえ、マグレかどーか試してみれば分かんじゃねーの？ その度に、でけーダメージくらってたら世話ねーけどな！」

聖史「貴様の挑発に我を忘れる我ではないわ！ ただの偶然で頭に乗っている貴様に、強さとは何かを体で教えてやるわ！」

そう言つと聖史は、また姿を消したかと思うと、宙に火花を散らし始めた。

正志「嫌だねえ、自信家つてのわ。自分の結果が見えてねー。マグレじゃねーつてのを教えてやんねーといけねーみてーだな！」

正志もまた、いつものスピードスタイルに入ると、呼吸を整えた。  
.....

正志「甘えーよ！ 余裕！」

正志が声を挙げ、刀を一閃した瞬間、爪の攻撃をサバイバルナイフで遮られ右足に刀を突き立てられた状態で聖史が姿を現した。

聖史「ぐっ！ がはあっ！ ま、まさか、まさか本当に我の動きが見えるのか！」

正志「見えねーよ！ そんな速えーの、見える訳ねーだろ！ 感じんだよ。お前の気配、闘気、殺気を目じゃなく心で感じんだよ！ 初めは分かんなかったけど、お前が喋ってくれたおかげで絞り込めたんだよ！」

聖史「なるほどな、見えぬ故、目を開けたまま心眼を使うた云うことか。貴様の能力には恐れ入る。だからといって、我に勝てる等と思うてくれるなよ！」

正志「口だけは達者なバケモノだな。その足じゃ、もうさつきみてーなスピードは出せねーぜ！」

聖史「俗物が云うてくれるわ。だが、速さなど無くとも何とでもなる。貴様、我を誰だと思つておる。我は『キラヘル』殺戮の化身であるぞ！」

そう言つと、聖史は消える事無く正志に向かって突進してきたと思うと、握りしめた右腕で正志を殴り付けた。正志は、釘バツトで殴り付けをガードしたが、気が付くとかかなり後方まで吹っ飛ばされ、

バットは粉碎していた。

正志「今度はパワーかよ！ 懲りねー奴だな！ ……それならそれで、こっちにも戦い方ってヤツがあるんだよ！」

と正志は聖史目掛けて、飛び出して行った。

## 頼 V s 浩二

頼「おらおらおら！ スピードってのは、こうやって使うんだよ！ おらおら！ どうした！ 受けてばっかしか！？」

頼の連続斬りに、浩二は腕の甲を甲羅のように変化させ、受け捌き続けていた。

頼「いつまで続けんだ？ …… 防御も飽きてきたろ？ …… それとも、防御出来ねーようにしてやるーか！？」

その言葉と共に、頼は鬼包丁を一つに束ねると、両手で振り回した。

頼「これよお、軽そうに見えっけど実はスゲー重てえんだぜ！ 名付けて『ギロチン』 受けてみやがれ！」

頼は鬼包丁の連撃を放ち、鬼包丁を束ねて大きく振りかぶると、浩二目掛けて振り下ろした。 …… ガボウと鈍い音とドスツと音がし、浩二が左腕の甲でギロチンの斬撃の受け流したかのように見えた瞬間、頼の左足に浩二の長く伸びた爪が突き刺さっていた。 が、ギロチンは左腕に受け流される事なく、地面に突き刺さっており、浩二の左腕は、二の腕部分から切断され、暫くしてからドサツと音と共に地面に落ちた。

浩二「ううおおおおお！！ 腕があ！ 我が腕があ！！ よくも我が腕をおおお！！ 許さぬ！ 許さぬぞおお！」

頼「くううう！ いてええゝ！ ふ、ふふ、ふはははは！ あゝははははは！ 痛えけど、腕一本取ったぜ！」

浩二の目の前で大笑いする頼に、浩二は右腕を頼の足から引き抜くと、頼の首を目掛けて斬撃を放った。 …… が、ガガガッと音が聞

こえると頼は既に笑っておらず、浩二の爪は鬼包丁に突き刺さっていた。

頼「甘えーよ！ もう一本もらった！」

と頼が右手で鬼包丁を振り下ろすと浩二は、突き刺さった爪を引き抜こうとしたが、思いのほか深く突き刺さっており、浩二の肩に鬼包丁が激突したと思うと、グチャアと音が聞こえ浩二の右腕は、鬼包丁に突き刺さったまま体から離れていった。

浩二「ぐぎやああああああ！ う、腕、腕があー！ こ、殺されるう！ た、助け、助けて！」

のたうち回る浩二を見下ろしながら頼は「じゃあな！」と言うと、左右の鬼包丁を交差するように左右から一閃した。

頼「名付けて『クワガタ』 コイツらの最後のダブルアタックだ！」

浩二にヒットしたクワガタは、浩二の首を胴体から切断し、浩二の爪の刺さった鬼包丁を無傷の鬼包丁が粉碎していた。

浩二「し、死にたく、死にたくない。助け、助けて。」

首だけになった浩二は、頼を見上げながら涙を流しながら命乞いをしたが、「さすがバケモノ頭だけになっても、生きてやがら。じやあ、さつさと死ねや！」と鬼包丁の背で叩き潰され、物言えぬ黒い塊に変化していった。

頼「『ホリスタ』か。たわいもねー！ 後は……… っと、待つてろよ！」

と、跡形もなく黒塊となった浩二を見下ろすと、頼は鬼包丁を肩に携え、足を引きずりながら、天守閣の下へと向かって行った。

## 正志 V s 聖史

聖史「何がそれに応じた戦い方じゃ！ 人間風情が我に敵うとも思ったか！ 貴様の速度など我にとつては、速くも何も感じぬわ！ …… このまま、へしゃげて死んでしまえ！」

パワータイプに変わった聖史に、スピードアタックを仕掛けた正

志だった、簡単に攻撃を見抜かれ、今逃げ場は無く、壁に押し込まれた状態で、聖史のサンドバック状態になっていた。サバイバルナイフと長刀は、元の形を想像出来ない程いびつに折れ曲がり、また火炎放射機もガスを使い果たし、ただの空き缶と化していた。それでも正志は、不気味な笑みを浮かべ、変形した両刀で聖史の攻撃を受け続けていた。

聖史「そろそろ潮時よの。もう、その刀では攻撃することも叶わぬだろうて。……最後に何か言いたい事があれば聞いてやるぞ」

そう言つと聖史は、少し離れ不敵に笑みを浮かべた。

正志「はあ、はあ。す、すげーな、お前。すげー、強えーよ。はあ、はあ、はあ、はあ。最後……か。そうだな、……俺も……お前側……だったら……よかつ……た……かな。……って頼！ くそおつ！ この場面で2対1かよ！ 駄目だ。マジで死ぬわ」

足を引きずりながら、頼は正志の方へ近付いて来た。

聖史「頼よ。良いところへ戻った。貴様が戻ったと言う事は、『ホリスタ』は消滅したということか！ ……それでは、その俗物を貴様が斬り捨ててしまえ！」

聖史は頼の背中に向けて、勝ち誇つたように笑いながら命令した。正志「マジかよ。あのオッサン死んだのかよ。頼、お前すげーな！」

頼「よう！ 正志！ 久しぶりだな！ 俺、強くなっただろ！ へへっ、これで、最後にしよーぜ！ 正志！」

と頼は大きく鬼包丁を振りかぶった。

ガツと音がなった瞬間、正志は死を受け入れたつもりだった。が、痛みも無く、恐る恐る目を開けると目の前に鬼包丁が突き立てられていた。

頼「正志！ これで終わりにしよーぜ！ これでヤツの首を取れ！ バケモノは、消し去ってやるーぜ！」

聖史「貴様あ！ 裏切る気か！」

頼「裏切るも何も、俺は聖史に強くしてやるって言われただけだぜ！ お前らの仲間になった覚えはねー！」

聖史「この裏切り者があ！ 貴様もろともあの世に送ってやるわ！」

聖史は、怒りの形相で二人に向かって歩き出した。

正志「頼、悪い。これ受け取れねーわ」

と正志は、鬼包丁を手に取ると上に放り投げた。

聖史「賢明な判断じゃな。無駄に抵抗するよりも死を選ぶか。その判断に免じて、楽に逝かせてやろうぞ」

聖史は、正志に近付くと手を広げ爪の斬撃を正志の首筋目掛けて放った。

頼「正志！」

.....。

正志「悪い。嘘だ」

そう言うのと正志は落ちてきた鬼包丁を握ると、落下のスピードに合わせて体を回転させ、一閃の斬撃を放った。

聖史「き、貴様。貴様ああー！」

体から離れた聖史の頭は、正志を見上げて悔しそうに叫んだが、正志が鬼包丁を地面に置くと同時にグチャツとトマトのように砕け散った。

正志「へへっ、やったぜ。.....勝ったぞお！」

頼「やっぱり俺達、最強ーだな。な、正志！」

正志「ったり前じゃねーか！.....って重っ！ 何、突然」

頼「痛い！ 体中がちぎれそうだ」

勝利を噛み締める二人だったが、突然全身の痛みと虚脱感に襲われ困惑した表情になった。

声「ありがとう、戦士達よ。これで不浄者の断罪が完了しました」  
突然声が聞こえ、正志と頼は軋む体を支え合いながら、バトルフォームをとろうとした。

正志「新手か！」

頼「今度は誰だ！」

声「私の名は『ジェミナル』二人で一つ、一人で二つの存在。私は断罪者。数多の次元において、混沌を引き起こす者に永久の眠りを与える者。私は、あなた達の精神に同調し、あなた達に力を与えてきた。私は肉体を持たない為、能力の高い者に憑依しその能力を飛躍的に高める事が出来る。あなた達の体を借りて、今、不浄者『キラヘル』と『ホリスタ』の断罪が完了しました。私は、あなた達と争う気はありません。ありがとう、戦士達よ。もう、あなた達に人間離れた能力はありませんが、私が憑依していた事により、普通の人よりもその能力は強くなっているでしょう。では、さようなら。この次元の戦士達よ。」

声が消えた途端に、そこに感じていた気配も消え去り、ただ静寂だけが二人を包み込んでいた。二人もまた、『ジェミナル』の力が抜けた事により、気を失い倒れ込んでいた。

## 責任

矢馬鍋「急げ！ あっちだ！ 早くしろ！ 手遅れになるぞ！」

沢山の救急隊員を引き連れて、矢馬鍋は大阪城へと向かっていた。救急隊員「……大丈夫ですか？ ……息はあるが、酷い怪我だ。早く病院へ搬送！ どこでもいい！ 近くの病院だ！」

矢馬鍋の連れて来た救急隊員によって、激・霧斗・神名・頼・正志の五人は病院へ運び込まれ、同じ病室にて絶対安静の状態になっていた。

矢馬鍋「良かった。君達が死んだらどうしようかと思ったよ。…さて、私も私の決着を着けに行こうかな」

五人に囁くように言葉を発すると、矢馬鍋は静かに立ち上がり、病室を跡にした。

穴渕「せ、先生何を」

矢馬鍋「すまないな、穴渕君。私の研究意欲の為にこんな事になつて。……今、楽にしてあげるからね」

穴渕「ちょ、ちよつと待つて。待つて下さい、先生！ 何、何するの！？ いや、嫌ああ！ 助け、助けて先生！ この子を殺さないで！ イヤあああ！！」

穴渕は中絶台に乗せられ、頭と四肢、胴体を拘束された状態で半狂乱に叫び続けていた。

矢馬鍋「すまないな穴渕君。あの子達が、せつかくバケモノ共を駆逐したのに、君に宿ったバケモノを野放しに出来ないのだ。……君が、望んで手に入れた子供では無い筈だ。許してくれ。こうする他ないのだよ」

頭を振り、発狂したかのように泣き叫ぶ穴渕を余所に、『ホリスタ』の子の中絶は開始され、穴渕が気を失い気が付いた時には、ベッドの上に寝かされていた。

『ホリスタ』の子は、穴淵腹から摘出された途端、近くにいた助産婦に噛み付こうとしたが、矢馬鍋に押さえ込まれ身動きを封じられた状態で、頭部にハンマーで強打撃を受け、頭部が潰れ動かなくなつた。

穴淵「先生。あの子は？あの子は、どうなつたの？」

目を醒ました穴淵は、ベッドの脇のパイプ椅子に座り、穴淵の手を両手で握り締めていた矢馬鍋に尋ねた。

矢馬鍋「『ホリスタ』が死んだ為かな。君のお腹から出てきた時には、もう死んでたよ。……君は、今回とんでもないアクシデントに見舞われた。私にも十分な責任がある。……こんな時に、こんな事を言うのは、いけない事なのかもしれないが、君は私が責任を持って養つていくからね。……どうかな？」

矢馬鍋の言葉を聞き、力を失つた穴淵だったが、暫くすると矢馬鍋の手を強く握り返し、「よろしくお願いします。先生。今度は、ちゃんとした人間の子を、先生の子を私産むから」と言つと矢馬鍋に無理矢理ニコツと微笑みかけた。

## 終幕

当たり前前の日常が、戻っていた。徘徊する植物は、もういない。人を襲う狂暴な動物も、もういない。特殊な能力を持った人間もない。子供達は、元気に学校へ行き、大人達は毎日の生活に追われ、何も変化のない生活が戻っていた。

ニユースキャスター「続きまして次の話題です。動植物を中心に広がりをもせた新型のインフルエンザですが、突如にして観測されなくなりました。病院関連の施設に確認を行っておりますが、何処の施設も具体的な返答は返しておりません。……………」

中田「当たり前じゃねえか。もういねえんだよ『キラヘル』わ。って言うても、コイツらこんな話信じねえんだろうけどな。…………どうでもいいや。仕事行こ。……渚、愛里、行ってきます」

神名「ねえ霧斗。私、道場開こうと思うんだけど、どう思う？」

霧斗「止めとけって。と言っても君は聞く耳持たないんだろ。」

やりたいようにやれば、いいんじゃないかな」

神名「うーん。そうねえ。正志君や頼君を師範に呼んだら、ものすごく人気出ると思うんだけどなあ」

霧斗「それは止めとけ。彼らは、もう学生なんだ。武闘家じゃないんだから」

神名「それもそうね。山里流で、子供達から一般の人達まで門戸を広く開いて、日本一になってやるんだから。……って霧斗！早くしないと遅刻するわよ！……いつてらっしやい、気をつけてね」  
霧斗「あ、ああ、行ってきます。……神名のやつ、どこまで本気なんだか……………」

神崎正志：100mダッシュ0.32秒。重量挙げ片手で43Kg  
栗原頼：100mダッシュ0.56秒。重量挙げ片手で58Kg

頼「なあ正志、気をつけねーと今度は俺達が、バケモノ扱いだぞ」  
正志「ああ、そうだな。まあ、お前の言うレベルアップした為だろーけどな！」

頼「平和になったのいーけど、俺達住み難くねー？」

正志「バケモノがいるより、いーけどな！ 行こうぜ、頼！ あんましゆっくりしてたら、遅刻になっちまうぞ！」

学生服を着た二人は、他の人間には見え難いスピードで走って行った。

完

## 終幕（後書き）

「」で話を進めている部分があり、読みにくかったかもしれないが、ご了承ください。

最後までお読み頂きありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3968o/>

---

俺達のRPG物語（改）

2010年11月26日10時10分発行